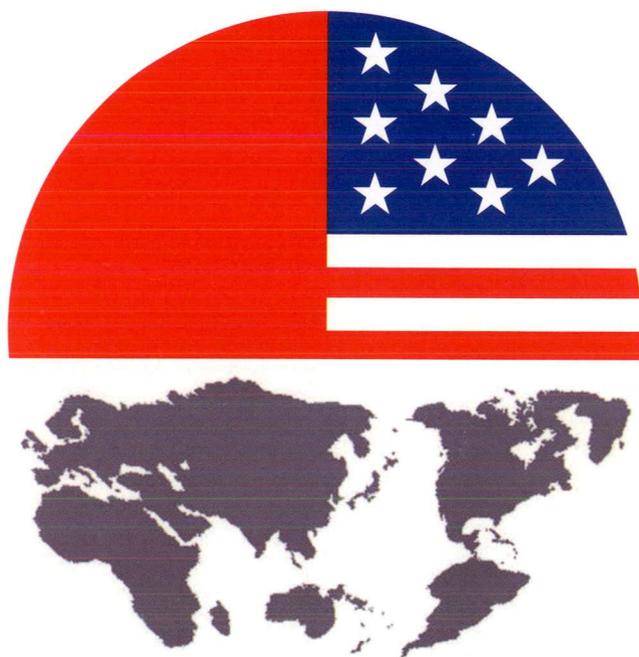


第 65 回日米学生会議 日本側報告書

The 65th Japan-America Student Conference



共鳴から生まれる新たな可能性
～個から社会、今日から未来へ～

Share, Respect, Reflect:

Reimagining the Future, Together

第 65 回 日米学生会議 日本側報告書

目次

序章	日米学生会議概要	3
第1章	第65回日米学生会議概要	9
	第65回日米学生会議概要	10
	日本側参加者名簿	13
	米国側参加者名簿	14
	内閣総理大臣メッセージ	15
	メディアへの掲載	16
	Conference Song	18
第2章	事前活動	19
第3章	本会議・サイト活動	31
	京都サイト	32
	長崎サイト	40
	岩手サイト	48
	東京サイト	61
第4章	分科会活動	67
	アジア太平洋地域における日米安全保障	68
	グローバル化と食の安全保障	76
	市民と政府の役割と責任	88
	現代における日米両国の教育問題	98
	環境問題と社会	109
	マイノリティーと差別	118
	情報技術と文化	134
第5章	参加者の声	145
第6章	第66回日米学生会議概要	175
第7章	日米学生会議にご協力いただいた方々	179

序章

日米学生会議概要

第 65 回日米学生会議実行委員長挨拶

第 65 回日米学生会議実行委員長

竹内 正人

第 65 回日米学生会議のプログラムを企画し始めた昨年の秋、日米関係は普天間基地移設問題の迷走などにより停滞し、その一方で、日本の周辺海域においては竹島や尖閣諸島の領有権問題で政治的な緊張が高まっていた。このように東アジアの安全保障環境が急速に変容する中、日本はアジア太平洋地域においてどのような役割を自ら果たし、米国と共にどのように平和と安定を構築していくのか解決すべき課題が山積していた。

第 65 回日米学生会議は「共鳴から生まれる新たな可能性～個から社会、今日から未来へ～/Share, Respect, Reflect: Reimagining the Future Together」を総合テーマに掲げ活動してきた。自分とは全く異なったバックグラウンドを持つ者同士が、4 週間共に生活し成長してきたことを思うと今でも胸が熱くなる。独自の価値観に基づき自分の意見を持った参加者が、互いに相手の考えを理解するまでには多くの時間を要し、そのため議論は日々衝突や葛藤の連続であった。学生会議における議論は微力であり、その議論が社会に大きな影響をもたらすことは直ぐには望めないであろう。しかし、対話や議論を積み重ねることが、必ずや 10 年、20 年先の日米関係に変化をもたらすと信じ、些細な問題も差別せず、真剣に向き合い議論した。

第 65 回会議は日本で開催され、京都、長

崎、岩手、東京の 4 都府県を訪れた。Share : 互いの意見を共有した京都サイト。Respect : 互いの考えを尊重し合った長崎サイト。Reflect : 自分達が行ってきた議論を振り返った岩手サイト。Reimagining the Future Together : 成果をまとめ、社会への発信に挑戦した東京サイト。各開催地では、その地域に特有な問題に焦点を当てたプログラムが企画され、多くの人々と出会い、数々の得難い体験を積み重ねることにより、新たな絆を築くことができた。その絆は、今後人生を切り拓いていく上で大きな力となるであろう。またそれは日米学生会議の成果として世界のあらゆる場所で花開き、世界を動かす大きな力ともなるであろう。

LIFE-CHANGING SUMMER. 人生を変える夏。私自身、昨年日米学生会議に参加したことにより人生が変わった一人である。所属していた分科会の活動や会議のプログラムを積み重ね、様々な人と出会っていく中で「自分の人生を変えられた」ような感覚を得た。自分が経験したこの感覚を今年の参加者にも実感して欲しいと考えた。もちろん、人間一人の人生を変えることは容易なことではなく、また決して強要できるものでもない。今回の会議で参加者の人生が劇的に変わったかどうかは分からないが、少なくとも会議の場では、参加者は今まで以上に自分と向

き合おうとしていたように思われる。この日米学生会議には、自分と真剣に向き合うことにより「今までの自分を変える」ことができる不思議な力が宿っていると思う。単なる学生会議に留まらない理由が、そこにあると実感している。

最後になりましたが、第 65 回日米学生会議開催に際し、多大なるご支援、ご協力を賜

りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団、企業の皆様、貴重なご講演をいただいた講師の皆様、日頃から大変お世話になった一般財団法人国際教育振興会、ISC の皆様、そして現役学生の活動を支えて下さった OB・OG の皆様、そのほか様々な形でご支援、ご協力を頂いた全ての皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生教会(日本国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名(うち22名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第

6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下であり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本で開催された。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側参加者が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から学生を招集する形態

で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年を以って、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形で会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者として責任を取ることで会議を再開することが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に

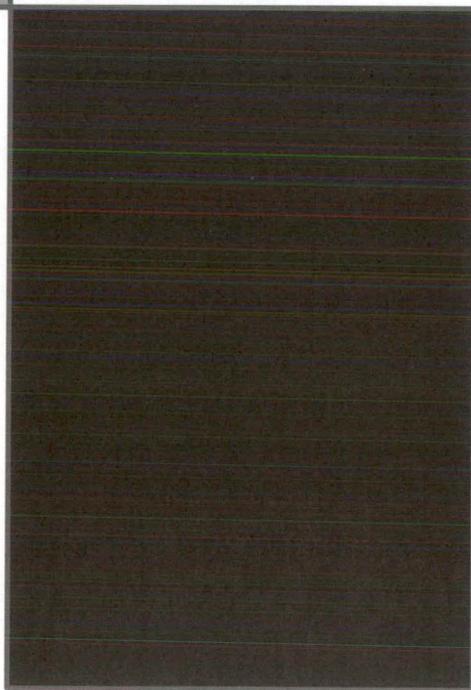
移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者により JASC, Inc. が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会と JASC, Inc. の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側支援団体である JASC, Inc. は ISC, Inc. (International Student Conference) と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると見えよう。

本文中の略語について

JASC(ジャスク)	:日米学生会議(Japan・America Student Conference)の略。
JASCer(ジャスカー)	:日米学生会議参加者を指す。
IEC	:日本側主催団体である国際教育振興会(International Education Center)の略。
ISC,Inc	:アメリカ側主催団体である International Student Conferences ,Inc の略。
EC	:実行委員会、または実行委員 Executive Committee の略。
AEC	:米国側実行委員会 American Executive Committee の略。
JEC	:日本側実行委員会 Japanese Executive Committee の略。
デリ、デリゲート	:日米学生会議参加者、Delegate。
ジャパデリ	:日本側参加者。
アメデリ	:アメリカ側参加者。
アラムナイ	:日米学生会議の過去の参加者。
サイト	:本会議開催地の意味。
RT	:参加者がいずれかに必ず帰属する分科会のこと。Round Table の略。
リフレクション	:参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。

第1章
第65回
日米学生会議概要



第65回日米学生会議概要

「共鳴から生まれる新たな可能性～個から社会、今日から未来へ～」

-Share, Respect, Reflect: Reimagining the Future, Together-

第65回日米学生会議は、「共鳴から生まれる新たな可能性～個から社会、今日から未来へ～」を総合テーマとして掲げ、京都、長崎、岩手、東京の4都府県で開催される。

現在の日米関係は、沖縄米軍基地そのものを批判する地元住民と政府との軋轢や普天間基地移設問題の迷走により停滞しているが、その一方で日本の周辺海域においては、竹島や尖閣諸島などの領有権問題で政治的な緊張が高まっている。日本は、このように安全保障環境が急速に変容する中、アジア太平洋地域においてどのような役割を自ら果たし米国とともに平和と安定を構築していくべきなのか。また、同地域において、各国は、自由貿易の推進により低迷している経済浮揚を求め、2国間や多国間でFTA自由貿易協定やTPP環太平洋経済連携協定の交渉が進められている。日本は、これらの協定に参加し市場開放や規制緩和により、構造改革を推進していく必要があるのではないかと。規制に守られた国内産業や既得権益者の保護を続けるだけで、日本経済を再生することはできるのだろうか。急速に進展するグローバル化の中で、解決しなければならない課題は山積している。

そのような中開催される第65回日米学生会議では、今日のグローバル社会において、異文化と共生し共存するためにどのような資質や能力が必要なのか会議の様々なプログラムを通じて発見し認識することを目指す。そのためには、まず一人一人が育ってきた環境や使用している言語、価値観に違いがあることを受け止め認め合うことから始まる。その際、意見の衝突や文化の違いによる葛藤もあるであろう。しかし、意見の違いを認めつつ、互いの考えを尊重し合うことで共鳴が生まれ、そこから新たな可能性を発見することができるのではないだろうか。これにより第65回日米学生会議が提起する様々な問題に対して解決策の糸口が見えてくるであろう。「個から社会」。個の考えや信念を出発点として、次代を担う学生が、日米関係や社会の礎を築く原動力となる。「今日から未来」。本会議のプログラム一つ一つから学び取る体験を今日の成果として、未来を築き上げる糧としていきたい。参加学生一人一人が、相互理解を通して異文化共存の国際社会の中で共に切磋琢磨し、人と人が絆で結ばれる社会の構築を目指し、果敢に挑戦していくことを期待する。

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第65回日米学生会議実行委員会

【会議開催期間】

2013年8月2日～2013年8月24日

【事業実施期間】

2013年4月1日～2014年3月31日

【開催地】

京都－長崎－岩手－東京

本会議におけるプログラム

《分科会（略称 RT）》

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生（実行委員1名を含む）が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第66回会議における分科会は以下の通りである。

(1)Regional Security in a Global Era

アジア太平洋地域における日米安全保障

(2)Globalization and Agriculture in the 21st Century

グローバル化と食の安全保障

(3)Social Responsibility and Government

市民と政府の役割と責任

(4)Modern Issues in Education

現代における日米両国の教育問題

(5)Environment and Society

環境問題と社会

(6)Social Minorities and Discrimination

マイノリティと差別

(7)Culture and Technology

情報技術と文化

《Field Trip》

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO 及び研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な具体的視点を獲得するための重要な活動となる。

《Special Topics》

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

《Conference Wide Reflection》

参加者が一同に集い、1ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違

第1章 第65回日米学生会議概要

いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

《Final Forum》

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、4週間の総まとめを行う。主として分科会における議論の概容を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を第65回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。

第65回日米学生会議参加者名簿

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
竹内 正人	東京藝術大学大学院	映像研究科メディア映像専攻	M1	—
川野 さりあ	順天堂大学	医学部 医学科	4年	教育
飯島 千咲	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	3年	安保
市毛 裕史	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	3年	差別
野口 ゆかり	慶應義塾大学	法学部 法律学科	3年	市民
Vu Hoang Minh	東海大学	教養学部 国際学科	4年	情報
森田 修弘	慶應義塾大学	法学部 法律学科	3年	環境
横田 真彩	筑波大学	社会・国際学群 国際総合学類	3年	食
日本側参加者	大学	学部・専攻	学年	RT
荒木 尊士	大阪府立大学大学院	工学研究科	M1	食
伊井 佐織	慶應義塾大学	経済学部	3年	情報
伊藤 孝真	京都大学	経済学部 経済経営学科	4年	教育
上江洲 仁美	慶應義塾大学	総合政策学部	1年	食
大西 由起	同志社大学	スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科	4年	教育
大沼 雄貴	東海大学	教養学部 国際学科	4年	市民
大野 峻典	東京大学	教養学部 理科二類	2年	差別
大日方 望	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	3年	差別
兼子 莉李那	上智大学	国際教養学部 国際教養学科	3年	差別
川口 真	東京大学	教養学部 文科一類	2年	市民
木村 優吾	早稲田大学	政治経済学部 国際政治経済学科	2年	食
小林 薫子	慶應義塾大学	法学部 政治学科	2年	環境
小松崎 遥平	慶應義塾大学	法学部 法律学科	3年	教育
古村 大和	国際教養大学	国際教養学部 グローバルビジネス科	2年	市民
白畑 春来	東京大学	工学部 化学システム工学科	3年	環境
鈴木 健司	立命館大学	法学部 法学科	3年	環境
鈴木 悠司	東京大学	理学部 物理学科	3年	情報
関口 響	法政大学	経営学部 経営戦略学科	2年	情報
中澤 彩	東京大学	法学部	3年	食
中村 優太	西南学院大学	法学部 法律学科	3年	安保
野口 真央	慶應義塾大学	法学部 政治学科	2年	市民
橋本 萌	慶應義塾大学	法学部 政治学科	2年	差別
浜田 りん	青山学院大学	国際政治経済学部 国際政治学科	2年	教育
三科 圭介	琉球大学	観光産業科学部 観光科学科	3年	情報
森 泰子	慶應義塾大学	経済学部	2年	安保
吉井 拓真	岡山大学	医学部 医学科	4年	安保
吉田 知史	同志社大学大学院	工学研究科 政治学専攻	M1	安保

安保＝アジア太平洋地域における日米安全保障、教育＝現代における日米両国の教育問題、市民＝市民と政府の役割と責任
 食＝グローバル化と食の安全保障、情報＝情報技術と文化、環境＝環境問題と社会、差別＝マイノリティと差別

第65回日米学生会議参加者名簿

<u>アメリカ側実行委員</u>	<u>大学</u>	<u>学部・専攻</u>	<u>学年</u>	<u>RT</u>
Paul Yarabe	Harvard University	Molecular and Cellular Biology	4	Chair
Nobuko Masuno	University of California-Berkeley	Psychology	3	Culture
Cruz Arroyo	Haverford College	English	2	Education
Santiago Cruz	Cornell University	Government	3	SR
Katherine Jordan	Wellesley College	French and Japanese	2	Minorities
Madison Mears	University of Wisconsin-Madison	Japanese	2	Environment
Patrick Meuer	Edgewood College	History	4	Security
So Nakayama	Macalester College	Economics and Asian Studies	3	Food
<u>アメリカ側参加者</u>	<u>大学</u>	<u>学部・専攻</u>	<u>学年</u>	<u>RT</u>
Dylan Adelman	Skidmore College	Asian Studies, Religious Studies	4	Education
Emily Aiken	University of Oklahoma	Chemical Biosciences	2	Food
Feruzha Azimova	University of Hawaii at Manoa	History	1	Minorities
Daniel Bateyko	Middlebury College	Undeclared (International Studies)	1	Environment
Karim Boyd	Villanova University	Physics	1	Environment
John Burke	Toyo University, University of Alabama	Japanese/International Business	3	Food
Kelly Cargos	Macalester College	Japanese Language & Culture; Psychology	4	Culture
Jee Eun Choi	Haverford College	Biology	2	Education
Sora Choi	Michigan State University	English/Japanese secondary education	3	Minorities
Michael Fitzgerald	Florida State University	International Affairs	3	Security
Pramodh Ganapathy	Duke University	Asian and Middle Eastern Studies	3	Minorities
James Kashima	University of Washington	Economics	3	Education
Drew Korschun	Duke University	Asian and Middle East Studies & Linguistics	1	Culture
Pin-Pin 'Alice' Liao	Villanova University	International Business/Management	1	SR
Sharon Lu	University of Wisconsin-Madison	Biology-Neurobiology Option	3	Minorities
John McCallum	Harvard University	Economics	1	SR
Paxton Misra	Smith College	Economics	2	Food
Norihito Naka	Tufts University	International Relations	1	SR
Bao-Quyen Nguyen	Smith College	Psychology	1	Culture
Brooke Nowakowski	Harvard College	East Asian Studies	1	Security
Yuki Numata	Pomona College	Undeclared (International Relations)	1	Environment
Robert Panis	Villanova University	Economics and Accounting	1	Culture
Miho Sakuma	Williams College	Liberal Arts	2	Education
Ryota Sekine	University of Chicago	Biological Sciences	4	Environment
Haley Sweeton	University of Maryland Baltimore County	Information Systems	1	Food
Jeffrey Yamashita	University of California-Berkeley	Comparative Ethnic Studies	4	Security
Ayaka Yoshida	Northwestern University	Undecided/Clarinet Performance (BM)	1	SR
Xiang Zeng	Johns Hopkins University	International Studies/ East Asian Studies	1	Security

内閣総理大臣からのメッセージ

第65回日米学生会議の開催を心からお祝い申し上げます。

日米学生会議は、1934年の開始以来、これまで80年近くにわたり、日米両国の学生の企画・運営により活動を続けてきた非常に歴史ある会議です。日米学生会議が脈々と歴史をつなぎ、両国の学生間の相互理解と友情の促進に大きく寄与してきたことを非常に喜ばしく思っています。私は、官房副長官であった2003年に、この日米学生会議に参加しました。世界の平和と繁栄のために役立ちたいとする若い皆さんの情熱や高い意識に感銘を受けたことを鮮明に覚えています。

言うまでもなく、日米同盟は我が国外交の基軸です。日米両国は、自由、民主主義、基本的人権、法の支配などの普遍的価値を共有し、国際社会が直面している様々な課題に協力して取り組んでいく関係にあります。私は本年1月に訪米し、オバマ大統領との間で、両国の強い絆を再確認しました。日米同盟の礎は人と人との交流です。その中でも特に若者の交流が重要だと考えています。

本年の日米学生会議のテーマは、「共鳴から生まれる新たな可能性～個から社会、今日から未来へ～」-Share, Respect, Reflect: Reimagining the Future, Together」と伺っています。両国の若い世代が幅広いテーマについて活発に議論し、まさに共鳴し合うことを通じて、有意義な提言が次々生まれてくることを大いに期待しています。

この日米学生会議を通じて、日米の若者の交流が更に大きく広がることを確信しています。そして、その次のステップとして、日米双方で学ぶ留学生が増加することを期待しています。残念ながら米国への日本人留学生は近年減少し続けていますが、しかし、この学生会議での議論や共鳴が、双方の留学生の増加を後押しする力になるものと期待します。

日米両国の未来を担うのは、皆さんを含めた両国の若者たちです。この会議が実り多いものとなり、末永い友情が生まれ、将来の日米関係の発展を支えていただけるよう心から祈念します。

平成25年8月3日
日本国内閣総理大臣
安倍 晋三

第1章 第65回日米学生会議概要

メディアへの掲載

【沖縄自主研修】

- 2013年6月23日 「県内学生沖縄学ぶ 日米学生会議事前勉強会 統治や基地問題」 (沖縄タイムス)
- 2013年6月23日 「県内外学生、日米学生会議を前に沖縄学ぶ」 (47NEWS)
- 2013年6月24日 「歴史継承を実感『日米学生会議』参加者」 (琉球新報)
- 2013年7月3日 「日米学生会議の参加者がキャンプ・フォスターを見学」 (米国海兵隊公式サイト)

【京都】

- 2013年8月8日 「学生紡ぐ 日米の絆 京の舞台で意見交わす」 (朝日新聞)

【長崎】

- 2013年2月17日 「8月に長崎で日米学生会議」 (47NEWS 長崎新聞)
- 2013年7月3日 「報道センターNBC 日米学生会議」 (長崎放送)
- 2013年7月4日 「県内26年ぶり 日米学生会議」 (YOMIURI ONLINE)
- 2013年7月5日 「県内トピックス 長崎で安保も学びたい」 (長崎新聞ホームページ)
- 2013年7月 「facebook 長崎市国際課 Nagasaki City International Affairs Division
第65回日米学生会議実行委員会の市長表敬訪問」 (長崎市国際課)
- 2013年7月 「市長の動き 平成25年7月上旬～中旬」 (佐世保市)
- 2013年8月10日 「日米学生会議平和と歴史について意見交換」 (NHK長崎)

【岩手】

- 2013年3月14日 「本県の復興発信へ抱負」 (岩手日報)
- 2013年3月15日 「日米学生会議 本県で初開催」 (読売新聞)
- 2013年3月 「日米学生会議 8月に岩手で初開催」 (NNNニュース/テレビ岩手)
- 2013年5月7日 「第65回日米学生会議 in 岩手『ホームステイプログラム』ホストファミリー大募集」 (岩手県国際交流協会)
- 2013年8月2日 「知事講演会開催のお知らせ」 (岩手県NPO・文化国際課)
- 2013年8月13日 「日米の若者復興に関心 学生会議本県日程開始 達増知事が講演」 (岩手日報)
- 2013年8月14日 「震災復興の現状学ぶ 日米学生会議始まる 盛岡でレセプション」 (岩手日日新聞社)
- 2013年8月14日 「日米学生会議被災市で開催」 (NNNニュース)
- 2013年8月15日 「日米学生会議『復興』刻む」 (岩手日報)

第1章 第65回日米学生会議概要

- 2013年8月15日 「被災地の現実忘れない 日米学生が宮古を訪問」 (岩手日報 Web News)
- 2013年8月18日 「日米学生会議が本県で開催 復興や地域活性化を議論」 (盛岡タイムス)
- 2013年8月18日 「日米学生 岩手に提言 盛岡で地域活性化フォーラム」 (岩手日報)
- 2013年8月18日 「『岩手の魅力化』日米学生が提言 盛岡でフォーラム」
(岩手日報 Web News/47NEWS)
- 2013年9月2日 「平和への祈りを込めて～日米学生会議～」
(IBC テレビ 県政番組「いわて希望の一步」)
- 2013年9月16日 「2013日米学生会議、岩手で開催」 (TOMODACHI)

【東京】

- 2013年8月22日 「ジョン・マケイン(76)米上院軍事委筆頭理事 4年ぶり来日「大義に尽くすことが最大の満足」 (産経ニュース)

【その他】

- 2012年11月 「第65回日米学生会議実行委員長に、本学環境学部4年 竹内正人さんが選任されました。」
http://www.musashino-u.ac.jp/guide/profile/news/2012/121227_01.html
(武蔵野大学ホームページ ニュースリリース)
- 2012年12月27日 武蔵野大学 企画・広報課
https://twitter.com/musashino_univ/status/284235278154072064 (Twitter)
- 2013年8月12日 すみだ地域団体活動情報 いっしょにネット すみだ食育館 食育通信
「第70号 ★第65回日米学生会議に出席する学生との懇談会★」
http://www.sumida25.net/syokuiku_news70.html

Conference Song

作詞 Marquerite Hollingworth(Jasc 1/2)
 作曲 Charles M.H.Hall(Jasc 1/2)
 編曲 吉田 珠実
 混成三部合唱のための編曲 玉田 元康

Soprano
 Shake hands firm hands far a -
 Alto
 Shake hands firm hands far a -
 Tenor
 Shake hands firm hands far a -

S
 cross the sea I'll say kon - nichi - wa to
 A
 cross the sea I'll say kon - nichi - wa to
 T
 cross the sea I'll say kon - nichi - wa to

S
 you You say he - llo - to me
 A
 you You say he - llo - to me
 T
 you You say he - llo - to me

S
 Bow low sow low
 A
 Bow low sow low
 T
 Bow low sow low

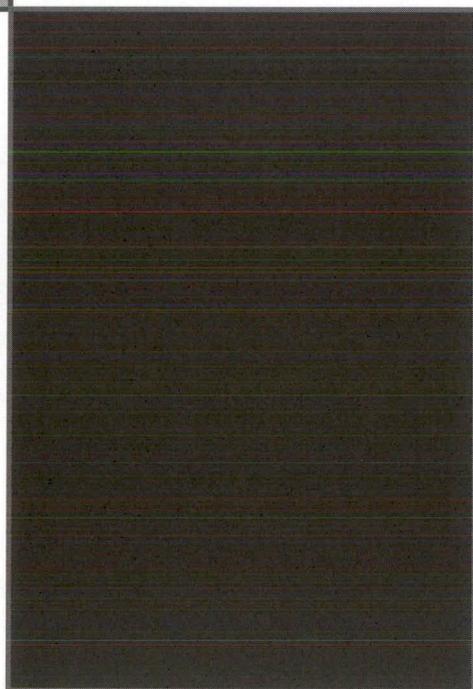
Conference Song

S
 show us how it's done Let stars and
 A
 show us how it's done Let stars and
 T
 show us how it's done Let stars and

S
 stripes fly side by side With the Flag of the
 A
 stripes fly side by side With the Flag of the
 T
 stripes fly side by side With the Flag of the

S
 Ris - ing Sun
 A
 Ris - ing Sun
 T
 Ris - ing Sun

第2章 事前活動



第65回日米学生会議 事前活動

第64回報告会、第65回説明会

日時：2012年12月8日（土）

場所：慶應義塾大学 三田キャンパス

概要：

第65回会議実行委員会が発足して約3か月、第64回日米学生会議報を開催した。報告会ではまず、会議報告に先立ち第17回日米学生会議参加者である今井義典氏に「星と共に」という題でこれまでのご自身の記者としての活動についてお話いただき、メディアによる冷静かつ迅速な正しい情報の発信の大切さ、世界をつなぐ人材の重要性について若者への熱いメッセージを頂いた。続く第64回会議報告、パネルディスカッションでは多くの写真やムービーを通して当会議のアカデミックな側面だけでなく、異文化交流、共同生活について紹介することができた。また、報告会は第65回会議概要について初めて公式発表する場でもあった。説明会終了後のご来場の方々との交流の時間では、第65回日米学生会議への関心の声を数多く聞くことができた。

第65回日米学生会議 選考会

第一次募集（1月19日～2月24日）

第二次京都選考会（3月12日～13日）

第二次東京選考会（3月20日～23日）

場所：同志社大学（今出川キャンパス）、
日米会話学院

概要：

1月15日よりWeb ページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果、2次面接に進んだ応募学生に対し、グループディスカッション、個人面接、教養試験を課した。

春合宿

日時：5月5日（日）～5月7日（火）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

概要：

4月の選考委員会により最終決定した28名の参加者と8名の実行委員が、春合宿にて初めて顔をあわせた。本合宿において参加者は日米学生会議の歴史を学び、ディベートワークショップ、分科会活動などの「日米学生会議の基礎」を学び、8月の本会議に向けての最初の一步を踏み出す機会となった。



アイスブレイクを楽しむ様子

<コンテンツ>

日米関係勉強会

去年のAECの方が日米安保のレクチャーをして下さり、その内容に関してディスカッションを行った。コミュニケーションツールとしての英語ではなく、高度な議論をする上での英語力の乏しさを痛感した。更に日米関係に限らず、日々自分の周りで起こっている事柄にもっと目を向け、勉強しよう、と思った。

(伊井佐織)

日米安保について考えさせられる話題は日々満ち溢れているにも関わらず、実際に深く考え誰かと議論する機会はなかった。今回のレクチャー及びディスカッションでは、日米安保の重要性だけでなく、それに対して一人一人が知識を深め、自分なりの意見を明確に持つことの大切さについてもっとも考えさせられた。

(兼子莉李那)

東海大学綾部功准教授によるディベートワークショップ

最も印象に残ったのは、講師からの問に対し、積極的に発言する参加者の数が多いことだ。積極的に発言することは議論を深める上で欠かせないと考えており、この雰囲気の本会議終了まで持続するために、私も積極的に発言し一翼を担いたい。

(荒木尊士)

ディベートワークショップでは、議論する難しさを痛感した。日本語でも、自分の言いたいことを相手に正確に伝える事、理解してもらう事は容易ではない。そのディベートを英語で行うのはさらに難しかった。

また、自分の知識不足も改めて感じた。テーマに関する知識を深め、根拠を上手に示して、より説得的な議論が展開できるようにしていきたいと、強く思った。

(小林薫子)

<春合宿感想>

春合宿では素晴らしい仲間に出会えたことが何よりも自分への刺激となった。様々な分野で活躍されているOBOGの方、個性豊かな実行委員会と同期のみんなに出会えたことは自分を改めて考え直すきっかけになったと思う。春合宿で対面した一人一人に圧倒され、自分の能力が劣っているのではないかと不安を覚えることが多かったが、JASCに参加するからには本当に頑張りたいという気持ちが強く湧いた。この初心を忘れずに今後も引き締めて様々なことに挑戦していきたい。

(野口真央)

いよいよスタートした日米学生会議。「何をするのか、どのような人がいるのだろう」と不安に思っていた私だが、初日から盛りだくさんの日程で、いつの間にかそのような不安は吹き飛んでいた。

とにかく目の前のことに精一杯取り組んだ。たった3日間の合宿であったが、最終日には JASCer 一人一人に対して「思いを素直にぶつけていいのだ」と思えたことは、私の最大の驚きであるとともに喜びであった。(中澤彩)

全体として、デリのみんなと3日間という短い機関にも関わらず、濃密な人間関係を構築することができた。これが一番の成果であった。

様々なバックグラウンドを持つにも関わらず、36人全員が同じ「JASC」というものに正面から全力で取り組んでいることが分かった。このことは、リフレクションという全員の気持ちを率直に聞ける場を最後に設けてもらえたことで再確認できた。春合宿全ての活動の中で、リフレクションの時間が一番良いものであったと思う。(吉田知史)

<春合宿を終えての意気込み>

この3日間の春合宿を終えて気持ちの面で非常に成長したと思う。こんなにも様々な体験をしてきた人と会うのは初めてで、自分があまりにも世界を知らないということに気付くことができた。このような人々に出会う機会に恵まれたことを本当に嬉しく思うとともに、私も他の人から尊敬されるような人間になりたいと思った。そのような人になるためにもこれから夏の本会議までの間にきちんと

勉強したいと自然と思うようになったのが一番の自分の中での成長である。これからしっかりと知識をつけ、自分の軸となる考えを構築していきたい。

日本側の参加者との交流がこれだけ刺激的だったので、アメデリと会うのが心の底から楽しみだ。早く日米の学生間で議論をしていきたい！(橋本萌)

この春合宿では、今まで謎に包まれていた JASC の正体がだんだんと明らかになっていく感じでした。これから先の JASC のことが具体的にイメージできるようになるにつれて、期待や興奮が高まったと同時に、責任や負荷を感じて不安も大きくなったことは事実です。

けれど、個性豊かなデリと、明るくて暖かい EC に出会えたことが、春合宿全体を通して一番嬉しかったことであり、これからもパワーの源になっていくと思います。この仲間とだったら頑張っていける、頑張っていきたい、と思いました。

(森泰子)

JASC は life-changing experience と言われる。しかし、痛感するのは JASC に参加して「人生は変わる」のではなく「人生を変える」という心持ちでなければいけないということだ。春合宿で会った OB の1人が JASC を中途半端でやってはいけないとおっしゃっていた。

Life-changing experience にするため

には主体的に思いっきり打ち込まなければそれを達成することができない。一生懸命打ち込みたい。

また、JASCの魅力として「仲間」がいる。人間として尊敬できる仲間が JASC にはたくさんいる。さらに夏には大勢のアメリカ人が来る。このような素晴らしい環境のなかで深い友情、絆を築き、一生の友を作りたいと思う。

自分色を少しでも JASC に反映させるとともに、最高の仲間と今までで最高の JASC にするために頑張りたいと思う。

(川口真)



OBと交流をするデリ

防衛大学校研修

日時：6月7日（金）

場所：防衛大学校

概要：

日米学生会議では毎年、日米関係を考えるにあたり重要な「安全保障」に関する知見を深めるため、防衛大学校に訪問し、教授より特別講義をいただくと同時に、同世代の防衛滝学校生との対話と交

流の機会を設けている。本年度は加藤教授と坂口教授による二つの講義に加え、施設見学、そしてディスカッションが行われた。

- 加藤准教授講義
- 防衛大学校施設見学
- 坂口教授講義
- 分科会討論
- 懇親会

<参加者感想>

何よりも、自分と同年代の若者が、日々厳しい環境の中で、学業のみならず訓練にも励んで生活しているという現実には衝撃を受けた。防衛大生の一挙手一投足を目の当たりにするにつけ、日頃の自分の生活がいかにかに生ぬるいものであるかを感じざるを得なかった。今まで、日米学生会議や大学内で日米関係や安全保障、戦争等について議論することはあっても、あくまでもそれは頭のなかのイメージで語っていたに過ぎず、リアリティを持つものではなかったが、今回防衛大を訪れて、「彼らにとっては自衛隊や国防というものが自分たちの生活・人生と直結する大きな問題なのだ」ということを実感した。今後沖縄での自主研修や、本会議で日米安保などを議論するにあたり、今回防衛大研修で得られた知識や体験を活かすことでより深い次元で物事を考え、議論できるのではないかと信じており、ま

たそうできるように一層努力したい。

(鈴木悠司)

私の身の回りには防衛大に進学した人もいないし、話題に出ることもほとんどなく、防衛大は私にとって完全に未知の世界だった。

今回、同年代の学生が、日本の防衛や国への貢献などを考えながら厳格な生活を送っていることを実際見て、頼もしいと素直に感じた。また私自身の気持ちも引き締まり、日本人としての誇りや責任感はしっかり持ち続けたいと思った。近年、君が代の強制で揉めたり、また、日本人は平和は当然に続くものと思いがちな部分があるが、今回の防衛大研修を通して、そのような意識を持ち直していくことが大切だと思った。

防衛大生との議論で、「平和=何もしない、ではない。平和でいるために必要な行動はとるべきだ」という言葉が印象に残っている。初めての世界に触れ、防衛大生の強い意見と信念に触れ、沢山の未解決な疑問点が生まれた。8月の本会議に向けての事前準備、そして本会議を通して、それらの疑問点としっかり向き合っていきたい。

(森泰子)

また疾風の如く過ぎていった一日。どうして JASC の行事はこうも毎回、充実感と空虚感を同時に残していくのだろうか。加藤先生、坂本先生お二方のご講義、

防衛大学構内研修、分科会ごとの discussion、レセプション。一日にこなすにはあまりにも贅沢な内容であった。防衛大の門の向こう側には非日常があった。その非日常を日常として日々生きている学生は言動の一個一個にまっすぐな芯が通っているように見受けられた。しかし、そうした彼らにも私達と変わらない部分はあり、意外でかつ、嬉しかったのを覚えていて。彼らと一日の生活を共にし、白熱した議論を交わすことができたのはとても貴重な経験であったとしかいえない。本当に楽しかった。今回の研修は特に JASC でしか経験できないことがたくさんあったので、この機会、そして研修を支えて下さった皆様に深く感謝している。

(吉井拓真)



防衛大学校の皆様と

沖縄研修（学生有志活動）

日時：6月21日～23日

場所：沖縄県（キャンプフォスター、沖縄市、沖縄尚学高等学校、辺野古、沖縄平和記念平和公園、クラシンジョウ壕、

荒崎海岸等)

<沖繩研修目的>

第65回日米学生会議では、在沖米海兵隊基地や、辺野古、沖繩全戦没者追悼式を訪問し、今年8月に日本で開催される本会議に向けて沖繩研修を行った。未だに日米関係の多くの課題が色濃く表れている沖繩。日米安全保障条約の名の下に在日米軍施設の74%が集中している。太平洋戦争で激しい地上戦が行われた歴史もあり、普天間基地移設問題やオスプレイ配備、高江のヘリパッド移設問題など今なお多くの喫緊の課題を抱えている。今回の沖繩研修では、今後の日米関係を考える上で非常に重要である沖繩に実際に足を運び、沖繩の現状や、沖繩とアメリカ双方の人々の思いを、直接的な体験を通して学び、基地問題や安全保障に関する見識を深めることを目的とした。そして、事前学習、現地訪問、事後学習を通じ、今後の沖繩の在り方、そして今後の日米関係をどうより良くしていくべきかを考察し、本会議において、アメリカ人学生との意見交換やアメリカ社会への発信を的確に行い、沖繩問題への理解を深め日米両国の相互理解に寄与することができるよう、その土台の構築を目指した。

【6月21日(金)】

- 在沖米海兵隊基地キャンプフォスター訪問

- 沖繩市コザヒストリート見学

- リフレクション

■参加者の声

私にとっての沖繩研修一日目は、一言で言うとぐちゃぐちゃ、であった。私は沖繩県出身で、米軍基地には何度か入ったことはあるが、やはり何度入っても基地は「Small America」であると思った。今まで米軍の人と交流する機会があったが、真剣に米軍の基地に対する考えを聞くことはなかったので、海兵隊員のロバート氏の講義は貴重な経験であった。米軍側の言い分もよく理解し、納得できるが、「しかしなんかなあ・・・」と心にひっかかる所があり、基地ツアー中ずっと考えていた。ちょっと話がずれるのかもしれないが、今年東京に上京してきて思ったのは、私は沖繩の代表なのだということだ。今までは沖繩県内にいたからあまり感じなかったが、一步外に出るとたちまち私は沖繩県の代表としての責任があることを感じた。だから皆に基地についての意見を聞かれたときに、自分の意見ではなく沖繩県民としてどう答えるべきなのだろうという考えが常に胸にあった。

しかし皆が聞きたいのは、私はどう思うのかということで、そのことに気づい

た時に、あ、私って実は全く基地について考えてなかったのだと、非常に落ち込んだ。まだ整理はできていないが、私の意見は、基地が必要なこともわかるが、でもなぜこんなにも基地が必要なのか、なんでこれほどの基地が沖縄にあるのだろう、ということだ。

一番問題視すべきは、沖縄に私みたいになんとかなくしか考えていない若い子が多いことではないかと思った。基地は私達が生まれたときからずっとあり、基地がある状態、ヘリが大きな音をたてて頭上を通っていくという状態が当たり前過ぎて、今更あまり考えることは無いのだろう。しかしもっと県外の若者や米軍側の意見を交換する機会を持つことにより、私達は何か気づきを得られるのではないかと考えた。まだ胸の中ぐちゃぐちゃだが、気づくことが出来て本当に良かったと思う。知らない、考えてないということを感じさせてくれて、本当にみんなありがとう。(上江洲仁美)



沖縄の学生とディスカッション

【6月22日(土)】

- 名護市辺野古見学
- 沖縄フォーラム
- 沖縄全戦没者追悼式前夜祭

■参加者の声

沖縄研修の二日目は、沖縄の大学生・高校生と交流しながら、辺野古の見学、そしてその後沖縄尚学高校にて沖縄の基地問題と日米関係についての講演を聞き、ディスカッションを行った。普段、ニュースで議論されている沖縄の基地問題の生の現場を自分の目で見ることができ、また現地の人たちが基地問題を日常感覚のなかでどのように感じ考えているのか、ということに触れられた貴重な体験であった。この日の研修で知ったことは、日米間、そして沖縄の中においても人びとの意見は多様だということ、またそうした中でもなんらかの形で目の前の問題に対処していかなければならないという難しい現状があるということだった。同じ日本でありながらも、こんなにも身近に基地問題を感じ、また考え対峙している人たちに会い、改めて、自分自身の立ち位置を問い直されたように思う。

(大日方望)

【6月23日】

- ひめゆりの塔見学
- 韓国人慰霊塔見学
- 沖縄県立平和記念資料館見学
- 沖縄全戦没者追悼式
- クラシンジョウ壕見学
- 魂魄の塔見学
- 荒崎海岸見学

■参加者の声

3日目のひめゆりの塔や平和祈念資料館の見学では、戦場舞台となった沖縄の悲惨な歴史を改めて実感した。戦争に兵士として派遣され、亡くなった少女達の写真が並ぶ部屋に入った時は複雑な気持ちでいっぱいになり、自分より若い13歳という年齢で戦場に派遣され、想像もつかないような恐ろしい環境で命を落とした彼女たちのことを考えるととても心が痛んだ。その後、沖縄前戦没者追悼式に参列した際にも、もう二度とこのような歴史を繰り返してはならないと考えた。

午後は沖縄のガマや海岸を訪れた。特に思い出に残っているのは荒崎海岸の岩の上を炎天下の中みんなであつたことだ。3日目の疲労と暑さにうなされて足を踏み外さないように海岸の岩を渡っていくのはまるでサバイバルゲームのようだった。綺麗な海を見る余裕もなく必死に歩ききったが、今振り返ると本当に楽しかった良い思い出だ。

3日間はあっという間で、待ちに待った

沖縄研修が終わりを迎えた時は寂しい気持ちでいっぱいだった。現地に直接行って学ぶことは自分の想像以上に得るものがあり、最高の仲間とそれを分かち合いながら過ごすことが出来て非常に充実した3日間を送ることができた。

(野口真央)



荒崎海岸を歩く

事前勉強会

第1回：2013年6月8日(土)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

第2回：2013年7月14日(日)

場所：国際教育振興会

概要：

第65回会議では有志による自主勉強会を2回開催した。第1回勉強会では、2週間後に控えた沖縄自主研修に向けての知識補完と、本会議の雰囲気味わってもらうことを大きな目標とし、所与のテーマに関して英語でディスカッションを行った。

沖縄自主研修の3週間後に行われた第

2回勉強会では、本会議に向けての最終準備と参加者の主体性を養う場となることを期待して、前半は自主研修を通して学んだことの振り返りとその成果について考察し、後半は参加者たちが自由にトピックを決めて英語で議論を行うスペシャルトピック形式でのディスカッションを行った。

<参加者感想>

日米学生会議では8月の本会議が最大の見せ場ではありますが、今回の事前勉強会を含めた事前準備活動が本会議での成功を決めるといっても過言ではないと思っています。第1回の勉強会では沖縄へのフィールドトリップに向けて、基地問題や沖縄の人々の考えや思いへの理解を深めていきました。自分を含めて、みんなが身を乗り出して発表者の話を聞き、本気でディスカッションをする姿を見て、社会問題を考える高等教育機関で学ぶ大学生としての意義を再発見できました。

また本会議に向けての英語ディスカッション練習も非常に有意義なものになりました。僕のグループでは日常のフランクな議題で議論を交わしたのですが、議論の楽しさと同時に英語で表現することの難しさを学びました。質の高い議論を本会議でも維持するために、英語力向上も意識していきたいと思います。

(大沼雄貴)



勉強会総括

第1回勉強会では、前半に沖縄自主研修事前学習の時間を設けた。沖縄自主研修スタッフの中から勉強会担当者を選び、事前資料の作成と当日のプレゼン発表を任せた。スタッフに沖縄出身の参加者がいたこともあり、プレゼンにはデータに基づく客観性と「地元暮らし人の視点」が上手に反映されていた。参加者からも活発に質問の手が挙がり、双方向の学びがしっかりと実現されていた。米軍基地見学や新基地建設予定地の見学、地元の教授陣からの講義や学生との交流など様々な企画が用意されている自主研修を、「目的もなくただ行く」だけの自主研修としないように、参加者それぞれが沖縄に研修として行くことの意義と、この機会の重要性を考える材料を提供することができたと強く思う。

後半は、4つのグループに分かれて英語でのディスカッションを行った。勉強会担当者であらかじめ決めた10個のディスカッショントピックから、グループごとに好きなものを1つ選び、所与の時間内で自由に議論した後、他グループに発表

をするという形式で2回行った。本会議での議論をイメージする良い機会となっただけでなく、デリ同士が英語で議論するのは初めてであったこともあり、お互いに良い刺激となったようであった。

第2回勉強会は、午前中に沖縄自主研修担当実行委員による沖縄自主研修の振り返りを行った。2泊3日の研修内容を1日ずつ振り返り、地元の人から受けた講義や現地で見たこと、またそこで感じたことや考えたことなどをグループに分かれて共有し合った。

昼食を挟み、午後は本会議のスペシャルトピックと同じ形式で、事前に参加者から集めたテーマの中から議論したいトピックを1つ選んでもらい、トピックごとにグループ分かれて英語ディスカッションを行った。どのグループも第1回勉強会の時より盛り上がりを見せ、難しく奥が深いトピックについて真剣に議論を交わしており、本会議に向けモチベーションを高めることができたように思う。

(飯島千咲)



英語でディスカッションを練習

第65回日米学生会議直前合宿

日時:2013年8月1日(木)~8月2日(金)

場所:

立命館大学びわこ・くさつキャンパス

立命館大学 BKC インターナショナルハウス

概要:

日本側のみで行われる最後の活動プログラムである直前合宿では、翌日から始まる第65回日米学生会議本会議に先立ち、一ヶ月に渡る共同生活に欠かすことの出来ないルールの確認や、本年度の4つの開催地でのプログラムとスケジュールの情報共有、そして分科会毎にこれまでの事前活動のまとめの発表を主に行った。各分科会が3ヶ月の学びの成果を英語で発表し、他の参加者よりフィードバックを受け取ることで、本会議での目的意識を高めることが出来た。

また、例年行われている文化交流の一環であるスキット(寸劇)の練習を参加者主導で行い、本会議に向けて日本側参加者の絆をより一層深めることができた。そして、アラムナイの方々による激励のお言葉、そして一人一人が自分の気持ちを語るリフレクションを通して、伝統ある会議の参加者としての自覚もち、新しく会議をつくるという熱い想いを全員が共有することで、一致団結して本会議へと向かう契機とすることができた。

(市毛裕史)



第 3 章

本会議・サイト活動

京都サイト (2013年8月2日～7日)

■京都サイトコーディネーター

ヴァーホアンミン

横田真彩

Cruz Arroyo

Madison Mears



■京都サイト理念

日本の古都として伝統文化が今なお息づき、長い歴史を彷彿させる建築物が立ち並ぶ京都。グローバル化の進展により文化の画一化や普遍化が加速し、地域文化の個性が消失していく中で、京都の文化はその特性を失うことなく、古の心を思い起こさせる。第一開催地では、両国参加者が日本の文化や伝統に触れることで、アメリカ文化との違いを認識し、文化の差異を越えて相互理解を図る。このような体験の共有により、地域文化や伝統文化とは何かを再考し、グローバル社会において地域固有の文化をどのようにして維持していくべきかを考える。また、京都議定書が締結された当地で、自然との共生や環境問題にも目を向け、2013年以降のポスト議定書期間における新しい国際的枠組みづくりの課題について考察する。

■サイトスケジュール

8月2日(金)

米国側参加者到着

8月3日(土)

開会式

アイスブレイク

スキット

8月4日(日)

下鴨神社訪問

分科会フィールドトリップ・活動

8月5日(月)

総合地球環境学研究所訪問

京都迎賓館訪問

AIU-HSD 合同ディスカッション

8月6日(火)

茶道裏千家資料館訪問

分科会活動

8月7日(水)

長崎へ出発

■ 具体的な活動

第65回日米学生会議開会式

式次第

- ・開会の辞：
日本側副実行委員長 川野さりあ
- ・主催者挨拶：
一般財団法人国際教育振興会理事長
大井孝
- ・来賓祝辞：
外務省 関西特命全権大使 小島誠二
京都市副市長 藤田裕之
駐大阪・神戸米国総領事館 広報担当
領事兼関西アメリカンセンター館長
キース・ロメル
日米学生会議同窓会会長 橋本徹
- ・内閣総理大臣メッセージ
- ・日米学生会議参加者代表挨拶
日本側実行委員長 竹内正人
米国側実行委員長 ポール・ヤラベ
- ・祝電披露
京都府知事 山田啓二氏より
- ・第65回日米学生会議ビデオイントロダクション

- ・基調講演：
京都大学大学院 教育研究科副研究科長
鈴木晶子
- ・閉会の辞：
米国側副実行委員長 ノブコ・マスノ

第65回日米学生会議が開催されますことを心からお祝い申し上げます。日米両国の学生の相互理解や友好交流を深められ、会議に参加される学生の皆様が、今後日米間の友好交流親善及び世界平和の一翼を担われていくことを期待いたします。日米学生会議が実り多いものとなりますよう、お祈り申し上げますとともに、ご参観の皆様の今後のご活躍を祈念いたします。

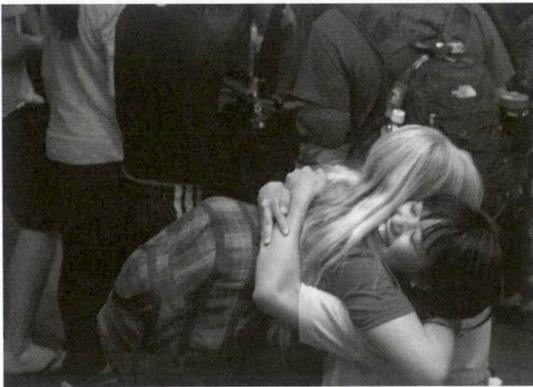
平成25年8月3日
京都府知事 山田啓二



第3章 本会議・サイト活動

アメデリが京都に着いた翌日、未だ興奮と不安の入り混じる中、その混沌とした気持ちを落ち着かせるかのように開会式は始まった。外務省関西特命全権大使、京都市副市長、駐大阪・神戸米国総領事館広報担当領事そして我ら学生会議のアラムナイの方々からの温かい祝辞をいただいた。こうした学生会議を通してでしかお会いできない方々から激励をいただき、本会議への意気込みは増すばかりであった。また、内閣総理大臣からのメッセージ、京都大学大学院教育研究科副研究科長である鈴木晶子様からの基調講演もあり、個人的には講演での精神と身体、日常と科学、情報と知識という三本立てのお話がとても興味深かった。その後立食パーティーが開かれ、デリは各々お話ししたい方々のご挨拶し、話に花を咲かせた。

(吉井拓真)



アメデリの到着

アイスブレイク

興奮冷めやらぬアメデリとの対面を経

た明るく日、第65回日米学生会議の開会式を前にアイスブレイクを宿泊所にて行った。全員が輪になり各々の名前、専攻、学年、JASCに懸ける想い等を紹介した。事前にアメデリの紹介文を読んでいた私は、各々の声を聴くことで改めて一人一人を認識した。そして、JASCが始まるんだなと感じた。JASCを終わったいま、当時を振り返るとまだまだみんな自分を出せていなかったなと思う。まだ互いを探り合っていたからだ。このアイスブレイクは互いを知るということもあるが、知るきっかけにもなったと思う。自分と共通する専攻、趣味、想いを見つけることでその後の会話に存分に取り入れることができたからである。

(中村優太)



スキット

スキットとは本会議の最初の段階で、アメリカ側参加者・日本側参加者それぞれが自国の文化やメンバーの紹介等を目的として行う小劇である。私はスキットの担当であったので、人並み以上にスキットに対する思い入れがあった。

日本側のスキットに関していえば、全体で練習する時間はあまりなかったが、皆の協力により、本番は大成功であったと自負している。私自身とても楽しみ、何よりもスキット後に日本側のみならずアメリカ側の参加者からも“楽しかった”と言ってもらえたことが嬉しかった。アメリカ側のスキットに関していえば、上記で日本側は「練習する時間はあまりなかった」と書いたが、アメリカ側参加者は空港で初めてスキットについて聞かされ、練習をしたというから、とても驚いた。アメリカ側のスキットも各メンバーの個性を感じさせるとても楽しいものであった。スキットを終え、以後の本会議への期待がより高まった。（中澤彩）

いかに長いかを語ってしまっていた。実際に神社自体の歴史を聞くことができたが、これが非常に興味深かった。下鴨神社の歴史とともに神道についても学ぶことができ、日本人であっても知らないような知識を得ることができた。年に数回訪れる神社というものの起源であり、且つ日本人と深い繋がりを持っている神道であるが、それに対する自分の知識の浅さを実感することができ、貴重な経験になったと言うことができる。また、下鴨神社では京料理をご馳走になり、日本の伝統を食からも感じることもできた。葵祭の季節になったら再び訪れてみたいと強く思った。（橋本萌）



アメデリのスキット



下鴨神社にて

下鴨神社訪問

下鴨神社は世界遺産の一部とだけあって、厳かで立派であり、中を歩いているだけで歴史の重みのようなものを感じた。同じ建物が平安時代から存在しているのかと思うと何だか不思議でたまらず、思わずアメリカ側の参加者に日本の歴史が

総合地球環境学研究所

京都の地球総合研究所では、最初に施設の見学をさせて頂いた。自然がとても多く、開放的で気持ちよく仕事するのに望ましい環境であった。そして、ここでは地球環境についてのレクチャーを英語

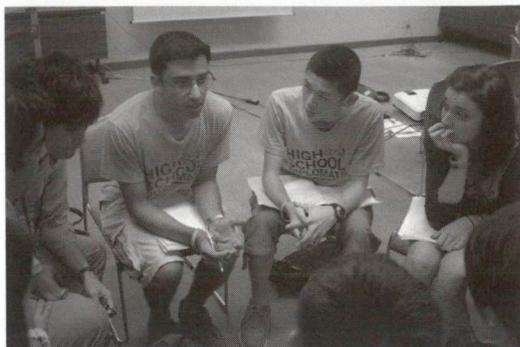
第3章 本会議・サイト活動

で伺った。最初のレクチャーは Dr. Niles によるもので、Anthropocene についてであった。2つ目のレクチャーは Dr. McGreevy によるもので地域の環境問題への取り組み方についてであった。私は環境問題と社会という分科会に所属していたというのもあり、どちらのレクチャーもとても興味深く、大変勉強になることばかりであった。レクチャーの後は、分科会の枠を超えて、環境問題についてのディスカッションを行った。いつも自分が所属している分科会ではない人達と議論することで新しい視点で環境問題について考える事ができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。(小林薫子)

USHSD 高校生ディスカッション

USHSD とは、米国と日本の高校生が約 10 日間の共同生活をしながら行う国際交流プログラムです。日米学生会議の高校生版だとも呼べるでしょう。USHSD との交流では平和がテーマということで、まず日米学生会議側から 6 月に行われた沖縄自主研修についてのプレゼンを行い、その後 10 人弱のグループに別れてディスカッションを行いました。沖縄の基地問題を中心に、「抑止力」や「勢力均衡」などの高校生には高度な用語を駆使しながら議論する USHSD 参加者もあり、大学生に対しても物怖じしない姿勢に感心させられました。それに影響を受けてか、交流終了後の移動の際等に、沖縄研

修を体験していない米国側参加者と日本側参加者とで沖縄について話し合う姿が見られました。(吉井知史)



高校生とのディスカッションの様子

京都迎賓館訪問

日本の伝統技術とモダン様式が融合した建築物。国賓など賓客に最大限のおもてなしをする場として存在している京都迎賓館。その建築物内を見学して回った。貴重な経験に参加者は胸を躍らせていた。細部までこだわり、金、銀、プラチナなどの素材を利用した空間は、一種の藝術的なものとなっておりそれぞれの部屋でのテーマや表現方法が異なっていた。一つ一つの装飾、部屋の配置に対しての意味についてガイドの方が丁寧に説明して下さり、細部まで精巧に作られた職人の考えを学ぶことができた。建築物の見学を通して、伝統を守る重要性和時代とどのように強調していくかについて考えさせられた。(竹内正人)



京都迎賓館内

裏千家茶道資料館訪問

第1サイト京都。茶道体験をしに裏千家茶道資料館を訪問した。日本の茶道文化が世界にいかに広まっているかを知ることができた。日本に住んでいた人でも知らない事が多くあり、大変刺激的な体験であった。驚いたのが、茶道体験のスタッフの方が皆流暢に英語をお話になっているということ、また、たくさんの外国人の方が学びにいらっしやっていることであった。

普段暮らしていると、日本人であっても、なかなか日本人らしい事をしないものだ。恥ずかしながら、日本の伝統文化について、語る経験が少ないように思う。そんな中、茶道体験は、まさに日本らし

い体験で、こういう経験こそ、国際交流に興味のある日本人は体験しなくてはならないと感じた。

また、アメリカ側の参加者と共にそれを体験する事で、自身の文化を相対化して見る事もできたと思う。とても良い経験になった。
(大野峻典)

サイトコーディネーター後記

第65回日米学生会議は日本文化象徴の地とも言われる古都京都で幕を開けた。京都サイト運営を務める中で一番の挑戦だと感じたのは「第一開催地」と「日本の京都」という当サイトの二側面を常に意識し、バランス良くコーディネートに臨まなくてはならないことだった。したがって「第一開催地」として、コンテンツもフィールドトリップや講演に留まらず、少しでも参加者がお互いのことを知り合えるよう、交流の時間も忘れずに盛り込むことを心掛けた。アイスブレイク、スキット、京都市内見学の時間、そして公共交通機関での移動時間までもが交流を楽しめる時間となった。そして「日本



裏千家での茶道体験

第3章 本会議・サイト活動

の京都」だからこそその学びを追求した結果、京都大学での開会式とレセプションに始まり、下鴨神社訪問や裏千家での茶道体験、京都迎賓館の訪問を通して、日本の時代と共に変わりゆく美しい文化と、時代を経ても変わらずに息づく文化を参加者各々が肌で感じ取り貴重な学びを得ることが出来た。また、総合地球環境学研究所でのご講演やAIU 高校生国際交流プログラムの高校生達と平和について交わした議論を通して、社会が抱える課題に対し解決の糸口を探るために必要な、様々な角度からの見識を深めることが出来た。

どの箇所を取っても、本当に多くの方々の温かなお力添えがあって初めて、それぞれに意味の籠ったコンテンツが集結し、全体として非常にバランスのとれ

たサイトを実現することができたと感じる。最終夜に迎えたリフレクションでは第一サイトだとは考えられないぐらい内容の濃い話し合いができ、参加者の感動の涙までも目にした。また、このタイトスケジュールは、疲れを抱えながらも一生懸命ついてきてくれた参加者と、アメリカ側サイトコーディネーターの Madi と Cruz の非常にフレキシブルで思いやり溢れた協力なしには実現できなかった。本当に有難う。

最後にこの場をお借りして、京都サイトでの開催を可能にして下さった全ての方々に心からの感謝の気持ちを申し上げ、サイト総括とさせていただきます。

(ヴァーホアンミン、横田真彩)



朝日新聞 2013年8月8日



下鴨神社にて

長崎サイト (2013年8月7日～12日)

■長崎サイトコーディネーター

飯島千咲

竹内正人

Nobuko Masuno

Santiago Cruz



■長崎サイト理念

九州の最西端に位置する長崎県は、鎖国時代にも出島が世界に開かれた窓として繁栄し、ヨーロッパと中国の文化が融合した独特な文化を形成している。世界でも有数の美しい夜景を誇る長崎市は、第二次世界大戦時の原爆投下による多大な被害を受けた悲惨な歴史も合わせ持つ。参加者には、異国情緒溢れる豊かな文化を体感してもらうと共に、原爆資料館見学や平和祈念式典参列を通して、原爆問題と平和に対する意識を高めてもらう。また、佐世保市で訪問する海上自衛隊基地、米海軍基地と地域との関係や、さらには県内産業の活性化、離島振興など長崎県が抱える課題についても考察していく。

■サイトスケジュール

8月7日(水)

佐世保市到着

分科会活動

バーベキュー・タレントショー

8月8日(木)

米海軍佐世保基地ロック司令官講演

ハウステンボス環境施設見学

8月9日(金)

長崎市へ移動

第68回長崎原爆犠牲者慰霊

平和祈念式典参列

原爆資料館見学

語り部：山脇佳朗様講演

8月10日(土)

三菱重工長崎造船所香焼工場見学

長崎フォーラム

市内散策

8月11日(日)

インターテーブルディスカッション

分科会活動

レセプション

8月12日（土）

岩手県へ移動

■具体的な活動

タレントショー

タレントショーは皆が出会って一週間が経とうとしている長崎サイトで行われた。集団生活によく慣れて始めているが、疲労もピークに達しているところだったので、みんなの気持ちが和む良い機会となった。2人のアメデリによってユーモア溢れる司会が進められ、出演希望者が舞台上がって次々にショーが展開していった。驚くような身体の使い方をするダンス、バレエの披露、そしてアメデリがソロで日本語の曲を歌うなど、盛り沢山の内容だった。クライマックスではみんなが舞台上がって踊るくらい盛り上がり、より一層みんなが打ち解けたように感じられた。一週間共に過ごした仲間だが、舞台上で特技を披露する姿を見て、それぞれの新しい一面や意外な一面を知れた気がした。（野口真央）

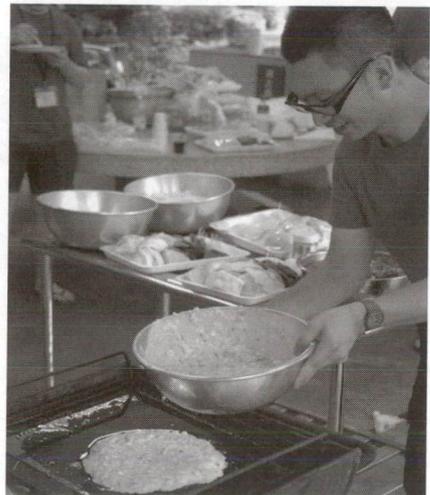
BBQ

8月7日、第2サイトの長崎に到着したその日の夕方にバーベキューが行われた。皆、長旅で疲れたからだをおいしい食べ物でいやした。このバーベキューは佐世保の日米協会の支援のおかげで実現



A Strong Bond

したものであり、感謝している。肉、野菜だけでなく、焼きそば、焼き鳥、お好み焼きなどたくさんの食べ物がでて、皆舌鼓をうっていた。話で盛り上がっているもの、夢中で肉に食らいついているもの、この後に行われるタレントショーの練習をしているもの、汗だらだらになりながらも肉をやいてくれる EC や他の人たちなど多様な人たちがいたが、皆それぞれ楽しんでいるようだった。バーベキューのおかげでリラックスでき、新しいサイトの活動が本格的に始まる前に身体を休めることができた。（川口真）



米海軍佐世保基地ロック司令官講演

内容は、佐世保基地が周辺市民との対話を重要視しており、市民にとって良き隣人になるためにどのようなことをしているかというものであった。このレクチャーは私にとって特別なものとなった。その理由は、私は現在沖縄に住んでおり、米軍基地と沖縄市民の間で起こる様々な問題に触れることが多いため、同じような問題を抱えている佐世保基地の対応の仕方は興味深いものであった。ロック司令官が重要視している周辺市民との対話は、基地を置くにあたって最重要視しなければならない点だと私も考えている。なぜなら沖縄同様、常に犠牲になっているのは、「基地周辺市民」だからである。勿論政治上の問題などはあるが、実際に基地の迷惑を被っているのは市民である。それを忘れてはならないと、改めてこの問題について真剣に考えることが出来た。この機会に感謝したい。（三科圭介）



ロック司令官と

ハウステンボス環境施設訪問

長崎に入って2日目の8月8日には、佐世保市にあるテーマパーク、ハウステ

ンボスを訪れた。ハウステンボスは「自然との共存」を目指し、太陽光発電や下水処理などにおいて環境に配慮した工夫が施されている。私たちはそれらの施設を見学する「環境ツアー」に参加し、電気とともに水蒸気も生成するコ・ジェネレーションシステムや、下水を微生物の働きなどを用いて処理し、トイレの水や植物の散水などに再利用するシステムなどについて学んだ。特に、電気や熱、水などを供給する管がすべて保管されている「共同溝」という施設を実際に見て、景観を壊さないために電線などを地上に出さないように工夫しているとの説明を受け、ハウステンボスを訪れる一般の人々のことまで考えて環境への取り組みが実施されていることに感激した。

（鈴木悠司）

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列

8月9日、長崎市にて、第68回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列させて頂いた。私は、毎年テレビでこの平和祈念式典を見ていた。しかし今回、テレビで見ると実際に自分で経験することの違いの大きさを、身をもって感じた。

今回、実際に式典の場の人々や雰囲気などに触れたことで今まで“学校で学ぶ歴史の中の一部”に過ぎなかった戦争や原爆という出来事が、“現代に生きる自分たちにも深く関係する問題”に変わった気がしている。

また、私は、日米安全保障の分科会に属しているため、今回の JASC を通して太平洋戦争や核兵器について議論や勉強をしてきた。そして、その中で、どうしても学者の意見やメディアの報道内容に偏っていきがちで、“人間的”な感情面が欠けてしまう、と感じていた。今回、実際にこの式典に参列して自分の身で体感することで、そのような理論的な面だけでない部分にも考えや意識を向けることの大切さも感じる事ができた。(森泰子)



平和祈念式典

建設法」を制定し「平和は長崎から」という合言葉と共に文化の向上と恒久平和を希求する都市として発展・発信していたことだ。

資料館内には年配の方以外にも、多くの子ども達の姿も見受けられた。被爆者が経験を語る映像に釘付けになっていた少年の眼には原爆という存在がどのように映ったのだろうか。どんな想いを抱いていたのだろうか。自分の次の世代にも恒久平和の想いが受け継がれることを期待したい。(関口響)



説明を聞くデリたち

原爆資料館訪問

原爆投下から 68 年後の 8 月 9 日。私は長崎原爆資料館の厳かな雰囲気に含まれながら、原爆の歴史、悲惨さを様々な遺物と共に振り返った。資料館の構成が非常に良く、ただ原爆を知るだけでなくこれからの核なき世界を実現するための課題とその解決策や、長崎市が行っていることまでが紹介されていた。とりわけ関心を惹いた点としては、原爆被災後の復興の中で、長崎市が「長崎国際文化都市

語り部：山脇佳朗様講演

長崎の原爆資料館では、被爆体験者の山脇佳朗さんのご講演を聞いた。原爆が長崎に落とされたとき、山脇さんは、爆心地から 2.2 キロの地点にいたという。父親を亡くし、その亡骸を燃やしたという経験や、町じゅうに黒こげになって肌が熟れすぎた桃のようになった人びと、川にただよう死体や、臓器など、町の悲惨な情景についてのお話が目に浮か

第3章 本会議・サイト活動

んだ。長崎に、68年前の8月9日に、ピカッ光った出来事は、世界と日本に大きな痕跡を残したのだと感じた。日本もアメリカも、この出来事にしっかり向き合えていないのではないかと思う。熱光線、爆風、放射能、三つの破壊力で町をなめつくした光が、今もこの地に息づいている。そこに、日米の学生と共にあること。これが自分にとって最初で最後の貴重なチャンスだと思った。(大日方望)



デリの質問に答える山脇氏

う欲求がたまっていたため、どのグループでも活発に議論が交わされ、お互いに刺激を与え合ったり、知らなかった価値観に触れたりできた良い機会であった。私のグループでは本会議が始まってから話し合ってきたことの確認、ファイナルフォーラムでの発表の構想について報告し合った。ほかの分科会と関わりのある議論をしている分科会が多く、今後複数の分科会のメンバーで議論をする機会を設けようというアイデアを得ることができた。(白畑春来)



RTを超えた議論

インターテーブルディスカッション

24日間に及ぶ本会議の折り返しの日に、各分科会から2名ずつ計8人が集まって、カジュアルなトピックや、お互いの分科会の進捗状況について議論をするというインターテーブルディスカッションが開かれた。本会議が始まってからは毎日、実行委員が企画してくれたフィールドトリップに出かけており、なかなか学生どうしでゆっくり話す時間がなく、また、参加者どうしで仲を深めてくうちに違う分科会の参加者とも議論をしたい、とい

三菱重工造船所見学

三菱重工業長崎造船場、香焼工場に見学へ行った。巨大な施設に、大型客船や、石油・LNGガスといった天然資源の輸送用の大型の運搬船の建設過程を見ることができた。三菱重工という日本を支えてきた重工業の工場がどのように大型船舶を造り上げ、世に送り出していくのかを、建造ドックのスケール、現場の空気感、職員の方々の説明を感じながら、学ぶことができた。

特に感じたのは、そのスケールの大き

さである。どうやって、そんなに大きなものを作ったのか想像もつかないようなスケールだった。日本の技術の代表的な向上を訪れる事で、その偉大さを肌で感じた。

(大野峻典)



造船所の皆様と

長崎フォーラム

三菱重工業造船所を見学した後、長崎市立図書館で開催された長崎フォーラムに参加し、長崎外国語大学学長特別補佐である溝田勉氏よりご講演をいただいた。会場は図書館内の小さなホールで行われ、JASCer が溝田先生を囲んでお話を伺えたので、講演者との距離を近くに感じられた。

講演の中で、溝田氏が「官僚制」「科学技術」「価値観の変化」などの現代の日本の9つの特徴を、私たちの7つの分科会に関連づけて紹介して下さったことが非常に印象的であった。第二サイトの長崎に入ってから、分科会でのディスカッションも方向性が定まりかけていたところであったが、そこで改めて自分たちの分科会を別の角度から捉え直すことで、私達は何を議論すればいいのかを再確認する機会となった。(鈴木悠司)

長崎市内見学

文化の融合。日本と異国の文化が共生することで織り成す進化を、長崎で発見した。外国との貿易の拠点として知られる出島から、長崎市内の見学は始まった。垣間見える西洋文化やキリスト教の影響。ただし、それはあくまでも文化を感化する種に過ぎず、長崎の独自性も保たれている。この独特の文化を、長崎は原子爆弾によって破壊された過去を持つ。そこから立ち上がる過程に失われたものも、たくさんあるであろう。しかし、その経験を抜いて現在の長崎を語ることはできない。私達は歴史から目を背けない。その歴史によって今があるならば、悲痛な体験によってもたらされた大切な教訓が必ずある。そう信じるからこそ、私達は語ることを止めない。日米両国の学生が、禁句とされる議論を繰り広げるために不可欠な材料を長崎は与えてくれた。求めよ、さらば与えられん。若者として、日本、そして世界に求める。理想を求めずして、その実現などあり得ないから。

(古村大和)



市内で長崎外大の学生と

サイトコーディネーター後記

第2サイトである長崎では、8月7日～9日を佐世保市内、9日～12日は長崎市市内と県内2ヶ所に滞在することによって、多様なプログラムを実現することができた。

佐世保市においては、ハウステンボス敷地内の環境施設見学を通して、自然との共生を目指す企業の画期的な取り組みや学んだり、米海軍佐世保基地のロック司令官を招いての講演会を開催したりと、アカデミックなプログラムを取り入れられただけではなく、バーベキューやタレントショーなど、参加者同士の友情を深めるイベントも多く持つことができた。

長崎市においては原爆と平和、長崎の異国情緒溢れる豊かな文化を学ぶことを大きなテーマとして活動した。長崎市

入りした8月9日には、長崎市の多大なるご協力により、第68回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に、両実行委員長を含む会議代表者6名が参列できたこと、被爆体験者である山内佳朗様より平和に関するご講演を頂くことができたことは特筆すべきだろう。また、一般公開形式フォーラムの開催や、現地の大学生との交流を含む長崎市視察など、地元の方にも日米学生会議の意義を伝えられるようなコンテンツ作りを心掛けた。

サイト最終夜のお別れレセプションでは、長崎県副知事、長崎市市長を始めとする多くの方々にご臨席頂き、参加者は感謝の気持ちを伝えると共に、サイトでの思い出や、残り半分となった会議に対する熱い気持ちを語り合った。

最後に、共にサイトコーディネートを



担当したアメリカ側実行委員の **Nobuko Masuno** と **Santiago Cruz**、そして長崎サイトのプログラム実施とその成功にご尽力頂いた全ての方に、心からの感謝を申し上げます。とりわけ、長崎日米協会様

及び佐世保日米協会様を主たるメンバーとする長崎サポート委員会の皆様には、プログラム企画、運営から経済的なご支援までご協力頂きまして、本当にありがとうございました。(飯島千咲、竹内正人)

岩手サイト (2013年8月12日～19日)

■岩手サイトコーディネーター

市毛裕史

野口ゆかり

So Nakayama

Paul Yarabe



■岩手サイト理念

豊かな自然に恵まれ、太平洋に面し、本州一広大な面積を持つ岩手。農畜産物が豊富に生産され、また世界三大漁場の一つ、三陸海岸は全国有数の漁獲高を誇る。世界文化遺産に登録された平泉には、日本古来の自然崇拜と浄土思想が融合された建造物や庭園を鑑賞するために内外の観光客が訪れる。一方、地方の多くが直面している地域産業の衰退や過疎化などを克服し、地域を活性化していく課題もある。未曾有の大震災となった東日本大震災からの復興は、こうした被災以前から懸案であった課題を解決する好機ともなり、単なる復旧にとどまることなく、被災地を活力ある地域として再生させることが肝要であろう。岩手では、南部鉄器、さんさ踊りなど固有の伝統文化や世界遺産を見学し、復興についてのフォーラム、被災地訪問を通して地域住民、地

元学生の声も聞き、震災復興や地方再生について考察したい。

■サイトスケジュール

8月12日(月)

岩手到着

達増拓也岩手県知事講演

歓迎レセプション

8月13日(火)

小岩井農場見学

分科会活動

8月14日(水)

被災地(宮古市)視察

8月15日(木)

神子田朝市見学

盛岡市内散策

分科会活動

8月16日(金)

分科会活動

ホームステイ

8月17日(土)

ホームステイ
地域活性化・復興フォーラム

8月18日(日)

平泉見学
福島へ移動

8月19日(月)

鶴ヶ城見学
東京へ移動



講演をする達増知事

■具体的な活動

達増拓也岩手県知事講演会

岩手サイトに入り、最初に講演して頂いたのが、岩手県知事である達増知事だった。講演の内容は、主に東日本大震災における被災地の現状と今後の展望についてだった。復興のための地域活性化の

3本の柱として、ハード面だけでなく人々の意識などのソフト面に注目した「安全の保障」や教育や医療の充実などによる「暮らしの再建」、水産業を中心とする中小企業の再建といった「なりわいの再建」が挙げられていた。さらに、岩手県が行っているトモダチ作戦についても説明して頂いた。この講演を通して、岩手県の取り組みについて詳しく知ることができた。一方で、このような地域レベルでの取り組みというのは全国的に伝わりにくいように感じた。これからの日本を考えていく上で、このような地域レベルの取り組みをいかに理解し、支援していくことが大切だと思う。(鈴木健司)

歓迎レセプション

ホテルメトロポリタン盛岡で開催されたウェルカムレセプションでは岩手の達増知事からのお言葉をいただくことができ、大変豪華なものとなった。そして何よりも、このレセプションで私たちはホームステイ先の家族の方々と対面することができた。たったの1日のホームステイだが、特にアメリカ側の参加者からしてみれば日本という国の一般家庭での一泊ということで相当緊張していたようだ。ホームステイ先の家族それぞれと参加者が長く話をすることができ、お互いに緊張を解いていた。また、このレセプションで特に印象的だったのは食事であり、岩手原産の材料をふんだんに使った料理がたくさん振る舞われ、参加者一同感動した。朝のドラマ「あまちゃん」で話題のまめぶなどは誰しもが初めて口にしたらあろう。岩手側に暖かく迎え入れていただき、私たち参加者はその後の岩手での滞在を楽しく過ごすことができた。

(橋本萌)



レセプションでホストファミリーと



牛舎の様子

小岩井農場見学

小岩井農場では初めに小岩井農場の創業の理念などに関するレクチャーを聞いたあと、小岩井農場での自由時間を経たのちバスで案内をしてもらった。現在小岩井農場となっている土地はもともと不毛の地であった。それを開墾によって豊かな緑の地と生まれ変えた。牧草地を育て、森や林もきちんと管理されている。森林が持続的に育つように成長分だけ伐採するという方式がとられ、今でも植林が行われていた。また、宮沢賢治も歩いたというあじさいの一本道を歩き、豊かな自然を感じた。たとえ最初は人工的であったとしても努力を続けていくことによって自然へと変化をとげたことに感銘を受けた。アメリカ側の参加者の1人は自分の故郷と似ていると話していた。逆に都会に住んでいる日本側参加者である自分の方が新鮮であった。日本開催であるが自分にとっても日本を知る貴重な機会となった。(川口真)

<被災地視察>

宮古市田老ホテル見学

宮古市田老ホテルは、津波の被害にあった海岸からすぐの所にあり、建物自体は津波の被害を受けた当時そのままの形で保存されている。実際にその被害を目の当たりにし、そのホテルの社長が建物の最上階から撮った津波が押し寄せる映像を見ることで、自分の中でその被害がどれだけ甚大なもので、人々の心にインパクトを与えたのか以前よりも明確になったように感じている。見学から時間が経った今でも印象に残っているのは、ガイドさんの私達に当時の状況を説明している時の表情だ。涙をうっすら浮かべながらも、拳は強く握られ、目は力強くまっすぐ前を向いていた。田老町はまたきっとさらに素敵な街となって甦る、そう確信した瞬間だった。(伊藤孝真)



津波の威力を目の当たりにするデリたち



三陸鉄道を楽しむデリ

三陸鉄道乗車

被災地を見学し、シンポジウムを受けたあと、私達は三陸鉄道に乗車した。毎日東京で乗る電車とは異なる、被災した地域を見渡しながらいきりする風情漂う田舎の電車に乗るのは新鮮な気分だった。被災地を見学した後ということもあり、気持ちが沈んでいた私達だったが、ゆっくり走行する電車の窓から手を出したり、風を感じたりして遊んでいるうちにみんなの顔に笑顔が戻った。窓から顔を出して景色を見て、写真を撮っている時は懐かしい気持ちになると同時に、被災前の景色と今の景色では全く違うことを考えると複雑な気持ちは隠せなかった。長崎では移動のほとんどがバスだったが、バスから降りて宮古まで風情を感じながら地元の電車に乗ったことは良い思い出になった。 (野口真央)

復旧・復興シンポジウム

岩手県の復興に取り組む、4人の方々にお話を聞かせて頂いた。元防衛庁長官・玉澤徳一郎氏からは「日本に災害が起きたときに国はどう動くのか」ということを中心に、田老町漁業協同組合・小林昭榮氏には「JF たろう復旧への取り組み」について、たろちゃん協同組合理事長・箱石英夫氏からは「田老仮設商店街のあゆみ」について、最後に、いわてGINGA-NET代表・八重樫綾子氏からは「大規模自然災害時における“若者の力”」についてお話を聞かせて頂いた。それぞれ話される時間が短く、もっと詳しく聞いてみたいと思うお話ばかりだった。私が最も印象に残ったのは、漁業協同組合・小林さんの「後継者の問題とかではない。田老はたくさんの可能性を秘めていて復興に前進している。」という言葉だ。希望が持てない時期でも組合員一丸となって話し合い、希望と勇気を見いだしていった姿に、田老漁業産業の力強さと光を強く感じた。 (上江洲仁美)



質問をする参加者の様子

浄土ヶ浜見学

岩手県宮古市にあり、三陸復興国立公園を代表する景勝地である浄土ヶ浜を見学し、復興に関するシンポジウムに参加した。浄土ヶ浜には観光客だけでなく、海水浴をする家族連れも多く、浄土ヶ浜は地元住民に愛される場所であり、震災後に官民一体の取り組みで復旧されたという意味を見ることができた。シンポジウムでは、宮古市市長、三陸鉄道代表取締役社長、岩手県立大学教員によるご講演があり、震災後の行政、企業、学生ボランティアの取り組み事例を学んだ。地元の行政、企業、住民の復興への強い意志を感じたが、宮古市の街づくり計画など未決定なもの多くあることがわった。今回の浄土ヶ浜見学・シンポジウム参加をきっかけに、宮古市のことを身近に感じるようになり、宮古市に関心を持ち、支援し続けようと決意する機会となった。

(荒木尊士)



浄土ヶ浜での集合写真

神子田朝市見学

普段よりも早起きして「盛岡の台所」といわれる神子田の朝市に向かった。朝市と聞いて、魚介類を売っている市場を想像していたが、実際は野菜を作る多くの農家が店をだしている市場であった。また、野菜を売だけの商店が並んでいだけでなく、ひつつみという岩手の郷土料理の汁物などが売られており、その場で朝ごはんとして食べることができた。野菜を売っているお店では、朝一番にとれたてのものを試食することができたが、どの野菜もととてもみずみずしくておいしかった。朝早かったが市場には多くの人々が集まっており、初めは山積みになっていた野菜も、帰る頃にはほとんどが売り切れていた。それぞれのお店では生産者の方が自ら販売していたため、買う側にとって生産者の顔が見える商品を買うことは安心感にもつながるし、地元の作物への愛着がわくのであろうと感じた。

(白畑春来)



神子田朝市を見学する様子

ホームステイ

岩手サイトでは、日米からそれぞれ一人ずつがペアとなって、岩手県にお住まいのご家族にホームステイをさせていただいた。実は、僕が今回の JASC の中で一番よかったと感じているのはこのホームステイである。東京に長く住んでいる私にとって、その思い出はあまりに新鮮で、なつかしい。まがりくねった路地裏と黄色い電灯、静かにはじける線香花火と夕闇に揺れる提灯、強くて心地よい太鼓の音と盆踊りの輪、仲のいいご家族と地域の人々の温かいつながり。本会議中は、政府関係、商業関係、学術関係のイベントが多かった中、ホームステイは、本当に日本を感じられるイベントだったと思う。日米交流には、お互いの文化を示しあうことが不可欠だと考えるが、まさに絶好の機会であった。楽しい時間ほど早く過ぎるもので、気が付けばペアのプラモドと私は次のイベントであるシンポジウムの会場に来ていた。別れ際に、ご家族の長女が泣いていた。そのことが、こ

の素晴らしさのすべてを語っていると思う。
(小松崎遥平)



ホームステイでの着付け体験

地域活性化・復興フォーラム

岩手での最終日、「岩手の魅力化」をテーマにフォーラムが行われた。前半は、地元岩手でご活躍されている方々にご講演をして頂き、後半は学生と地元のフォーラム参加者による英語でのディスカッションが行われた。大学でも地域活性化について学んでいる自身にとっては、大変実りあるフォーラムであった。地元の参加者には若者だけでなく、シニア世代も参加しており、積極的に英語で自分の意見を述べたり、私たちの話を聞いたりする姿が印象的だった。一生懸命議論に参加し、「このまちを良くしたい!」というような気持ち伝わってきた。岩手の方々はとても優しく、おもてなしの心が溢れていて、何よりも地元愛が強く感じられた。岩手でのステイを通して、岩手の最大の魅力は「人」であると考え、4つのサイトの中でも一番思い出に残る

第3章 本会議・サイト活動

サイトと言っても過言ではない。もう一度この場所に帰り、ここの人々のために、このまちの発展に貢献したい。(大西由起)



地元民と議論するデリ



ご協力頂いた岩手県と盛岡市の方々

平泉見学

平泉では中尊寺と毛越寺を訪ねた。私にとっては今回が初の東北訪問であったこともあり、近年世界文化遺産に登録された平泉の訪問はとても興味深かった。

中尊寺に関していえば、やはり金色堂は豪華絢爛で見応えがあった。アメリカ側参加者も黄金に輝く阿弥陀堂を見て、

感動に沸いていた。平安時代の奥州藤原氏の隆盛を今に伝える貴重な遺構に面し、このような遺跡の価値を正しく理解し、次世代に継承していかなければならないと思った。

毛越寺に関していえば、池を中心に土地を広々と使い構成された庭園は、独特の空気を纏い、不思議と時間の流れを感じさせなかった。そのような中、友と歩きながらお互いについて話す時間は、心穏やかで、とても貴重に感じられた。

自然と調和し、浄土を模した平泉の景観は、紛糾する RT の議論に疲れた私の心を少なからず癒してくれた。(中澤彩)



中尊寺の前で

鶴ヶ城見学

8月19日、私達は鶴ヶ城の見学に行った。鶴ヶ城は、幕末、明治新政府に最後まで抵抗し続けた会津藩の城である。

一緒に回ったアメリカ側の参加者は、お城の建築や外観の美しさにも興奮していたが、城内に展示されている白虎隊員の写真や略歴を見て、その平均年齢の低さに驚いていた。

鶴ヶ城は、それまでのコンテンツのよ
うに、講演やディスカッションがあるわ
けではなく、分科会で扱っているトピック
に大きく関係するわけでもないし、日
本人の間でも特に有名な歴史的観光地と
いうわけでもない。正直に言って、そう
いう場所をどうやったらアメリカ側参加
者に興味を持ってもらえるだろう、と思
っていた。日本の歴史を説明しながら私
が感じたのは、英語で説明することの難
しさよりも、もっと深く日本の事を知ら
なければいけない、ということだった。
日本人として自信を持って歴史や文化を
しっかり説明できるように、これから更
に知識や見聞を身に付けて行きたい。

(森泰子)

■サイトコーディネーター後記

80年あまりの歴史を持つ日米学生会
議の歴史上、初の開催地となった岩手県。
東日本大震災からの復興、地域活性化、
そして岩手の豊かな文化や自然を、地元
の方々とともに体感し学ぶことに主眼を
置いて活動した。まず小岩井農場見学や
世界遺産平泉見学を通し、岩手の豊かな
文化や自然を実際に体感する機会を創る
こと、また被災地見学や復旧・復興シン
ポジウムを通して新聞やニュースだけ
ではわからない震災や復興の実状を把握
すること、そしてホームステイや地域活
性化フォーラムなど会議参加者と地元
の方々との相互交流の機会を多くもつこと

により、実際に経験してみても初めて感じる
岩手の自然や伝統文化、地元の方々の
復興への想い、そして今後の展望につ
いての深い理解を、会議参加者が得られる
ような工夫を施した。

多くの参加者が口々に4つの開催地の
うち岩手開催が最も思い出に残っていると
口にしている姿をみて、岩手開催の成
功を自負している。もちろん、会議計画
当初は震災から2年経ったとはいえ、未
だ復興に向けて多くの課題が残されて
いる岩手県で、無事に会議が開催でき
るかどうかさえ不安であった。しかしな
がら、今後の日米学生会議地方開催のモ
デル事例になると思われるくらいに卓越
した会議を実現できたのは、ひとえに岩
手の人々の惜しみない多大なご支援ご協
力のお陰であった。

たしかに岩手の自然や文化遺産には魅
せられたが、岩手サイトを企画してい
ても感じた岩手の魅力は、「人」にあった。
まず、県庁OBである邨野善義様、今泉
敏朗様、新渡戸基金の藤井茂様が、岩
手における財務活動を一手に担い、不慣
れな実行委員に会議計画当初から一貫
してご助言やご支援をいただくこと
になる岩手サポート委員会を組織して
くださった。岩手サポート委員会が音
頭をとってくださることで過去に類を
みない援助を頂くことができ、大変豪
華な歓迎レセプション、宮古市での
被災地視察プログラムの企画をはじめ、
多くの素晴らしいプログ

第3章 本会議・サイト活動

ラムの実現に至った。また、会議開催の事務手続きを担当される県庁や市役所、国際交流協会の職員の皆様が、私たち日米学生会議実行委員と一体となって開催の準備、会議スケジュールの企画作成、その段取り、講師の選定などに至るまで地元の視点や実状も踏まえご指導いただいたことは、誠に有り難かった。特に岩手県庁 NPO・文化国際課の石木田浩美様、盛岡市国際交流協会の伊藤たみ子様、岩手県国際交流協会の宮順子様には、岩手サポート委員会の方々と共に、知事講演からホームステイプログラム、地域活性化フォーラムまで全行程に熱心なアドバイスをいただき、会議実現に欠かす事の出来ないご協力を得た。小岩井農場の皆様からは、開業以来「人」が丹精を込めて、量より質にこだわって製品販売をしていることをツアーや講義を通して熱心に伝えて頂き、また神子田朝市では野菜を眺めていると、地元の方がそれはどんな野菜でどんな料理に使うのか丁寧に教えてくれた。岩手開催で最も難航するかに思われた被災地視察では、宮古市、岩手県立大学災害復興支援センター、三陸鉄道株式会社、そして日米学生会議 OB の平竹雅人様の大なるご尽力の下、会議参加者にとって復興への思いを心に刻む貴重な機会とすることができた。そして、東日本大震災後という状況が必ずしも万全ではないことが予想されながらも、本当の家族のように快くホームステイを

引き受けてくださった岩手の皆様が居てこそ、会議参加者が岩手に「ただいま」と言えるような日米学生会議と岩手県の親密な関係を築くことができたと実感している。このように会議計画から終了まで、岩手の「人」の温かみに幾度となく触れることができた。

上記の他、ここではお名前を挙げることの出来なかった実に多くの皆様のご支援、ご協力のもと無事に会議を成功裏に終了させることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、アメリカ側実行委員の **So Nakayama** と **Paul Yarabe** のタフな協力も成功に欠かすことができなかった。本当にありがとう。「われ太平洋の懸け橋にならん」日米関係に注力した岩手県の偉人、新渡戸稲造の有名な言葉だ。冒頭で述べた通り、日米学生会議は約 80 年の長い歴史を誇るが、不思議なことに第 65 回になってようやく日米の懸け橋のふるさとである岩手に初めて「里帰り」を果たした。現代の国際人としてこれから活躍するはずであろう第 65 回参加者が岩手で学んだことを社会に還元し再び岩手の地を訪れてくれたら、岩手サイトコーディネーターとしてそれ以上に幸せなことはない。将来会議参加者と岩手がグリーンピア三陸宮古で植樹した桜で繋がり、復興という名の花が咲き開くことを願って筆を置かせて頂きます。(市毛裕史、野口ゆかり)

日米の若者 復興に関心

学生会議 達増知事が講演

8.13
2013.8.13

日米の大學生が約1カ月間の共同生活を通じて、互いに理解を深め、復興に関心を持つ。本県日米若者学生会議(主催)は13日、本県で「日米の若者 復興に関心」のテーマで、学生会議を開催した。



被災地の復興などについて達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

ラダラー(1と)は、復興に関心を持ち、被災地を訪問し、復興支援活動に参加したいと希望する学生を募集している。また、被災地の復興などについて達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

本県、被災地復興の現状や課題について、達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

17日午後6時から、

盛岡市中ノ橋通り101号の日本国際交流センターで、日米若者学生会議(主催)は13日、本県で「日米の若者 復興に関心」のテーマで、学生会議を開催した。

被災地の復興などについて達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

本県、被災地復興の現状や課題について、達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

17日午後6時から、

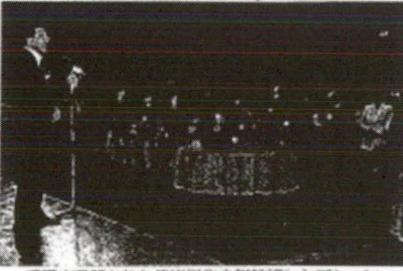
岩手日報 (2013年8月13日)

震災復興の現状学ぶ

盛岡でレセプション

8.14
2013.8.14

日米の若者一帯が、震災復興の現状を学ぶ。盛岡市でレセプションを開催した。



盛岡市で開かれた日米学生会議歓迎レセプション

被災地の復興などについて達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

本県、被災地復興の現状や課題について、達増知事らに積極的に質問する日米の学生ら

17日午後6時から、

岩手日日新聞社 (2013年8月14日)



ウェルカムレセプション



地域活性化・復興フォーラム



記念植樹

東京サイト (2013年8月19日～24日)

■東京サイトコーディネーター

川野さりあ

森田修弘

Katherine Jordan

Patrick Meuer



■東京サイト理念

世界最大のメガシティ首都東京。江戸開府から四百年有余、東京は日本の政治、経済の中核であると同時に伝統を守りつつも常に新しいものを取り入れ、その魅力は外国人の好奇心を刺激している。国会や官公庁、米国を始めとする外国の公館、企業、国際機関が集中する一方、上野、浅草に見られる下町情緒溢れる古き良き日本の一面も持つ。またファッション、アートの分野で国際交流が盛んな原宿、秋葉原はもとより、博物館や美術館など文化施設にも恵まれ、文化芸術の中心地としてプレゼンスを発揮する。今や世界中の人が集まり、様々な価値観が交錯するこの街で、第65回日米学生会議の活動を総括して、分科会の議論や成果を社会に発信する。

■サイトスケジュール

8月19日(月)

東京到着

分科会活動

8月20日(火)

デロイトトーマツ

コンサルティング訪問

小泉進次郎衆議院議員講演

外務省レセプション

8月21日(水)

米国大使館訪問

公使公邸レセプション

ジョン・マケイン上院議員講演

8月22日(木)

ファイナルフォーラム

アラムナイレセプション

8月23日(金)

新実行委員選挙

ファイナルリフレクション

8月24日(土)

米国側参加者帰国

■具体的な活動

デロイトトーマツコンサルティング訪問

デロイトトーマツへの訪問は、私個人にとっては初めてのコンサルティング会社訪問となった。コンサルティングの知識がなかった私にとって、デロイトトーマツで伺ったお話はとても興味深い内容だった。様々な分野の知識が必要なコンサルティングの仕事の説明に、コンサルタントの方を尊敬すると同時に、コンサルティングの仕事の難しさを感じた。その一方で、職員の方々が以前勤めていた職場や大学で専攻していた分野といったバックグラウンドが大変多様性に満ちたものであったことに驚き、コンサルティングの仕事が多岐にわたる事を知り、個人的に関心を持った。お仕事の内容を伺う限り、私個人にコンサルティングの仕事は向いていないと感じたことは事実であるが、コンサルティングの仕事に関わらず、外資系の会社ということから、個人的には職場で英語を使って仕事ができるという環境に魅力を感じた。

(兼子莉李那)



デロイトトーマツの会議室にて

小泉進次郎衆議院議員講演

東京のオリンピックセンターにて、自民党の議員である小泉進次郎氏にご講演いただいた。あえて政治的な話はせず、ご自身の学生時代や、英語習得の苦悩などについて語ってくださった。印象に残っているのは、若者の政治離れについて質問された際に、政治に興味をもってもらうには政治家に対して、人として興味を持ってもらうことが大切であると仰っていたことだ。そのような意味合いで今回、我々学生も親しみのある学生話を、小泉氏はしてくださったのではないかと個人的には感じた。これも小泉氏の政治的戦略の内かもしれないが、私は人間として小泉氏に興味を持った。今後小泉氏の動向を追う中で政治に対して積極的になるよう心がけたいと思う。(木村優吾)



デリの質問に答える小泉進次郎氏

外務省レセプション

外務省、文部科学省、賛助団体の方々をはじめ、日米学生会議同窓会会長、副

会長のご出席のもと盛大に執り行われた。JASC 当初は互いに顔を知らないレセプションが苦手だった私も、JASC 最後となる外務省主催レセプションでは積極的に多くの各界で活躍されている方々のお話を伺い、JASC への、日本への、世界への見識をさらに一層広げることができた。多くのアラムナイの方々が出席なさっている中で白髪の紳士の方との出会いがひとつ印象に残っている。将来のJASC のレセプションの時に自分もこの方のようにJASC のOBとして立派に戻ってきたいと思った。長い歴史を持つJASC は多くのアラムナイを始めとする賛助団体や関係各位のご支援の下で活動できていると改めて感じた。ここに改めて感謝申し上げます。(中村優太)

米国大使館訪問

米国大使館でのディスカッションはそれぞれの興味に応じて、4つのグループ(ex.TPP 協定、両国での留学生数等)に分かれ、米国大使館で働く外交官の方を交えて議論が進められた。まず、驚かされたのは外交官の議論のリードの仕方であった。学生側が「1」を送ると、それを膨らませて「2」として新しい議論を返してくる。それが続き、気付いたら議論の幅が広がり、トピックの本質に近づいていっているのが私達学生自身でも感じられた。また、その行為により議論が進むだけでなく、誰でも発言しやすい

空気が作られ、グループとしてのまとまりがでていたことにも、驚かされた。知識や論理、話し方以外のことでもいろんなことを学ばせてもらった米国大使館のディスカッションであった。(伊藤孝真)



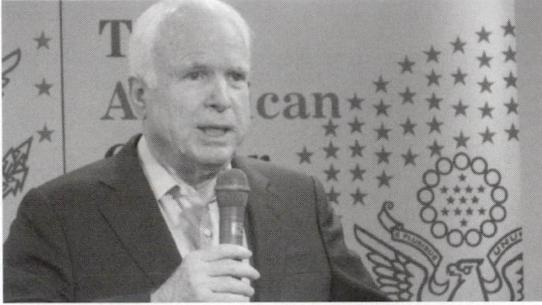
ディスカッションの様子

ジョン・マケイン上院議員講演

本来、プログラムになかった米国上院議員であるジョン・マケイン氏にご講演いただき、学生が彼に直接質問できたのは参加者全員にとって非常に有意義な経験となった。マケイン上院議員の経験豊富なバックグラウンドから語られる日米関係と彼の政治観は奥深く、アメリカの政治家のすごさを肌で感じる事ができた。また幸運な事に、私はマケイン議員に直接質問する機会を得ることができた。多くの政治家が一般の市民や学生と比べて、強力な地盤や支援を得ていることに対してどう思うかを議員に質問したところ、より多くの市民が政治参加できる政策やプログラムを作る必要があるとの答えをいただいた。草の根や、市民から政

第3章 本会議・サイト活動

治参加をどのように実現するかヒントを彼のような偉大な政治家の講演から得ることができたのは私にとって大きな衝撃だった。(大沼雄貴)



講演をするジョン・マケイン議員

ファイナルフォーラム

各分科会が約1ヶ月かけて議論してきた成果を社会に発信する最終発表会であるファイナルフォーラムが、青山学院大学にて行われた。分科会活動の終盤、特に東京サイトに入ってから、このフォーラムの発表準備に夜な夜な追われていた分科会がほとんどだったのではないだろうか。準備段階では、分科会メンバーの間で意見が衝突し、苦しい思いをすることもあった。しかし、最終的には各メンバーの思いや情熱を一つのプレゼンにまとめ上げることが出来た。パワーポイントやスキットなど、内容形式共に様々であったが、それぞれの分科会の個性が表れていて完成度の高いものであった。もちろん反省点も残されたが、未来へと繋がる大きな功績となった。(伊井佐織)



発表の様子

アラムナイレセプション

本会議の集大成であるファイナルフォーラムの後、私達はNHK青山荘に移動し、日米学生会議OB・OGの方々と共にレセプションを楽しむこととなった。戦前の回からの参加者から第64回(前回)の参加者の方まで、幅広い年代の方々にお集りいただいた。その方々との交流を深めるうちに明らかになったことは、時代によってディスカッションの形式や内容は異なるものの、会議を通じて我々が感じてきたものは諸先輩方のそれと殆ど変わることがない、ということであった。組織としての記憶・精神は、ちゃんと次の世代にも受け継がれ、連続性を保っているのだと実感した。この素晴らしい経験を次の世代にも体験してほしい、という気持ちをバトンとして繋いできた結果が表れているのだろう。我々には、このバトンを次の世代に着実に繋いでいく義務がある。そう身が引き締まる夜であった。(吉田知史)



レセプションの様子

サイトコーディネーター後記

終り良ければすべて良し、という言葉があるように最終サイトの印象が最後にその年のJASCの印象を左右するというプレッシャーの下、東京サイトの準備は始まった。

限られた期間の中で如何にその地の魅力を十分に伝えるコンテンツを組めるか、如何にアメリカ側参加者に日本人の誇りと伝統を表現できるか。サイト企画は我々実行委員に与えられた最高の特権であるが、その分、責任重大でもあった。ホスト側として大国アメリカに対し、日本国が諸外国の中でも独特の美しさを持っていること、そして日米学生会議は「ただの」国際交流プログラムではないことを知ってもらいたいという意地もあった。

第65回東京サイトは、「日本の政治そして経済の中核としての東京」という点を重視しコンテンツを組んでいった。その結果、丸の内に事務所を構えるデロイトトーマツコンサルティングへの訪問、衆議院議員小泉進次郎氏による講演、米

国大使館への訪問、ジョン・マケイン米国上院議員による講演、と各方面のご協力の下、歴史のある日米学生会議だからこそ実現できたであろう大変豪華で充実したコンテンツを組むことができた。また、連日開かれたレセプションではアラムナイの方々を始めとした社会の第一線で活躍をされてきている方々と交流をすることによって、参加者たちに改めてJASCのもたらす人との繋がりを感じてもらえたと思っている。また、ファイナルフォーラムでは全参加者が各分科会で会議を通して議論し学んできたことを出し切り、最終日前日に行われた第66回会議の実行委員選挙では多くの立候補者の中から、この会議の歴史と伝統を引き継いでいく新しい16人に襷を渡すことができた。こうして第65回日米学生会議は幕を閉じたのである。

思えば1年間準備してきた本会議がクライマックスに達しているにも拘わらず、最終サイト東京で私たちは常にサイトロジスティックのことで頭をいっぱいにしてきた。しかし目まぐるしい日々の中であって、ファイナルフォーラムでの参加者たちの自信に溢れた顔、数多く出た新実行委員選挙の立候補者、そして別れ際に流れた涙、これらを見たときに最高に幸福な気持ちに包まれるのだった。多くの方々の温かいご支援によって成立したあまりにも贅沢なプログラムが、一つひとつ、目の前で現実のものとなっていく。

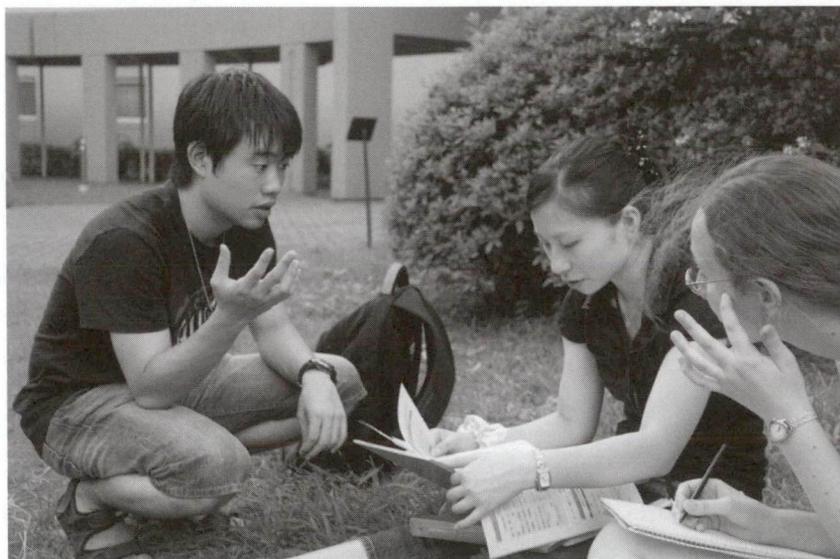
第3章 本会議・サイト活動

その度に言葉では言い表せない程の感動を覚え、東京サイトの担当で良かったと心から思えた。

東京サイトの開催にあたり、実に多くの方々にご支援ご指導賜りました。この

サイトを実現可能にしてくださった全ての方々にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。有難うございました。

(川野さりあ、森田修弘)



第 4 章

分科会活動

アジア太平洋地域における日米安全保障

Regional Security in a Global Era

■分科会メンバー

飯島千咲*

中村優太

森泰子

吉井拓真

吉田知史

Patrick Meuer*

Michael Fitzgerald

Brooke Nowakowski

Jeff Yamashita

Xiange Zeng

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

冷戦終結後の世界は、国際テロ、地域・民族紛争、大量破壊兵器の拡散を始めとする複雑で不透明な問題を内包している。アジア太平洋地域においても、北朝鮮の核開発、台湾海峡有事の懸念など依然として多くの不安要素が存在する。近年、中国の軍事的台頭と強硬な海洋進出は、南シナ海で領有権問題を引き起こし、日本との関係においても、尖閣諸島をめぐる政治的緊張が高まっている。普天間基地移設問題の迷走により日米関係が停滞し、日本の外交力強化が必要とされる中、このような脅威に

どのように対処していくかが今後の大きな課題となっている。当分科会では、旧安保条約締結から現代に至るまでの日米安保の歴史を踏まえ、国際情勢の変容に伴い、日米同盟における役割分担を再評価し、アジア太平洋地域の平和と安定のために、日本はどのような機能を独自に果たすべきか、また米国とともに構築すべき安全保障体制とは何かを模索する。

■事前活動

春合宿

学年、学校、専攻も異なる五人が集まり、本会議にむけて不安と期待が入り混じる中、分科会は始まった。事前にお互い文面での自己紹介を終えていたが、正直当初は、どんなメンバーなのかと不安は大きかった。しかしいざ始まると、そんな不安はいつしか無くなり、皆で集まり話すのが楽しくて仕方がなかった。各人、個性を持ち輝いている皆の意見を聞き、自分の意見を言うことが本当に至福の時間だった。もちろん、今後の方針や各人の知識の差等まだまだ課題はある。個人としての課題もたくさんある。そういった課題がいくつも浮かび上がってきても、それでも私は楽しみだ。今までずっと継続されてきた日米安全保障の分科会。私たち5人ができることを懸命に考え、追い求めていけば自然と今までの最高のもので出来上がるのではないかと思うし、最高なものにする。

(吉井拓眞)

元サハリン日本センター所長

岡林一郎様訪問

日時：6月8日（土）

場所：埼玉県内公民館

私たちの分科会はメンバーが住む地域がバラバラで、残念ながらこれが唯一のフィールドトリップであった。

今回の内容は、ロシアの専門家で、元

サハリン日本センター所長の岡林一郎様に「ロシアとの関係を発展させようと模索する日本・中国が互いに対立する中、ロシアは日中関係、ひいては東アジアの国際秩序にその影響力を行使しようとする意図があるのか」という疑問点を中心に、お話頂くというものでした。

ロシアは、日中関係をどう動かそうなどということはあまり考えていない。しかし、「中国は伝統的な同盟国であり、伝統的な脅威とも感じている」というロシアの対中認識があり、日本に対しては技術面での協力だけでなく、安全保障面でも中国に対するヘッジとしての機能に期待している、という旨をお話頂きました。

岡林様は、人生の半分をロシアで過ごされたということで、ロシア人の視点での国際情勢の認識を詳細に説明されました。文章に載らないような細かなところで、その様な点が散見され、これは非常に貴重な情報でした。

最後になりますが、岡林様をご紹介頂いた伊藤忠商事 OB である降旗健人様・中川様に感謝申し上げます。ご協力頂き本当にありがとうございました。

(吉田知史)



岡林一郎様と

直前合宿

今まで3か月の準備期間にて自分たちがどのような軌跡を描いてきたか、本会議で何を議論したいか等をスライドにまとめて他のRTメンバーに発表する準備から始まった。この作業は私達にとってとても重要なものとなった。今までただただ夢中に試行錯誤して進んできた道のりを細かく振り返ることで、一つ一つの議論の重要性、そして全体の流れを再確認することができた。そして発表後、周囲からの質問や指摘を本番に活かすと誓い、メンバー内だけでお互いの胸の内を語り合った。それは期待と不安の入り混じるものであった。(吉井拓真)



本会議前初めてのRTジョイントミーティング

■本会議中の活動

日本側参加者の中には安全保障分野を専門としている者が少なく、また議論に臨めるほどの知識量も備えていなかった。そこで日本側参加者では本会議前までに知識の補充と議論の方法を毎週テレビ電話で行うことにした。外交問題について議論をすることを目標とし知識の補充は話し合いの末何冊かの本を担当ごとに要約し、毎週のミーティングで共有することにした。そして、議論を行う知識を補充したところで実際に問題を提起し議論に舞台を移そうとしたが、議論の方法やJASCをどのように終わりたいのか、どのような形で最終報告をしたいのかということに時間を多く費やしてしまい、実質的な議論ができたのは正味1回のミーティングだけだった。実際の議論を重視する立場と方法論を重視する立場とに二分してしまい、分科会始まって以来最悪の状況となってしまった。その点を踏まえ、直前合宿では分科会内でリフレクションを行った。その結果、本会議にはわだかまりもなく望むことができた。また、事前準備での反省点を踏まえ、米国側参加者にいままで日本側参加者が議論してきた方法論を提示し、本会議では実質的な議論を行うことを提案することにした。

本会議最初のサイトとなる京都では、日本側参加者が春合宿から本会議までに至る準備の成果を共有した。日本側参

加者と米国側参加者でバディを組んでおり、互いの RT ペーパーの要約を最初の時間で共有し、ペーパーへの質疑応答や各人が使用した言葉の意味、定義を確認した。全員完全に一致する項目ではなかったものの、非常に興味深く、また昨今の国際情勢を反映していた。そして、ファイナルフォーラムを目指していく上で日本側、米国側の安全保障に関する基本的な質疑応答を繰り返した。

京都サイトで議論を行う上でのウォーミングアップが終わったので、長崎サイトでは実際の議論を行った。日本側が提示した方法論を米国側はおおむね受け入れてくれたこともあり、無駄のない深い議論を行うこととした。しかしながら実際には、事前準備での反省が生かされず、双方ともに議論を行いたいのは共通の認識であるにもかかわらず日本側が方法論に固執してしまい議論が一向に進まなかった。また、ここで問題に取り組む学術的なアプローチの方法が日本側と米国側では顕著に違うと認識させられた。

一向に進まない議論に双方焦りを感じ、分科会の雰囲気最悪になっていた。分科会の中で3つのグループに分割しそれぞれのセクションで議論を交わし、その内容を全体に共有するという方式になった。この状況を鑑み、日本側からこの状況を改善するために RT リフレクションの時間を設けることが提案され

た。各人が抱く焦りやいらだち、葛藤を洗いざらし告白した。終わりには自然と涙も出て、互いに抱き合っていた。そのとき、もっと早く言っていればよかったと思った。多くの講演会、施設訪問、地元の方々との交流と疲れているなかでの分科会活動であったが最終的にはどの分科会にも負けない素晴らしい発表ができたと自負している。分科会と通じて得た経験は今後の人生の大きな糧になるであろう。(中村優太)



初めての RT タイム

ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムは分科会にとって一つの直近の目標となる。1か月間議論した内容を15分のプレゼンテーションにまとめて発表するため、発表の方向性を決める時点から意見が割れて難航した。議論は何度も行き詰まったが、次第に形が見えてくるにつれて皆のやる気もスピードも上がっていった。話し合いを十分に重ねることも大切だが、そ

第4章 分科会活動

れと同時に「とりあえず始めてみる・進めてみる」ことで意外と良い方向に進み解決の糸口が見えることもあると学んだ。

最終的に、スライドを作るのが得意な人、プレゼンに慣れている人、具体例についての知識を沢山持っている人等々、皆がそれぞれの力を発揮して、本番を終えた後の達成感と一体感は特別だった。

ファイナルフォーラムは目に見える形で結果が残るので、効率性や結果に目が行きがちだが、それだけでなく、日米の学生が、時には互いの力を借り、時には周りを助けながら、共に協力し合うことの大切さも実感できた。（森泰子）

■分科会感想

日米学生会議の分科会を決める際に今日の日米問題を考えると一番初めに安全保障分野が思い浮かんだ。先の民主党政権による沖縄基地問題が日米同盟の存在意義に疑問を投げかけ、日米関係の不安定化が日本周辺国のナショナリズムの高揚と軍事力の台頭、その結果として竹島や尖閣諸島などの主権侵害など極東地域の平和と相互共存の繁栄に影響をもたらしていると感じたからである。

春合宿の顔合わせから本会議まで約3か月間、日本側参加者が関東圏、関西圏、九州圏にそれぞれが在住していることもあり直接顔を合わせて準備を行うこ

とができなかった。そのため、テレビ電話を介してのミーティングやSNSを使用した連絡を行った。

本会議最初の分科会活動ではいままで日本側参加者が3か月間してきた準備の成果を米国側参加者に共有した。日本側参加者は頻繁に連絡を取り合い、他の分科会よりも米国側参加者を受け入れる用意はできていた。しかしながら首尾よくいかず、米国側参加者とは何度も衝突し、現実逃避したことは幾度とあった。そのとき、励まし合ったのは同じ分科会の日本側参加者だった。ときには葛藤や衝突を経験したからこそ互いの気持ちを汲み取り涙した時もあった。

いま振り返ると分科会活動は平坦な道のりではなく多くの壁を乗り越えてきた。そしてそれらを乗り越えるたびにみんなの絆は一層強くなっていった。そして最後に米国参加者が僕達に言ってくれた“*We are Family.*”今でも忘れられない。（中村優太）

3か月間、毎週のミーティングやフィールドトリップ、個人で書くRTペーパーなどを通して、知識を深めると同時に、日本側参加者同士の仲間意識も深まった。日本側だけでも意見がぶつかり議論も難航したが、本会議前までにはお互いを理解し合い良いチームが出来上り、アメリカ側を迎える準備が整っていた。

アメリカ側参加者は皆とても頭の回

転が早く個性も強い人達だったため、最初の方はやはり意見が衝突し、ようやく妥協点を見つけてもなかなか皆が一つにまとまらなかった。もちろんファイナルフォーラムで良い結果を残すことも大切だが、せっかくのこの1か月間、皆で目標に向けて協力するプロセスも同じくらい大切にしたい、という気持ちがあったため、まとまらない分科会に対して焦りを感じて悩んだ。しかし、やはりメンバー全員に自分の想いを伝えたいと思い、分科会の時間に、分科会・皆にどうあってほしいか、と問題提議をして自分の考えも伝えた結果、それに応じて皆も本音を伝えあい、目標を再共有できた。このプロセスを経たことで、お互いを理解し認め合い、ファイナルフォーラムに向けての再スタート、そしてその後もずっと続く信頼関係を築くことが出来たと感じている。時間もかかったし決して簡単ではなかったが、専門分野も住む場所も違うそれぞれの個性が生きた本当にユニークな分科会だったと思う。この分科会で1か月間頑張れたことはかけがえのない貴重な経験になった。

(森泰子)

私が参加した分科会のテーマは、会議に参加するまでに学習したことも、興味・関心を抱いたことも少なかった。しかし、同じ分科会にはそれを専門にするメンバーもいて、開始当初からメンバー

内での知識の差は歴然としていた。そのことから各人意見の頻度や積極性が大きく異なり、その中での自分の役割を考えた。このテーマにおいて詳しくない自分が1人の一般人として出せる純粋な疑問や意見、質問を出すこと。メンバー1人1人の個性を把握し、各人の良い所を引き出し、苦手な所を補い合うこと。1つ目。毎回のミーティングで課題を各自こなし。テーマに関する計4冊の本を読み、知識を補充し、英単語を覚える。分科会で1番知識がなかったので必死で取り組み、意見や質問を積極的にぶつけた。本会議では病気によるドクターストップによって、ほとんど参加することはできず、自己の価値観を反映させることができなかつたのは残念だが、この「0からの勝負」という経験は将来必ず生きると確信している。2つ目。メンバー4人の個性は強かった。性格、目標、問題意識全てが違う。最初から試行錯誤が続いた。個人的には分科会の議論に加え、各個人の特性を把握するべく個人同士の会話の時間を大事にしたかったが、それよりも分科会の議論を進めようと焦ったり、あまりに個人が忙しかったりと、そういった時間をとれず、結果として問題が大きくなってから話し合うことが多かったのではないかと思う。反省することは多くあるが、総じていい経験になったと思う。

(吉井拓眞)

第4章 分科会活動

苦勞することが本当に多い。そんなRTでした。勿論、苦勞のないRTなどないことは承知しています。それでも、個性の非常に強いメンバーが多いこのRTが1つに纏まっていくことは困難で、最後まで本当に苦しみました。

表情の違いや語気の違いは人それぞれなのですが、それをどう受け取るのか、どこまで受け入れるのか等が、文化的差異を生み出すのでしょうか。例え、言葉が言葉として通じていても、相手がどういった感情を抱いているのかということを通常のコミュニケーションだけで読み取ることは、その様な障害によって非常に厳しいものでした。

更に、長崎サイトの途中でメンバーの1人が体調不良で離脱せざるを得ず、私自身も体調を崩し1週間以上も活動に参加できないということもありました。この悔しさや、他のメンバーに迷惑をかけてしまったという申し訳ない気持ちを完全には払拭出来ませんでした。

しかしながら、この様な葛藤から得たものは少なくありません。悔しい気持ちは、疲れた身体・頭を鼓舞し続け、日を追う毎に私の思考をより深いところへと導き、物事を見る視点をより広いものにしました。この経験は、私の血となり骨となり、これから様々な困難に立ち向かう際、必ず役立つでしょう。

最後に、こんな自分を日米学生会議参加者として選んでくれた飯島千咲をは

じめ、全てのRTメンバーに感謝申し上げます。ほんまにありがとうございます。(吉田知史)

■分科会総括

以前から日本の外交力の弱さが指摘されている中、中国の軍事的台頭や領有権問題など、数多くの不安要素が存在する今日のアジア太平洋地域において、日本が独自に果たすべき政治的機能や、構築すべき安全保障体制を模索する必要性と重要性がより一層高まってきている。JASCにおいて、日米安保をテーマとして扱う分科会は最も伝統ある分科会と言っても過言ではないだろう。第65回を数える今回は、その議論の対象を日米二国間関係のみならず、アジア太平洋地域にまで拡大し、マクロな視点で捉えることによって、変わりゆく国際情勢に見合った安全保障体制とは何かを再考することを目指した。

この分科会の一番の魅力であると同時に最大の壁となったのは、所属メンバーの多様性ではないだろうか。全員が学年も違えば、専攻も経済学・法学・政治学・医学と異なり、住んでいる地域も東京・京都・岡山・福岡とバラバラであった。安全保障という難しいテーマであるが故に、当初は専門性の違いによるメンバー内での知識の偏りが大きくあった。関東在住者が主として構成された他の分科会のように、気軽に直接会って意見を

交わすことができない難しさや、議論が思うように前に進まないもどかしさを全員が感じていた一方で、それぞれが分科会における自分の役割を問いながら、どうしたらよりよい分科会になるかを真剣に考えてくれていた。

本会議では、日米両国のメンバーの興味分野と照らし合わせながら、安全保障という大きなテーマから、①尖閣諸島をめぐる政治的緊張の高まり、②沖縄問題、③日本の自衛隊という3つのケーススタディを選び、軍国主義とナショナリズムの観点よりそれぞれ検証した。メンバーの体調不良に悩まされたり、言語の壁に衝突し、文化の違いに悩んだり議論は一筋縄ではいかなかったが、メンバー一人ひとりの優しさや分科会を想いやる気持ちの強さのお陰で、ファイナルフォーラムでは1ヶ月の成果を立派に発表することができ、コーディネーターとして本当に誇りに思う。

毎日の生活の中で、日米同盟や安全保障論について深く考え、誰かと真剣に議論し合う機会は、ごく限られた人を除いてそう多くないだろう。JASCはこのように、見えにくい問題や意識しづらい問題を、学生という自由な立場から真剣に考え、議論し合う機会を与えているという点でも、非常に大きな役割を果たしている。この分科会活動を通して得た知識、経験、そして友情が、メンバーそれぞれの将来にどんな形であれ息づいていく

ことを心から願っている。

最後に、FTを快く受け入れて下さった岡林一郎様、私と共に分科会を引っ張ってくれたRTパートナーのPatrick、またこの分科会を応援して下さいました全ての方々へ心からの感謝を申し上げ、分科会総括と致します。(飯島千咲)

グローバル化と食の安全保障

Globalization and Agriculture in the 21st Century

■分科会メンバー

横田真彩*

荒木尊士

上江洲仁美

木村優吾

中澤彩

So Nakayama*

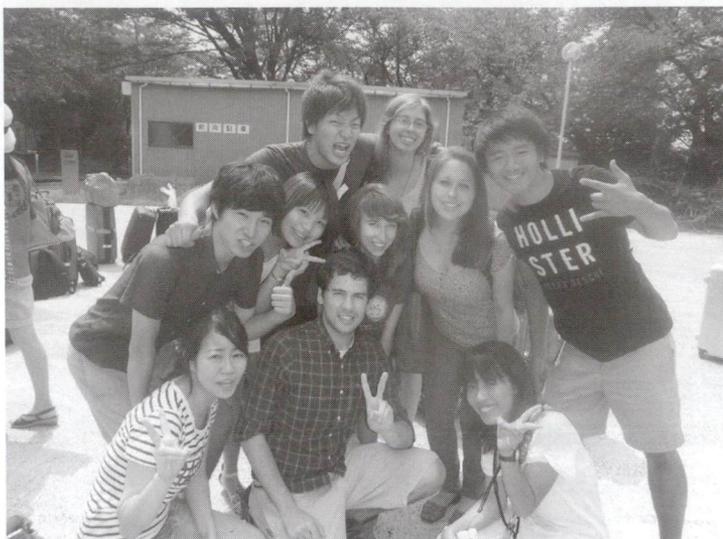
Emily Aiken

John Burke

Haley Sweeton

Paxton Misra

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

私たちに欠かせない「食」を取り巻く問題は、グローバル化に伴い世界規模で解決が求められている。世界の総人口が2050年までに90億人を突破すると予測される中、急激な人口増加や気候変動は食の安全確保を脅かし、国境を越えた食料の流通が重要になっている。各国は自由貿易の推進により経済成長を求め、二国間あるいは多国間で農水産物を含めた自由貿易協定（FTA）が締結され、日本でも環太平洋経済連携協定（TPP）交渉参加をめぐる議論が交わされている。しかし、大豆や小麦のほとんどを輸入に頼り、食

料全体の自給率低下が問題視されている日本では、TPP参加により「食」を支える国内農業の存続が危惧され、慎重論も根強い。また、牛肉のBSE問題に始まり、残留農薬や遺伝子組み換え技術などにより次々に国内外で生起する食品問題は、食そのものに対する不安を生み出している。当分科会では、グローバル化が進む中、食の安全保障について、経済連携協定や各国の食の安全に対する意識や制度などを踏まえ、どのように食の安全保障を持続可能にすべきか考察する。

■事前活動

春合宿

今後の食の安全保障を議論する際に、外国から全ての食料を輸入する「合理性」と、国内で全ての食料を生産する「持続性」の二軸が存在すると考えた。戦争、気候変動という食の安全保障を脅かす課題、食料の質と量の維持といった目標を踏まえ、「合理性」と「持続性」のバランスが重要であると結論づけた。「合理性」を保つ上で輸入食品の安全基準の見直しの必要性や、「持続性」を高める上では農業従事者を増やすにはなどといった、様々な課題や解決策を話し合った。私は「食」に対する知識が少なく、議論することに不安を抱えていたが、他の参加者も同じ悩みを抱えていることがわかった。皆で時間の許す限り議論を行えたことは、本会議に向けた活動を行う上での大きな糧となった。

(荒木尊士)



春合宿解散前の様子

イオン株式会社有本様訪問

日時：6月8日（土）

場所：羽田空港

有本様のお話の中で最も印象に残ったのがフェアトレード商品のエピソードである。トップバリュは、大学生の発案によりフェアトレード商品を販売するに至り、フェアトレード商品を通じ、ドミニカ共和国コナカドの生産者、日本の消費者、販売者(トップバリュ)の三者が対等な立場で向き合え、お互いに無理をしなくてよい経済システムをつくった。さらにフェアトレード商品は現地の小学校に教員を雇う手助けをするなどコナカドの発展に寄り添っている。生産者、消費者、販売者は、自分のストーリーだけでなく、関わる相手のストーリーも理解した上で行動することが当たり前となる時代の到来を思わせるトップバリュの揺るぎない姿勢に共感を覚えた。

(荒木尊士)



イオン株式会社有本様と

第4章 分科会活動

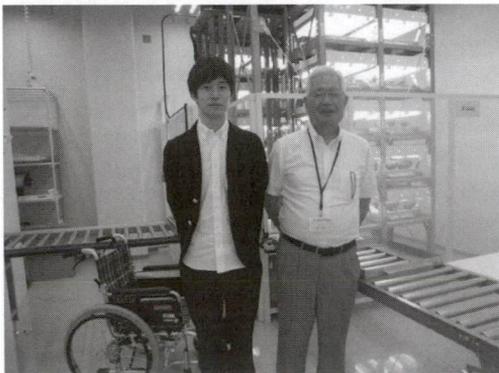
大阪府立大学植物工場研究センター訪問

日時：6月21日（金）

場所：大阪府立大学植物工場センター

平成25年6月21日に大阪府立大学、植物工場研究センターを見学させて頂いた。完全人工光型植物工場とは、環境及び生育のモニタリングを基礎とした高度な環境制御を行うことにより、野菜等の植物の周年・計画生産が可能な栽培施設である。砂漠化、塩害、土壌汚染などこれまでの農業技術だけでは農作物の栽培が困難な地域においても農作物の栽培が可能となり、地域の課題を解決する可能性を秘めた技術として今、注目を集めているそうだ。SUBWAY 野菜ラボ大阪府立大学店では、店内の植物工場で栽培した野菜を使ったサンドイッチが販売されており、生産地と消費地が近く、野菜は新鮮で美味しく感じた。イニシャルコストが高額など課題もあるようだが、植物工場が日本の農業を強くする技術として一翼を担うことを期待している。

（荒木尊士）



当日お世話になった小倉様と

沖縄県 第一牧志公設市場訪問

日時：6月24日（月）

場所：第一牧志公設市場

RTメンバーの一人に沖縄出身の学生がいるため、その学生のお母様に第一牧志公設市場を案内していただいた。市場はまさに「昔ながらの地域に根差した市場」といったような感じで、生鮮食品や加工品が所狭しと並び、人々の活気に溢れていた。私たちは朝のとても忙しい時間に訪れたのだが、市場の方々は私たちの質問に丁寧に答えてくださった。50年近く続く老舗が多く、店の方々は沖縄の食を取り巻く環境の変化を見てきた方々だといえる。事実、大型量販店や安い海外産との差別化、若者における外食産業・加工品の人気等についてのお話を伺うことができた。私たちは公設市場を運営管理する方からもお話を伺うことができたのだが、その方も時代の変化を強く意識しており、今後公設市場の役割、更には沖縄の食文化を見直す必要があるとおっしゃっていた。「守るだけでなく進化も大事」とのお言葉がとても印象的であった。

（中澤彩）

新規就農センター訪問

日時：6月24日（月）

場所：沖縄県農林水産部営業支援課内

新規就農や農業支援に関わる西田様からお話を伺った。以前から生じていた問題ではあるが、特に TPP が話題になって

以降、日本農業の持続性が危ぶまれている。農業の担い手不足、高齢化、耕作放棄地等全国で取りざたされる問題は、全て沖縄にもあてはまるようだ。加えて沖縄は決して地理的条件において恵まれているとはいえず、台風による被害も多い。ゆえに公的機関の農家への支援は欠かせないものであると思うが、実際沖縄県は、就農を考えている人から、新規就農者、ベテランの農家さんまで一貫した支援体制を構築しており、最大限の支援を行っているとお話であった。自然環境のリスクだけでなく、今後貿易が自由化されていく中で新たなリスクが生じてくるであろう。その際、企業の参入や新技術の開発等、時代に合わせて農業を変革していくことも大事であろうが、政府や公的機関の一貫した継続的な支援は以後も欠かせないものであり、農家の方々・日本農業を直接的に大きく左右すると思った。
(中澤彩)

八重洲町 花き農家 三上様訪問

日時：6月24日（月）

場所：八重瀬町 花き農家 三上様の農地

西田様のご紹介で、八重洲町にて小菊を中心に野菜・果実を栽培していらっしゃる三上様を訪問させて頂いた。小菊ならではのスプレー菊をはじめとする海外産との競合や自然災害等への対処に留まらず、農業を始められた経緯から所有者による土地の貸し渋り等、新規就農者と

しての具体的なエピソードを交えた苦労話についても丁寧にお話し頂いた。また、事前活動の分科会の議論にて廃棄問題に触れたが、実際にご自身では無駄をなくすため加工など工夫をして出荷している他、帰り際にはお土産にと袋いっぱいマンゴーを下さるなど、数値等紙面上の情報だけでは分かり得なかった農家の方の作物に対する思いにも触れたような気がした。本会議前に農家の方に直接お話を伺えたことは大変良い刺激となり、農業そのものの魅力を知る貴重な機会となった。
(横田真彩)



沖縄県農林水産部営農支援課 西田様

八重瀬町の花き農家三上様と

墨田区役所訪問

日時：7月12日（金）

場所：墨田区役所 5階保険計画課

墨田区役所を訪ね、「すみだの食育」について、市役所にお勤めの秋田様、またすみだ食育 good ネットにご所属の区民の方々からお話を伺った。「government から governance へ」というモットーの

第4章 分科会活動

もと、市民の方々と行政が絆を築いた上で協働して食育を推し進めていることが、お話の中身だけでなく実際にお話をされている様子から伝わってきたことが大変印象的だった。また、食育を保健・衛生面のみから捉えることなく、文化振興や環境保全、観光等、様々な分野を横断させた政策として捉え、他地域からのモデルケースとして注目されている等、食育の可能性についてより広い視野から考え直す契機となった。また、お茶やお菓子を頂きながら楽しく双方向的な議論の場を設けて頂き、食育に留まらず人生観や目標についてお話を頂き盛り上がるなど、大変刺激的な機会となった。

(横田真彩)



墨田区役所にて当日お世話になった皆様と

農林水産省訪問

日時：7月29日（月）

場所：農林水産省大臣官房食料安全保障課

霞ヶ関の駅に着き、立派な建物が立ち並ぶ風景にドキドキしながら、農林水産

省 FT を行った。中に入るとテレビ局関係の方々も多くいて、さすが農林水産省だなどと緊張した。大臣官房・食料安全保障課・総務班総括係でいらっしゃる、小林貴史様からお話を伺うことが出来ました。小林様からは、「なぜ、いま、食料の安全保障なのか：自給率を考える」という資料を頂いた。その資料には、日本の食料自給率を上げる必要性や国の取り組みが初心者でもわかるようとても丁寧に説明されていた。完璧で隙がなく、議論され尽くされた情報がそこにはあり、さすがだと思った。食料・農業・農村基本法の「将来にわたって、良質な食料が合理的な価格で安定的に供給されなければならない。」という言葉が、後の RT での議論のキーワードになった。

(上江洲仁美)

日本総合研究所訪問

日時：7月29日（月）

場所：株式会社日本総合研究所 東京本社
官民間問わず様々な事業に対し、知識・経験に基づいた経営のアドバイスを行うコンサルティング会社（シンクタンク的な役割も兼ねる）である日本総研を訪ねた。今回私達がお話を伺った方々は、IT、農業分野に携わっており、革新の求められる農業界において奮闘する農家の方や地域の取り組みについて具体的にお話をして頂いた。お話を聞いているとその言葉の端々から、日本農業はもっと攻めの

姿勢をもつべきだ、といったビジネスの志向が感じられた。日本には世界的に見ても優れた農作物、農業技術が存在する。日本農業は衰退の一途にあるのではなく、現在の危機をチャンスに変えて生まれ変わることができる、といった希望を今回の FT を通して私たちは抱くに至った。

(中澤彩)



日本総合研究所の皆様と

直前合宿

直前合宿では、春合宿の議論を振り返り、そこから様々な FT を通して、私達の議論がどのように変化していったのかということ話を話した。春合宿は合理性と持続性の双方のバランスが必要であるという結論だったが、直前合宿では、それに加えて、3つの新たな視点があるという議論になった。農業文化、田舎の田園風景など多面的機能を持つ農業、フェアトレードなどの持続可能システム、人間の生を支える一方で趣向品としての役割も果たす食の二側面性。そして、本会議では私達が描く未来の理想の農業の

形を議論したいという結論に至った。

(上江洲仁美)

■本会議中の活動

第1サイト東京及び第2サイト長崎

ジャパデリは春合宿から議論や FT を重ね、本会議においては一体どのように議論を進めようかと頭を悩ませてきたが、やはりアメデリが合流してからの議論というのは、新たな視点も加わり、予期せぬ展開をみせた。第1サイトでは、まずそれぞれ自分の RT ペーパーについて説明したり、ジャパデリがこれまで行ってきた FT について説明したりと、情報共有の時間を設けた。アメデリは私たちが想像していた以上に日本農業について詳しく、興味を抱いており、結果議論は、就農者の高齢化や、耕作放棄地、農業のビジネス化等日本農業が現在直面する問題の検討へと進んだ。問題を項目ごとに分けて割り振り、二人組でその項目についてのリサーチ、RT 全体に向けてのプレゼンを行った。第2サイトの長崎では、それまでに共有した知識、議論をより明確に、合理的に整理するための、最終的にはファイナルフォーラムへとつながる、アウトプットの枠組みを考えた。実際は、話し合いが頓挫したり、お互い譲れない意見があったりとなかなか苦勞したが、今振り返れば、どの瞬間も相互理解のためには欠かせぬ貴重な時間であった。

(中澤彩)



ディスカッションの様子

第3サイト岩手及び第4サイト東京

第3サイトの岩手に入るとやはりファイナルフォーラムが直前でメンバーの顔に焦りがみえはじめた。アジェンダをしっかり設定し、なるべくタイムロスをなくして時間を確保することを大切にた。ファイナルフォーラムの具体的な内容や発表方法で対立が起き、農業自体の議論に割く時間が少なくなった。ぶつかり合いと妥協を繰り返し、第4サイトの東京ではファイナルフォーラムの大筋は決定した。発表用のスライドは分担してそれぞれ作成した。これまでの議論を踏まえた内容が主であり、新しく農業に関しての何かを議論したりはしなかった。全体の流れと、細かな部分のつながりを自然にすることに時間がかかった。この時感じたのが、本会議前と、第1、2サイトでどこまで議論を発展できるかが大切であるということだ。(木村優吾)

ライスアート見学

岩手県水沢市にてライスアートをされている田んぼアート実行委員会会長森岡様のお話を伺うことができた。ライスアートは20年ほど前青森で始まったそうだが、それを6年前に岩手でやりはじめたのが今回伺った方であった。ライスアートは多数の色の稲を植えて田んぼに絵をつくるアートだ。これを始めたきっかけは偶然青森に行った際に、地元でもできるのではないかと試してみたことだそうだ。今や田植えと稲刈りの時に全国から参加者を募るイベントとして知名度を広げているそうだ。その農家さんにTPPや後継者不足など農業に関する意見を聞くことができた。最も印象に残っているのは、農業について語るのならば、まずは自分の手で農業を体験して欲しいという主張であった。農業と普段接することのない都会の人こそ農業の苦勞と喜びを味わってほしいということであった。ライスアートはそんな農業への感心の切り口として有効ではないだろうか。

(木村優吾)



ライスアート見学の様子

ファイナルフォーラム

TPP への参加表明や農業従事者の減少という日本の農業に関する現状を解説し、「日本の農業を再生させるのはどうしたらよいか」という問題提起をした。「日本の食料自給率の向上」という解決策を、フィールドトリップでの知見を用いて生産者側、消費者側の視点から提案した。生産者側としては小岩井農場を例に、農業ビジネスによる国内食料消費や農業従事者の増加を提案した。消費者側としては、盛岡神子田朝市や岩手県奥州市農家を例に、食育による地元農家と触れ合い、地元食材の消費促進を提案した。分科会内で意見の対立などはあったが、約1ヵ月に及ぶ本会議での議論や体験を形にし、伝えることが出来た。

(荒木尊士)



ファイナルフォーラム発表後の様子

■分科会感想

日米学生会議の合格通知とともに、分科会は「グローバル化と食の安全保障」と知らされた。この分科会は第一志望で

あり、「食」に対する興味はあったが、知識は殆ど無かった。不安を抱えたまま春合宿に臨んだ。他の参加者も同じ悩みを抱えていることがわかり、皆で時間の許す限り議論を行えたことは、本会議に向けた活動を行う上での大きな糧となった。本会議までに8回もフィールドトリップを行った。フィールドトリップを行うことは、私たちの知見が深まり、取材先にとっても関心を持った人の存在を知ることになり、互いにとって有意義なことだと思う。知識は増えた一方、肝心の議論が進まなかった。本会議が始まれば0から議論をやり直さなければならないのではと考えると、どのように議論を進めていかわからず、焦りだけが募った。本会議が始まった。各自がファイナルフォーラムへの不安や、分科会内外で不満を抱え、意見の対立が多くなり、一時は分科会の雰囲気が最悪だった。その後、大きく対立することはなくなったが、遠慮と妥協による議論が続いたように思う。英語能力を理由に、何もしない自分が歯痒かった。ファイナルフォーラムが終わった後、皆に笑顔が戻り、蟬りが消えた。本会議中に素直に話せなかったからなのか、分科会メンバーのことをもっと知りたいと今、思う。今後、分科会メンバーと時間をかけて相互理解を続け、関係を続けていきたい。(荒木尊士)

第4章 分科会活動

最終日、RTメンバーとの別れが来たとき、どうしようもない寂しさとのRTメンバーで良かったという達成感にも似た爽快感を強く感じた。多くの対立や気持ちのズレ、悩みや苦しみを共有し、笑ったことよりも仏頂面をしたことの方が多かったかもしれないが、それでも、終わってみれば全ていい思い出。本当にこのRTリーダーに恵まれて、メンバーに出会えて、嬉しい。ありがとうございます。RT内で対立が起きたとき、RTリーダーは真っ先にどうしたら事態を改善出来るのだろうと忙しい中、必死でRTを盛り上げてくれた。そしてメンバー全員もどうにか良くしたい、歩み寄りしたい、と藁にもすがる思いでRTタイムに臨んだ。今思えば、あの皆で必死になった時期が一番輝いていたと思う。

私の反省点は、自分のあまりの出来なさが悔しくて、結構泣いてしまったことである。本当なら泣いている暇など無かった。猛禽類のように食らいついて食欲に向上していく努力をしなければいけなかった。また、自分の顔にまで気がまわらず、他の人の士気を下げるような顔をしていたときが時々あった。本当に申し訳ないと思っている。JASCで得た反省点を今後の人生に生かしたい。

知識も浅く、あまり議論に貢献できなかったけれど、この分科会で「知りたいと努力することが大事」ということを学ばせてもらった。きらきらと輝く人達が

集まった分科会、私にとって皆は、尊敬し眩しい存在であった。こんな幸運に恵まれて、言葉では伝えきれないくらい感謝している。

最後に、日本の農業を活性化するためには食料自給率を上げる必要があるという結論に至った分科会として、一言伝えたいです。ごはんを一食につきもう一口食べると日本の食料自給率が1%向上するらしいですよ！皆さん、是非ごはんをもう一口食べて下さい！（上江洲仁美）

JASCに応募した当初、当分科会は希望外であった。決まった時は食や農業について何も知らないことに不安を感じ、RTリーダーが勧めてくれた本をとりあえず読んでみた。読んでいくうちに農業が直面する問題の重大さや、身近なはずなのに以外と知られてない事実を知り、興味が増していった。するとおもしろいことに新聞やテレビの農業関連のニュースに敏感になっていたり、自ら本を求めたりして、自分でも驚くほど積極的に行動していた。

RTとして農業が直面している問題に対して何か斬新な提案をしたわけではないが、改めて農業の重要性を確かめられただけでも一歩前進なのではないかと思う。ファイナルフォーラムでも発表したのが、やはり農業の問題について何か行動を起こすにはまず初めに農業について考えなければならない。学生が集まって農

業について真剣に議論する意味はそこにあると思う。各々この体験を活かし、友達に伝えたりして草の根から農業を変えることができるのではないだろうか。

活動中、政府関係者、民間企業や現場の農家から多様な意見をいただくことができ、関わってくださった全員の方に深く感謝します。分科会として成し遂げられたことは小さいかもしれないが、私の人生においてこれは非常に大きな出来事であった。今でなくともこの経験が活かされ、感謝の気持ちを社会に還元できるように努力したい。（木村優吾）

「グローバル化と食の安全保障」という分科会に決まった当初は、いったい何について、どのように議論していくのか見当がつかなかった。春合宿で分科会名から連想されるものをブレインストーミングしてみると次々に考えは出てきたが、その考え、更には各々の議論したいトピックはてんでばらばらであった。そのような中、唯一気付いたことは、私達は無意識のうちに日本農業の視点に立って、グローバル社会における食・農業の問題を捉えているということであった。この視点はアメデリが議論に合流することで、変化していかざるをえないだろうと思っていたが、意外にもアメデリが日本農業に興味を抱いていたことにより、本会議中の議論もグローバル社会における日本農業という枠内で進んだ。人口増加によ

る食糧不足や水問題等、よりグローバルな食・農業の問題が存在する中で、国内に特化した問題について議論することに関し懸念がなかった訳ではないが、もはやグローバル化の時代であるからこそ日本農業の問題・解決策といつつも、それらは他国にもあてはまるものであり、日本農業について議論することは世界を見ることにもつながるという結論を得た。最後に、短い期間ではあったが、怒り、諦め、焦り、喜び、笑い、達成感等々多くの感情を共有した分科会の仲間に感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとう。そしてこれからもよろしく！（中澤彩）

■分科会総括

「食」という身近でありながらも距離を感じる特殊なトピックを扱うこととして発足したこの分科会。紆余曲折を経て、最終的に TPP への日本参加という機会によって農業を今考える必要性を語り、日本の農業再生のための方法論について追及した。

「日本の農業をいかにして再生すべきか」という、分科会として提示した大きな問い。事前活動での議論とは少し異なる切り口から始まった本会議ではあったが、当初から日米双方のメンバーの興味が日本の農業に合致していたことだけでなく、ひたすらに現場に触れることを求め知識の吸収に注力した事前活動と、会議中の議論によって、農業という生業そ

第4章 分科会活動

のものに少しずつ惹かれていったメンバーの姿勢と彼らの願いを、この問い自体が表している様にも思う。

どこの壁を叩いても既存の議論をなぞらえているような感覚にストレスを覚えた時期もあったかもしれない。だが自らが農業に直接触れ、心を強く動かされ、考え、議論するプロセスを通してこそ、実際に動いているプロジェクトに潜む多くの議論や人の想いを少しずつ理解し、本当の意味で正面から問いについて考え、動き始めるという大きなきっかけを掴んだように思う。

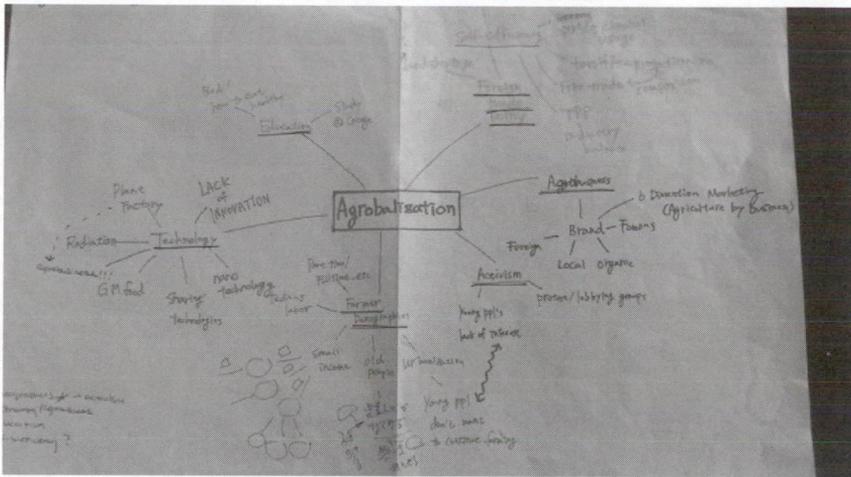
そして、生産者や消費者という立場に立った具体策の提示を経て到達した、「直接触れて、学んで考えることから始めよう」という一つの大きな社会へのメッセージ。このメッセージこそが、清々しいまでの疲労感を共に経験した分科会そのものを体現しているかのように感じられ、最終発表を終え壇上を降りたメンバーの顔を見たときは、胸が一杯になった。

限られた時間の中で、分科会として何を徳たいか。一つのチームとして動くがゆえに個人個人の希望を充たすことは難しく、本会議中は辛い対立と妥協を繰り返した。しかし、一人一人の、分科会での役割を必死で模索し続けそれを果たそうとする真摯な姿勢が国籍を越えて互いを強く励まし合っていたことをここに記しておきたい。RT リーダーという立場にいた私自身、正直、自分の知識・力不

足を痛感し落ち込む毎日だったが、メンバーのその諦めない姿勢にいつも気持ちを奮い立たせられていた。そして、みんなの姿勢とその議論の傍にいられたことによって、何事も現場を理解し実行力の一助となるためには、まずは今、一生懸命勉強しなければならないということが自分の中で改めて現実味を帯びた強い実感となっている。

苦しさや失望、多くの感情を抱いた日々。それでも、最終日にアメリカ側がバスに乗り込む別れの際、みんなで何かを必死で引き止めるように集まり写真を撮った瞬間。何かと不器用な分科会だったけれど、あの瞬間が、ひと夏では終わらないこれからの分科会の絆を約束してくれているような気さえる。

最後に、この分科会を温かいご厚意で応援して下さい本当に多くの方々から心からの感謝を伝えたい。皆様のお力添えがあって初めて、現場に触れ声を聞かせて頂くという貴重な機会を沢山積み上げることが出来、そこから分科会として「食」に留まらない非常に多くのことを学べたと感じている。そして、RT に入ってくれて一緒に時間を過ごしてくれたメンバー全員と、一番喧嘩して一緒に泣いたRT パートナーの So に、心からの尊敬と力いっぱい感謝の念を送り、分科会総括とさせて頂きたい。(横田真彩)



RTメンバーの興味を表すツリー

市民と政府の役割と責任

Social Responsibility of Governments and Citizens

■分科会メンバー

- 野口ゆかり*
 - 大沼雄貴
 - 川口真
 - 古村大和
 - 野口真央
 - Santiago Cruz*
 - Alice Liao
 - John McCallum
 - Norihito Naka
 - Ayaka Yoshida
- (*は分科会リーダー)



■分科会概要

リーマンショックや欧州債務危機により世界経済は停滞し、各国の財政収支は悪化し、政府債務が累積している。ギリシャやスペインなどのユーロ加盟国や日米両国において財政再建が急務となる中、政府はどのように増収を図り、歳出を抑制しながら適正なサービスを市民に提供すべきなのか。また、どのように官民で役割分担をし、効率的にサービスを展開すべきか。これに対して、市民はいかに受益と負担のバランスを図りながら、税金や社会保険料を負担し、年金、医療などの社会保障や公共サービスを享受すべきなのか。いずれにせよ、巨額の公的債務が累積する中、受益が負担を上回る状

況を放置したままでは社会保障制度の崩壊も免れまい。これを回避するため、市民はさらなる負担増と給付水準の低下を受け入れられるのか。そして、政府はこのような痛みを伴う財政再建策を断行できるのか。当分科会では、財政再建と経済成長を両立させるために市民と政府はどのような役割と責任を担うべきなのか考察する。

■事前活動

春合宿

我々の市民と政府の役割と責任分科会ではまず、この非常に大きく様々な領域に関係するテーマについて各々がどのような意見や考えを持っているかを話し合った。その中でも政府、国民の概念自体を議論したことが、今後の分科会の方針を決める大きな原動力になった。最初の民主主義国家アメリカと民主主義をアメリカによってインストールされた日本の政府の差異、両国の国民の政治参加の進度の差、政府のスケールや特徴に注目することが必要だと結論付けた。また安全保障、教育、財政などの様々な分野のケーススタディーを春合宿後の定期勉強会、フィールドトリップによって市民と政府の役割と責任の理解と分析を進めていくことを事前学習の目標とした。この分科会最大のアドバンテージである複合領域を国民と国家の役割の視点から分析することは、他の分科会との意見交換、学習協力で高めていくことができれば良いと考えている。

(大沼雄貴)

春合宿では、幅広い分野を扱うこの分科会でどのような議論を展開させていくべきなのかを話し合った。市民と政府の役割と責任を考えるにおいて複合的な幅広い視点を養う必要性をメンバーで合意し、様々なケーススタディーとそれに合ったフィールドトリップを計画し始め

た。私自身はつい自分の興味のある分野に偏りがちだったため、今まで意識的に勉強しなかった分野の知識の必要性を実感した。また、自分の興味範囲でさえ意見が固まっていなかったり、知識が欠如しているが故に抽象的な説明しかできず発言を躊躇してしまったりするなどと自分の未熟さを痛感することが多かった。このような反省を活かして、勉強会やフィールドトリップを積極的に行い、本会議に向けた努力をしていきたいと思う。

(野口真央)



ディスカッションの様子



春合宿解散前に分科会メンバーで

定例ミーティング

私達の分科会では、二週間を一つのサイクルとして、担当の分科会メンバーが決めたテーマに即して課題及び議題を決めた。一週目は、担当者が出した課題に対するレスポンスを個人個人で完成させ、分科会の全員がそれを閲覧できるようにした。二週目では、全員が提出した課題を事前に各自が読み、全員の意見を把握した上で定例ミーティングを行った。

市民と政府の役割と責任はテーマが広く、方向性を定めるのに最初から苦労をしたが、幸いにもメンバーそれぞれの興味範囲が異なっていたため、限られた時間の中でも様々の分野の議題を取り上げることができ、多面的に問題を考えるきっかけとなった。

実際には、民主主義、憲法、貧困、そして安全保障という市民と政府の役割と責任を考えるにおいて極めて重要な4つのトピックを中心に定例ミーティングを行うことができた。また、早い段階から予定合わせを行っていたため、沖縄の自主研修やフィールドトリップの内容を定例ミーティングの内容を合わせるなど、計画的に進めることができた。(野口真央)

防衛大学校学生との議論

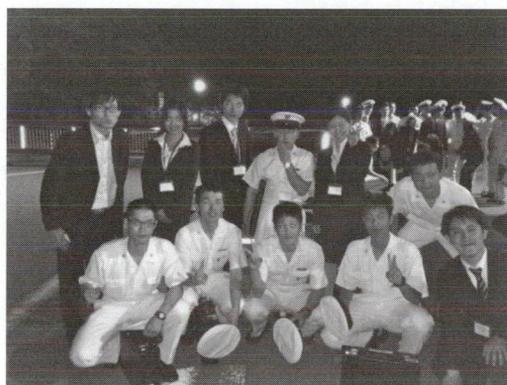
防衛大学校の生徒との議論を通じて感じたのは、最前線の熱意である。日本における国防の矛盾は解決しなければならない喫緊の課題である。そのことに対す

る問題意識が、一般の国民とは大きく異なっていた。危機管理意識が次世代の自衛官に養われており、日本国民として少し安心した。また、人間味の溢れる防衛大学校の生徒は親近感を覚えやすく、好印象であった。

「君達が日陰者である時の方が、国民や日本は幸せなのだ」昭和32年、当時首相の吉田茂が防衛大学校卒業生に送った言葉である。この言葉を噛み締め、肝に銘じている彼らは強い。「どうか、耐えてもらいたい」と吉田茂は続けた。防衛大学校の生徒は耐え、いざ有事の際に国民を守るための心構えを得ている。将来国の安全を委ねる人材との議論によって、日本という国家に希望が持てた。日本には頼もしい人材が育っている。それを実感できたことが何より、この話し合いの機会で有意義であった。(古村大和)

防衛大生とのディスカッションは主に双方のプレゼンを発表することから始まった。ディスカッションでは教育や表現の自由について話し、自由に思うことを述べる形式で進んだ。「将来の自衛官」というイメージが先行していたが話していくうちに「同世代の大学生」であることが実感され、比較的和やかにディスカッションできた。ディスカッションのなかで印象に残っているのは自衛官が一般教育や思想を持つこの重要性についてで、防衛大生は自分たちも将来上からのいわ

れたことをそのまま受け入れるのではなく自分できちんと考えまた海外の駐在武官とも対等につきあえるようにきちんと教育を受けることも必要だといっていた。このような人たちが将来国防を担ってくれると思うと頼もしく思うと共に自分は文民として違う形ではあるがしっかり社会に貢献していきたいとの思いを強くした。(川口真)



防衛大学校の学生と分科会のメンバー

「僕らの一歩が日本を変える。」代表

青木大和氏 フィールドトリップ

日時：7月4日（木）

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

「僕らの一歩が日本を変える。」という団体は以前から耳にしていた。しかし、それを運営している人物の名前がまさか自分と一致するとは思わなかった。青木大和さんは慶應義塾大学法学部政治学科の一年生である。しかし、一年間米国に留学していたため、年齢までも私と変わらなかった。そんな彼の活動や思考につ

いて尋ね、私の心は希望に満ち溢れた。彼は十代の政治的関心の向上を目指し、今後は特に教育の分野を中心に活動を続けるそうだ。私自身も公教育を通じて家庭の教育を見直すことを企てている。同世代の同志の存在には、強く鼓舞された。悲観的になりがちな昨今、若い世代の中に危機感が生まれている。兎に角行動してみる若者が増えていることは大変喜ばしいことだ。「日本はもっと素晴らしい国になれる」そう信じ、自ら行動を起こした次世代の数だけ、日本の未来はよくなるはずだ。この機会は、今後の日本を変えたい自分にとって、非常に貴重な出会いであった。(古村大和)

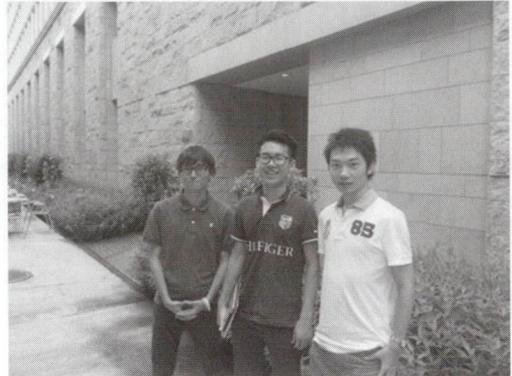
僕たち、市民と政府の役割と責任分科会はこの人物にお話を伺った。目的は単純明快であった。「市民」の役割と責任を探ること。青木君の問題意識は若者の政治に対する問題意識の欠如にある。この問題に対して、青木君は高校生と国会議員を集めて議論し合う機会などをもうけるなど若者の政治関心をあげるため精力的に活動している。

印象的だったのは彼の理想を追求する姿だ。もちろん社会は思うように理想だけでは動かないかもしれない。しかし、自分のビジョンを自信をもって他人に伝えようとする彼の姿は説得的で情熱的にも思えた。これが「伝える」ことなのだと感心した。この「伝える」地道な作業

が社会を少しずつ変えていくのかもしれない。実際、彼のすごいところは様々な人と対話して何らかの成果を出していることである。それが「高校生100人×国会議員」という企画として具体的な形にできている。もちろん彼はまだ僕たちと同世代で社会経験を十分には踏んでない。

「若さ」というのはそれ自体強みでもあり、弱みでもある。どうやって大人が多くを占めているこの社会で多くの人を巻き込んでいけるのがこれからの課題なのかもしれない。彼はこの限界を認識した上で運動しているように思えた。頑張っしてほしいと思うとともに、まだビジョンも確立しておらず行動もおこせていない自分を悔しいと思い、いい意味で刺激的だった。

同世代の市民運動家から話を聞いたのは貴重だったと思う。内容も青木君が体験した政治家や高校生の実情などリアルティあふれる興味深い話もたくさん聞いた。青木君がモットーとしているのは「自分の周り半径5mから変えていく」こと。地道な運動が次第に伝播し、最終的にもっとよりよい社会を達成する。僕たちはここに「市民」の一つの姿をみた。協力してくださった青木君に感謝するとともに、ここで聞いた素材を積極的に議論に持ち込んでアメリカ人と豊かな議論にしていきたい。(川口真)



青木大和氏とフィールドトリップ参加者

社会活動家 湯浅誠氏 フィールドトリップ

日時：7月11日(木)

場所：東京都渋谷区のカフェ

湯浅誠さんは予想以上に若かった。今日までに培われた実績を事前に拝見し、勝手に年長者を想像していたのかもしれない。彼は市民と政府、両方の視点を持ち得る人物としてお話を伺った。実際、市民団体として活動を続け、民主党政権下では国政に携わり、バランス感覚の優れた方であった。市民団体は志を共有した人間同士で、理想の追求に奔走する。政府は全体の利益を理解し、包括的な政策決定が求められる。「この指止まれ形式」と「反対派の税金を使う」という差を湯浅さんは挙げていた。このことは、当分科会を理解する上で大変重要な違いであろう。彼は貧困という問題を解決するためには、関心が大切だと言った。それは高まっているのかと尋ねると、日米学生会議が訪ねてくるのが何よりの証拠だ

と断言した。二十年という長い年月をかけて、少しずつ確実に関心を高め続けた結果が今である。それだけ社会を変えるためには、時間がかかるのかもしれない。

(古村大和)



湯浅誠氏とフィールドトリップ参加者

直前合宿

直前合宿は日本側参加者が本会議に向けて準備することができる最後の期間ということで、どの分科会も非常に熱の入った2日間だったように思う。特に私達、市民と政府の役割と責任分科会ではテーマが非常に抽象的で、定義することが難しいこともあって、アメリカ側学生とどのように議論を進めていくか、準備期間の3ヶ月間に学んだ事、議論した内容について最終確認することに注力した。そして、直前合宿の最後に行った英語でのプレゼンテーションでは、準備期間にフィールドトリップで訪れた地方自治体、お会いした社会活動家の方々から学んだことを踏まえて、日本側参加者が考える理想的な政府、市民とは何か?といった

問いに答える形式で発表をした。合宿最後のプレゼンテーションを通じて、日本側学生で政府と市民の責任と役割を結論づけることができたのは、準備期間として非常に有意義な時間が過ごせた結果だったように思う。

(大沼雄貴)

■本会議中の活動

第一サイト：京都

長旅を終え、米国側の参加者が京都に到着した。凄まじい期待と緊張を胸に、日米の分科会メンバーが初めて顔を合わせた。市民と政府の役割と責任分科会はその汎用性が故に、議論が多岐に渡る。そのため、議題を明確に具体化し、話し合いをすすめることで合意した。しかし、上手に進まなかった。メンバー各々の興味分野が異なり、自然と論議は多種多様な題目へと飛び火した。その自由気ままな性格には、楽しいという感覚と同時に目標を見失う恐怖を覚えた。散らかる話し合いを如何に整理整頓するか、暗中模索する日々が続いた。そして徐々に、ゆっくりではあるが確実に、試行錯誤の末に議論する方法を見出していった。その藻掻く過程こそ、日米学生会議の掲げる「相互理解」なのかもしれない。相手の主張に耳を傾け、自己の発信も怠らない。互いに真摯にぶつかり合うことで、初めて双方向の理解が可能となる。第一サイト京都ではそれを、自らの身を持って体験した。

(古村大和)

第二サイト：長崎

長崎サイトでは我々の分科会テーマである「市民と政府の責任とは何か？」という本質的なテーマについて議論し始めたことが大きな成果だったように思う。もちろんこの大きな問いに対して、このサイトで結論を出すことはできなかったが、各個人が持つ政府の責任や市民の役割を議論し、共有できたのはファイナルフォーラムに向けて大きな進歩になったと感じている。

そして長崎原爆資料館にアメリカ側学生と共に訪れ、原爆投下の正当性や政府が市民に対して負う安全保障とは何かについて議論できたことも分科会にとって有意義な経験になった。非常に印象的だったのが、日米両学生で原爆投下をしたアメリカ政府の判断を論理的、合理的に考えるだけでなく、実際に被爆した方の体験談を聞き、感情的な観点からも議論できたことだ。日米の学生が大きくデリケートな問題に向き合って、率直な意見交換ができたのは分科会、そして会議全体の理念である相互理解につながる大きな一歩だったように思う。(大沼雄貴)



ディスカッション後の休憩の様子



ディスカッションの様子

第三サイト：岩手

第三サイトの岩手では、これまで議論してきたことをまとめながらファイナルフォーラムの発表内容を決定していく段階だったため、分科会としては一番悩みを抱えたサイトだった。発表内容、そして発表方法でさえ全員納得することができず、議論が迷走しているように感じられる時もあった。個人個人で分科会に求めていることが異なっていたため、異なるアイディアに妥協して納得することはみんなにとって難しかったのである。新しいアイディアが出されては却下、出されては却下の繰り返しだった。しかし、議論の難しさを痛感しながらも、誰一人諦めることなく夜も自由時間の間に集まって議論をした。このサイトでは個人単位でも打ち解けて仲良くなっていたこともあり、行き詰まった時は互いに励まし、話を聞き合うなどして、困難を乗り越えようとする姿勢がみんなの間で見られた。八方塞がりのように思えた時期もあったが、諦めずに団結しようとした結果、第四サイトに向けた分科会としての核を定

めることが出来たように思う。(野口真央)

第四サイト：東京

最後の開催地である東京ではファイナルフォーラムへの準備が主となった。他のサイトと比べてファイナルフォーラムの成功という明確な目標のもとにまとまった議論をしたと思う。社会に何らかの影響を与えたいという意見で一致していた私たちは、市民と政府の役割と責任分科会として自分たちがそれぞれの責任を果たすことが重要であり社会を少しでも良くするため自分たちと同じ若い世代の行動を惹起することが必要だと最終的に結論づけた。そのためにプレゼンテーションのためのスライド作りに勤しむとともに、前のサイトで作ることが決まっていたウェブサイト作りを本格的に行った。ファイナルフォーラムでは自分たちの議論の一部を紹介し、事前準備で伺った方の具体例を交えながら行動を起こすことの重要性を説いた。広大なテーマを扱ったこの分科会がメンバーそれぞれの価値観の違いを乗り越えてある程度まとまった形のプレゼンを提供できたことにほっとしている。 (川口真)



プレゼンテーション準備の様子



ファイナルフォーラムの発表の様子

■分科会総括

「市民や政府は一体どうあるべきなのか？」現代社会は、リーマンショック以来景気が低迷し、各国の財政状況が芳しくない。政府は何にお金を使い、何を市民に任せたいのか、また市民は自分たちで何ができ、何を政府に求めていくのか。経済格差・教育格差・医療格差・世代間格差など様々な問題が世界各国で勃発している今であるからこそ、政府も市民もこの問いの答えを今一度再考する必要がある。「今世界中で起きている様々な“旬なトピック”についてアツく語れる分科会を作りたい」という思いの下、昨年の夏にアメリカ側実行委員の **Santiago Cruz** と「市民と政府の役割と責任分科会」を立ち上げた。

長い選考過程を経て決定した分科会のメンバーにいよいよ会える春合宿の前日は、不安で仕方がなかった。実際に分科会のメンバーたちは市民と政府の役割と責任という幅の広いテーマに対してどこから手を付けたらいいのか少し戸惑っているように見えた。だが、苦戦しながら

第4章 分科会活動

も分科会のメンバー1人1人が議論を前に進めようと真剣だった。

春合宿後の事前活動は、多くのフィールドトリップを企画し、定期勉強会で議論を積み重ねることでテーマに対する理解を深めていった。また、好奇心旺盛なメンバーたちは積極的に他の分科会のフィールドトリップにも参加したり、本を読んだりして得た知識をどんどん分科会の議論に還元していき、チームとして良いスタートを切ることができた。しかし、本会議が始まり、アメリカ側と顔を合わせると、順風満帆のように見えた分科会は言語の違いやモチベーションの違いなどと多くの問題に直面した。問題は一筋縄で解決できるものではなく、本会議後半まで存在し続けたが、分科会のメンバー1人1人と話し合う機会を設けたことやメンバー個人の努力によって、最終的には分科会全体としてのチームを作れた。ファイナルフォーラムの発表を堂々となしていた分科会メンバーたちを客席から見たときは私も思わず満面の笑みになってしまった。春合宿から始まった長い道のりを粘り強く、そして情熱を持ちながら参加してくれた分科会メンバーにここで感謝の意を表したいと思う。

この分科会活動を通じ何かを感じ、得ることができたのであれば分科会コーディネーターとしてそれ以上の幸せはない。しかし、これはあくまで通過点である。分科会で学んだことを今後の人生の成長

に活かし、最終的には社会に対して何かしらの還元ができるようにして欲しい。

末筆になりましたが、分科会活動の充実のためにフィールドトリップにご協力頂いた湯浅誠様、青木大和様、そして当分科会の活動にご指導いただきました皆様に心からの感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。本当にありがとうございました。（野口ゆかり）



分科会メンバー全員での一枚

現代における日米両国の教育問題

Modern Issues in Education

■分科会メンバー

川野さりあ*
伊藤孝真
大西由起
小松崎遥平
浜田りん
Cruz Arroyo*
Dylan Adelman
Jee Eun Choi
Miho Sakuma
James Kashima
(*は分科会リーダー)



■分科会概要

教育とは単に知識の伝承だけでなく、人格の形成、個人の価値観の涵養に大きな影響を与える。学校、家庭、コミュニティ、職場など教育を受ける場は教育機関に限らず、社会全体にある。こうした様々な環境の中で人は自立し、成長すると同時に、教育の差が時には衝突を生むこともある。尖閣、竹島の領有権問題では、国家の歴史教育の差異が両国の関係に緊張をもたらす。同様に日米間でも原爆投下をめぐる、その評価や解釈の違いが論争を巻き起こす。このように教育は個人の世界観を築き、また世論形成に反映する。

当分科会では、所得格差の世襲と教育格差、いじめ、教育現場の荒廃、教育委員会の役割など、日米両国が抱える現在の教育問題を取り上げる。そして学校現場のみならず、生涯にわたって社会のあらゆる場で展開される多岐にわたる教育機能が、次代を担う人材育成と両国の発展にどのように貢献すべきかを考察する。

■事前活動

春合宿

春合宿では教育 RT のメンバーと、初対面とは思えない程、活発に意見交換することができた。真剣に自分の意見を受け止めてくれ、時には的確に反論してくれる仲間が、JASC にはいる。今まで自分の中で考え、完結してきたものが全てではないことに気付かされた。大学では、講義を受け、一人で調べ考え、レポートを完成させて終了することが多い。私は、そのような中で、完成したレポートに書いた自分の答えが全てなのだ、と錯覚していたと思う。たった3日間の春合宿であったが、本会議への期待がより一層高まった、内容の濃い合宿であった。そして、これからの活動や本会議では、社会格差・歴史認識・意思決定に関する問題を教育でいかに解決するかについて深く議論しようという目標が定まった。

(浜田りん)

定例ミーティング

本会議前の事前活動として、2週間に1回のペースで分科会内の Skype ミーティングを行った。Skype ミーティングでは、その回の担当者が決めたテーマに沿ったディスカッションを行った。1つ目は、TOEFL の大学入試導入案と英語教育についてだ。実践する機会の不足、英語の勉強が目標>手段になっている現状、海外の外国語学習事情など、様々な

視点からの意見が出された。2つ目は、学校が果たすべき役割についてだ。皆に一定の学力をつけさせるだけでなく、集団の中での自分を理解させる、といった大きな役割があることで一致した。さらに、教育格差の是正には社会格差の是正が欠かせない、格差は無くせないが、勝者が敗者に還元する仕組みを作ることが必要、学力測定の難しさ、家庭教育の役割といった話にも派生した。話のタネが尽きないテーマであった。3つ目は、教育に競争は必要か否か、ディベート形式で話し合った。順位がモチベーションに繋がるか、得意分野が伸ばせるのか、競争化は勉強本来の目的を見失わせないか等、意見が飛び交った。ディベートにより、自らの主張の弱点に気づいたり、反論を重ねながらより論理的な主張を組み立てたりすることが出来た。4つ目は、21世紀型能力の開発についてだ。自ら問題を発見し解決する力をどう育てるか、スポーツの有用性、評価の難しさなどを話し合った。それぞれが興味ある分野を選び、メンバー全員が取り組んだことで、今まであまり触れることのなかったトピックについても、学び深めることが出来た。

(浜田りん)

学校法人渋谷教育学園理事長

田村哲夫氏訪問

日時：6月8日（土）

場所：渋谷教育学園渋谷高等学校

第4章 分科会活動

「君達は自由になるために勉強をするのだ。」渋谷教育学園の理事長であり、渋谷、幕張中学高校の校長でもある田村哲夫氏が、校長講演にて述べた言葉だ。この言葉ほど、私達が勉強する意味を本質的に捉えた言葉はないと思う。そんな田村氏を訪問した今回のFTでは主に、「グローバル化と教育」についてのお話しが聞けた。その中でも田村氏が特に強調し、述べていたのは、今私達は劇的な変化を迎える状況に直面しているということだ。教育は文化、歴史的背景、その国の風土など、様々な要因によって形作られ、その目的も異なるが、今の激進的グローバル化を受けて、日本の教育制度も変化の時を迎えている。「私達が生徒を教え育てることができるとは思っていない。しかし経験から、これからの時代はこうなっていくのではないか、という予測を伝えることはできる。そこでどう生きるか、悩み、判断するのは生徒自身だ。」田村氏は会をこう締めくくった。

(伊藤孝真)



渋谷教育学園渋谷高校にて

田村哲夫氏（前列中央）、田村聡明氏（前列左）、

高際伊都子氏（前列右）と

文部科学省 長谷川智氏 訪問

日時：7月24日（水）

場所：文部科学省

教育を考える上で、行政というアクターはとても大きな存在感を持っている。その行政が日本の教育をどのように導こうとしているのかということに、私たちは興味を持ち、文部科学省大臣官房総務課法令審議室の長谷川氏を訪ねた。まず私にとってある意味盲点であったのは、子どもの教育に第一義的な責任を負うのは家庭だという見解だった。教育問題といった時に、頭に浮かびやすいのは学校や教師であったからである。しかし、家庭というはある意味最もプライベートな空間であるから、そこでの教育に行政が介入することは難しい。それでも教育の質は、何らかの形で維持・向上しなければならず、そのためにどのようなことがありうるかということを議論した。また、リーダーシップ・グローバル人材というものが何であるのか、民間と行政の教育における役割分担はどのようなものか、など、日米の教育問題を考える上で外すことのできないトピックにも触れ、とても有意義な議論になった。

(小松崎遥平)



文部科学省にて長谷川智氏と

防衛大学校研修

防衛大学校における教育分科会の議論は、自分達だけでは到底思いつくことができない視点を得られた場であった。防衛大学校と普通の大学の教育は全く異なる。防衛大生は公務員として給料をもらいながら学校に通い、私達は学生として授業料を払いながら学校に通う。そして教育も防衛大生の場合は、集団生活、厳しい訓練や上下関係を経て行われる。そんなまったく違った環境で、全く異なる教育を受けてきた防衛大生の視点は私達にとってとても新鮮であった。例えば、私達は教育の定義について、「個人の人格形成に係る全ての行為、教育しようとする意志の下に行われる行為」といった視点から議論するのに対し、防衛大生は「私達はただ感情を爆発させるだけの指導は教育とは呼びません。教育を行うには、相手のことを思いやる気持ち、愛情が必要です」と述べた。私達だけでは到底知りえない視点から実りある議論ができた。

(伊藤孝真)

直前合宿

直前合宿では、これまでの日本側の活動をまとめ、発表を行った。私たち日本側の教育 RT は、参加必須の研修以外でメンバー全員がミーティングに集まる機会がなく、直前合宿が防衛大研修以来の全員集合の場であった。初日は翌日の発表に向け、この3ヶ月間準備してきたことについてまとめ、議論も行った。全員集まれなかったからこそ、今までの情報を共有する良い機会となった。発表後の RT 活動としては、アメリカ側と合流する前に、本会議でのそれぞれの目標や思いを話し合った。興味深かったのが、女子は結果よりもプロセスの充実に重きを置いているのに対して、男子は何か形を残したいという思いがあったことである。それでも、全員に共通したことは「会議を楽しもう！」であった。本会議前に、有意義な時間を RT として過ごせたと感じている。

(大西由起)



防衛大学校にて

■本会議中の活動

第1サイト：京都

日米両国側の教育分科会初の顔合わせが行われた京都サイト。初めのぎこちない自己紹介から、今後の議論の進め方、ファイナルフォーラムではどのような発表がしたいか、というのが第一サイト「京都」での分科会活動での主な議題であった。特にこのサイトで決まったのは、ある議題に対して賛成反対にわかれディベートをするということ。そして現代の教育問題を解決する上で、その解決方法となる教育はどんなものなのか、それを考える手段として「私達の考える理想の学校（塾）構想」を進め、ファイナルフォーラムで発表する、ということであった。

(伊藤孝真)



京都サイトバス停にて

第2サイト：長崎

第二サイトである長崎では、教育分科会としての議論が、今後の進め方といった表面的な議論から、「理想の学校構想」の具体的な内容へとシフトした。まず、

理想の学校を考える上で話し合うべきトピックは何か、といった議論が行われ、その例として教える科目、方法、時間、生徒数等が話し合われた。この第二サイトから、緊張していた各々の雰囲気も和らぎ、議論がさらに活発になった。誰もが言いたいことを発言できているこの環境を大切にしたいと感じたのを覚えている。

(伊藤孝真)

第3サイト：岩手

岩手サイトでの議論の中心は、学校の理念は何か、私たちの学校でどんな教科を教えるか、成績評価はどのようなべきかの3点であった。一点目について、ペーパーテスト偏重の教育からの脱却、貧富や人種などの、子にとっての先天的格差からの解放、国際的視座の涵養がメンバーの問題意識の反映としてあげられた。二点目について、学校ではあまり教わらない、差別、環境、最新の世界情勢といったものがあげられ、特に差別というトピックについてはどのように教育すべきかを、差別とマイノリティーの分科会と合同で議論した。三点目について、評価によって国家が優秀な人材をみつけやすくなるという利点から段階的な成績評価を支持する意見と、それは従来の学校で担保されているから、無為な優越的意識を生む成績評価はすべきでないとする意見とに分かれた。

(小松崎遥平)

第4サイト：東京

東京に到着して最初の RT で、リフレクションを行った。理想の学校を作るといふこれまでの議論に加えて、「現代における日米両国の教育問題」に含まれる別のポイントも議論すべきだという意見が全員に共有された。そこで、理想の学校に関するファイナルフォーラムでの発表の準備と並行して、他に、家庭教育、および、学校教育との関係について議論した。家庭教育が子の教育に対して第一義的な義務を負っているという前提のもと、家庭教育の特殊性は何かという論点につき、就学よりもはやく始まる教育であること、異なる世代と接触できる場であること、家庭で教わる道徳は国家が運営する学校が干渉できない領域であることが挙げられた。

(小松崎遥平)

ファイナルフォーラム

私たちの RT では、それぞれが教育に対する問題意識を持ち、それに対しての考えがあった。日米合流後、最初に行われた RT ペーパーのプレゼンテーション内容ごとに、そのトピックについて白熱した議論がなされた。これを踏まえて、私たちはそれぞれの問題を解決するような要素を入れた「理想的な学校」を考え、ファイナルフォーラムで発表することにした。

この「理想的な学校」は、小学校5・6年生を対象とし、土曜日の午後に授業

を行う学校とする。そして、教育における3つの 이슈を取り上げ、それぞれの解決策の頭文字と取り、“T.A.G. School”と名付けた(次頁図参照)。その3つの問題とは、

1. テストのための教育
2. 学力差／教育格差
3. 学校では教えられていない話題である。

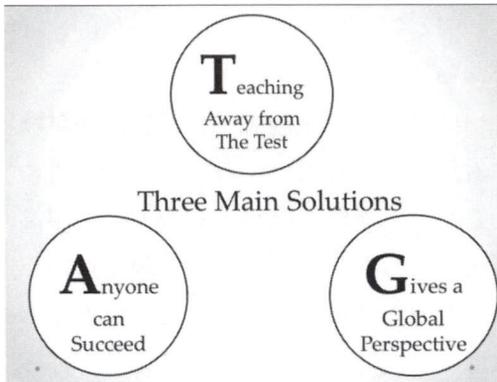
一つ目は、日米両国の授業展開が試験の対策に向けたものになりがちであることである。試験で高得点を取ることが高評価につながる。しかし、試験で良い点数を取るために勉強をすることは本来の教育の目的に反していると考えた。従って、T.A.G. School ではテストによる成績はつけず、レポートやクラスでの出来によってコメントによる評価をすることにした。

二つ目では、学力差は家庭の経済格差などにあると考えた。本校では、誰でも入学でき、学費も取らないことにした。ただし、学校を運営するために、寄付をお願いすることになっている。

最後は、学校教育では、国語や数学などの基礎学力が主となっている。しかし、グローバルな人材を育てるためには、広い視野を持たなければならない。私たちの学校では、例えば、宗教や環境、パブリックスピーキングなど、従来の学校にはない独自の科目を考案し、教えること

とする。

以上が T.A.G. School の概要である。私たちは、好奇心旺盛で、モチベーションが高く、オープンマインドな生徒を育てたい。そして、この学校が日米両国の抱える教育問題の解決へのヒントとなればと期待する。 (大西由起)



■分科会感想

教育分科会が第一希望の分科会でなかったことから、JASC 参加当初、私は不安を抱いていた。自分に何ができるのか、自分は自分の貢献の形を見つけられるのかと。しかし、その不安は分科会活動が始まってすぐに、なくなってしまった。経済学を専攻する私以外にも、法律、スポーツ、宗教学等、むしろ教育を専門としている人の方が少なく、そのバックグラウンドの違いが逆に意見、視点の違いとなって現れる、グループ全体としては良い結果が生まれていたように感じる。また、日ごとに深まっていく日本側参加者とアメリカ側参加者の関係は、必然的

に私達が行っていた議論の深さに比例していたような気がする。議論を進めようと必死になることももちろん大事だが、それ以上に相互に信頼関係を築き、何でも言い合える環境を作ることも大切なのだと改めて気づかされた。今この5月から8月までの経験を振り返った時に思い返されることが、日米学校教育に関する知識でも教育と社会の関わりでもなく、メンバー全員の真剣に議論している表情であることが、私自身とても嬉しい。

(伊藤孝真)

「教育」とは何か。私たちの分科会はこの疑問に常に向き合いながら、現代の教育問題について議論を進めた。日本側では、歴史認識の違い、社会格差、意思決定の3つのトピックに絞り、本会議に向けて準備を行った。自身の RT ペーパーでは、「日本文化と武道」についてレポートを書いた。こうして本会議までに各自で準備をしたものの、教育問題の範囲は広く、アメリカ側と着眼点や意見が大きく違ってくるのではないかと懸念された。しかし、いざ本会議が始まると、両国とも同じような問題を抱えていることがわかった。一方で、各自の RT ペーパーでは社会格差から宗教、リベラルアーツなど様々なトピックが挙げられた。切り口は違うが、全員に共通している思いは、「教育をさらに良くしたい」というものではないかと感じた。自分たちのレポ

ートをもとに、私たちは「理想的な学校」を考えることにした。議論は意見が対立することもあったが、お互いがそれぞれの意見を尊重し合っていたので、終始良い雰囲気ディスカッションを進められたと思う。反省点としては、この「理想的な学校」に執着しすぎて、本質的な話が十分にできなかったことである。それでも、このRT活動を通じて、教育について多方面から考えさせられた。そしてそれ以上に、最高のRTメンバーに恵まれ、チームとして一つの提案ができた。ただ、本会議が終わりではなく、これからも教育を良くするための活動を続けたい。

(大西由起)

RTの中で強烈に感じたのは、アメリカ人は、自分の主張を論理的・説得的に伝えることに非常に長けているということだった。議論に戦いのような側面があると前提すれば、彼らの姿勢は、練度が高いとさえいえると感じた。彼らは、必ず、“I think ~, because…”、“Right, but~”、“I don’t think so because~”といったように、まず自分の立場を明確にしてから、その理由を提示する。発言にも淀みがない。また、最後に“Does it make sense?”と加えることで、聞き手へ向けて自己への批判の機会を与える。主張をするが、相手の意見もしっかり聞く。これがアメリカの教育か、と思った。いみじくも教育RTで、交渉力、論理的

な正確性、説得的な主張を育てるアメリカの議論ベースの教育の、何か圧倒的な力が、アメリカ側参加者の背後にあるのを感じた。また、具体的な教育問題の内容については、成績評価や競争の是非についての議論が印象的だった。会議前は、私は国家（政府のみならず、経済力を持つ大企業なども含む）が効率的に優秀な人材を集めるためのシステムとして、評価と競争は必要だと感じていた。会議を終えた今でもその効果は部分的に認めているが、AやDといったランキング評価をせずともコメントによるフィードバックで、学生の習熟度を確かめさせることは可能であること、過度な競争は多くの脱落者も生むこと、成績評価はペーパーテスト偏重になりかねず、自分独自の意見を構築する能力を構築するのには向かないことなど、複合的な視点を手に入れることができた。

(小松崎遥平)

私は、教育RTに所属できて心から良かったと思っている。理由は、主に2つある。まず、何よりもメンバーに恵まれたからだ。ディスカッション中は、ジャパデリ・アメデリ問わず皆が積極的に発言していた。新しいアイデアを次々に提案する者、議論の方向性をはっきりさせる者、それぞれにうまく役割を果たして、とても良い雰囲気の中で議論を進めることができた。そんなしっかり者メンバーに囲まれて、私は彼らに頼りすぎ

てしまったように思う。もう少し自分にできることがあったのではないかと少し悔しさも残っている。そして、もう一つの理由は、「教育」という大きなテーマにきちんと向き合えたからだ。教育は、現状維持に妥協しがちな問題であり、変えたからといってすぐに結果が出るものでもない。私自身、今の教育にはいろいろと問題があることを知りながら、なんとなくスルーしがちだった。そんな教育について、時間をかけてみんなで考えることができ、非常に有意義な時間であった。成績、家庭教育、教育格差…。一つのトピックが、また別のトピックを引っ張り出し、話は尽きなかった。さらに、今まで何の疑問も持たなかった、自分が受けてきた教育を見直すきっかけにもなった。教育 RT としての活動は終わったが、引き続き教育に関心を持って学んでいきたい。

(浜田りん)



ファイナルフォーラムにて

■分科会総括

第64回会議に参加した際、様々なバックグラウンドを持つ学生たちによって展開される激しい議論が面白くて仕方がなかった。と、同時にどうしてこれほどに人によって物事に対する考え方が違うのだろうという素朴な疑問が浮かび上がった。その背景にあるのはそれぞれの家庭での教育、宗教や文化、学校教育、メディアなどである。私たちの周りで繰り広げられる様々な形態の教育によって、人の世界観や人格は形成されていく。

教育は誰しものが何らかの形によって必ず受けるという意味では非常に身近な問題であるが、身近過ぎる故にその問題について真剣に向き合うことはあまりないのではないかと。これを期に自分たちが受けてきた教育を振り返り、更にはこの21世紀に求められる教育とは何かを考えるべきではないだろうか。そう思って Cruz とこの分科会を作ろうと決めた。

日本側参加者のみで進めた事前活動では、日本の英語教育、教育現場での競争の必要性などのトピックについて自分たちのこれまでの経験も踏まえて意見交換をした。加えて、フィールドトリップにて渋谷教育学園理事長の田村哲夫氏、文部科学省の長谷川智氏にお話を伺うことにより、それまでの経験談中心になりがちな議論から、同じ

トピックに対してまた違ったアプローチをするきっかけとなった。本会議においては「理想の学校」というテーマの下、今日必要と思われる教育科目や、最も効果的な評価法などについて、日米両国の教育制度の特徴とその長所短所について触れながら議論を進めていった。

春合宿から続いた教育に関する議論を通じて気付いたのは、分科会のメンバーはもちろんのこと、分科会を超えて会議参加者全員が教育に関心を持っているということだ。つまり、それだけ人の生涯において教育の役目はあまりにも大きく、その影響は実に多岐にわたることである。今まさに大学・大学院で教育を受け、いよいよ社

会へ羽ばたこうとしている私たちは教育を受容する側として批判も含め様々な意見を持っている。今だから感じるこの思いを、楽しさの中でもいくつもの壁に直面したこの夏の議論を、いつも頭の片隅におきながらそれらを必ずや次世代の教育に活かせるようにしていきたい。

最後になりますが、分科会フィールドトリップを快く受け入れて下さいました田村哲夫氏、田村聡明氏、高際伊都子氏、長谷川智氏を始めとし、分科会活動にご協力頂きました多くの皆様に深く感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。

(川野さりあ)



アメリカ側参加者を見送る日に

環境問題と社会

Environment and Society

■分科会メンバー

森田修弘*

小林薫子

白畑春来

鈴木健司

Madison Mears*

Daniel Bateyko

Karim Boyd

Yuki Numata

Ryota Sekine

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

今日私たちの社会では環境問題が以前にも増してクローズアップされている。地球温暖化への世界的な取り組みの第一歩であった京都議定書が結ばれて早くも15年が過ぎ、国内では様々な地域や企業が主体的に環境保護活動を展開している。個人レベルでも自転車通勤やパークアンドライドなどが関心を集めている。また、原子力発電所や石油流出の事故が報道される中、地球にやさしい新エネルギーへの期待が高まっている。世界に目を向けると、動植物の絶滅を危惧したワシントン条約や資源としての水の重要性が注目され、各国の利害が錯綜する多国間の交渉が行わ

れている。資源の枯渇や汚染、公害、環境破壊など様々な問題の対策を考える上で、世界経済を牽引する日米両国が鍵を握るのは間違いない。当分科会では、環境問題における企業や政府、個々人の果たすべき役割と課題を考察し、自然との共生社会を構築するための方策を模索していく。

■事前活動

定例ミーティング

ミーティングの時間帯は、それぞれのメンバーと相談の上、週1回水曜日にGoogle Hangoutで行うように決定した。ミーティング当初は、各々の環境問題への知識が不足しているとの理由より、それぞれが興味のある環境分野についてリサーチし、そこで得た知識を毎週他のメンバーと共有するという形をとった。後半は、知識量は増えてきているが、その知識をアウトプットする機会が少ないという理由より、毎週一人が議題を決めて、それについてミーティングで議論するという形をとった。それと同時に新しい知識の共有もできる限り行った。また、アメデリとの合流後、円滑に議論を進めるためにアメデリのRTペーパーを事前に読み、互いにその内容も共有しあった。毎週ミーティングを行うのは、全員のスケジュールを合わせるのが困難であった一方で、毎週RT内でコミュニケーションを取れたことは本会議への準備としても非常に良かったように思う。(鈴木健司)

日本エネルギー経済研究所訪問

日時：6月11日(火)

場所：日本エネルギー経済研究所

この研究所は、「世界の中で、日本とアジアのエネルギー・環境を考え、発信する」というミッションのもとで研究活動をされているシンクタンクである。当日

対応して下さった方は若手の研究員の方3名であり、うち1名はJASCのOBの方であった。RTとして初めてのFTであり、私たちは少し緊張気味であったが、研究員の方が終始フランクに話しやすい雰囲気をつくって下さり、主に中東の石油情勢や日本の原子力事情をお伺いすることができた。FT後は近くに食事に連れて行っていただき、そこではご自身の経験や研究活動の本音などのお話をして下さいました。研究員の方はどなたも親切で、学生の視点に立って下さり、また自分の研究に誇りを持ちつつも研究を楽しんでいるように見受けられた。RTとしてエネルギー問題は重要な環境問題と捉えており、外交や国際情勢、経済といった多角的な観点からエネルギー問題を考えられるよいきっかけとなった。(白畑春来)



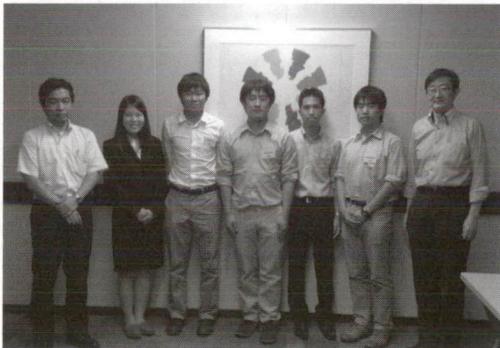
日本エネルギー経済研究所の皆様と

東燃ゼネラル株式会社訪問

日時：7月2日（火）

場所：東燃ゼネラル株式会社本社

日本の石油大手である東燃ゼネラル株式会社に訪問をした。昨今福島での原発事故によって改めて注目されるようになった火力発電、その現状や日本のエネルギー事情について中央研究所所長の西村様と研究員で工学博士の古関様にお話しを伺った。石油枯渇の話がクローズアップされる中、石油関係者の視点からお話しを伺えたのは非常に興味深く、またシェールガス革命やエネルギーミックスの話を中心に世界と日本のエネルギーの歴史と展望を学んだことで、より一層原発事故の与えた影響の大きさ、そしてエネルギー資源確保の重要性を学ぶことができた。（森田修弘）



東燃ゼネラル株式会社の皆様と

日本政策投資銀行訪問

日時：7月4日（木）

場所：日本政策投資銀行本社

環境 RT の FT の一環として今回は日本

政策投資銀行を訪問させて頂いた。基本的には、今回 FT の対応をして頂いた環境・CSR 部調査役の野澤様にお話をさせて頂き、そこで質問があればこちらから質問させて頂き、お話の最後にも質問の時間を設けて頂いた。お話の内容は、日本政策銀行とはという基本的な所から融資の際の基準などの細かい所まで話して頂き、とても丁寧な印象を受けた。質問にもとても丁寧に答えて頂き、FT 参加者の疑問を解決することができたように感じる。日本政策銀行について具体的に知ることができ、RT での活動にはもちろん、個人的にも業務内容を知れ、とても有意義な FT になったように思う。日本政策投資銀行についてお話を聞いたことは、環境 RT 外の参加者にとっても有意義だった様子で、RT を越え全参加者にとって有益な FT だった。今回このような貴重な機会が得られたのも、日米学生会議ならではの素晴らしい経験だった。（鈴木健司）

直前合宿

直前合宿では、春合宿から本会議までのそれぞれの分科会の活動を報告するプレゼンテーションを日本人参加者に向けて英語で行った。英語での正式なプレゼンテーションでは第一に言葉を的確に選ぶ、第二に PC などを使った演出、第三に英語のプレゼンテーションに慣れることを経験した。私達は、プレゼンテーションで、如何に一般の学生に環境問題につ

第4章 分科会活動

いて関心を持ってもらうかについて発表をした。しかし、参加者からは政府の関わり方についてなどの質問があり自分たちの視野に入っていなかった問題を提示された。本会議の前に英語のプレゼンテーションを練習できたこと、視野に入っていなかった問題を指摘されたことなど本会議の準備に大変有意義な直前合宿となった。また、直前合宿を通して分科会としての今後の課題や新たな目標も見つけることができた。そして、本会議に向けて分科会メンバーとの結束も深まり、信頼関係が強くなったと感じることができた。

(小林薫子)



直前合宿で最後の確認

事前活動総括

春合宿で環境問題へのイメージを話し合う中で、環境と経済という、相反する関係のバランスをどうとるかという大きな問題に気づき、その後、その問題を考えるきっかけとなりうる FT を行った。毎週ミーティングにむけてメンバーがしっかり自分で本を読み進めたり、リサーチをしたりしたおかげで、広範囲な環境問題について万篇なく知識を得ることがで

きた。ディスカッションよりは知識共有の方に重点を置いていたが、本会議においてその知識をどのように活用していくかを決めることができた。始めの頃はお互いシャイな部分もあり、議論においてコーディネーターののぶに助け舟をだしてもらったが多かったが、次第にデリだけでも順調に進めていくことができた。そんな中、本会議の直前になってメンバーが一人抜けてしまうという大きな変化が起きてしまい、他の分科会に比べて人数が少ない中で今後の活動について多少不安を感じながら、本会議を迎えることとなった。

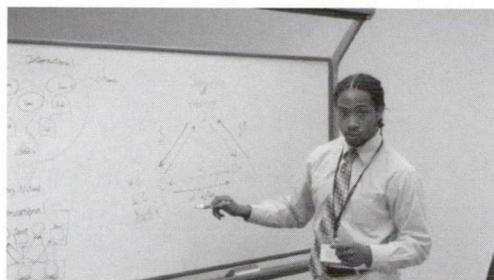
(白畑春来)

■本会議中の活動

第1サイト：京都

第1サイトであるということもあり、一番の大きな出来事はやはりアメデリとの合流であったように感じる。それまでにアメデリとのミーティングを行ってなかったので、実際に声を聞くのも初めてという状態だった。最初はやはり、RTメンバー全員が緊張していたように思う。それでも、自己紹介から始まり、それまでに各々が学んできたことの共有、日本側の事前勉強段階での意見を共有し、徐々に仲は深まっていった。また、京都サイトでは、総合地球環境学研究所を訪問し、環境問題に関する講演を聞いたことで、RT内でも活発な議論ができたように思う。そこで、ファイナルフォーラム

での RT の発表の基本となる意見の形成にも繋がった。それでも、議論をしていく上では、それぞれが遠慮しているようで、様子を見ながら行われていたように思う。
(鈴木健司)



考えを図式化する Karim

第2サイト：長崎

長崎ではハウステンボスを訪れ環境への取り組みを見学した。中でも自家発電の取り組みは印象的であった。災害大国である日本で、施設がそれぞれ自家発電の体制を整えるのは社会の安全のためにも必要だ。ハウステンボスのように私企業による積極的な環境問題への取り組みが日本でも今後増えてほしい。次に、私達は長崎原爆平和記念式典に参列した。人類唯一の被爆国である日本の国民として原爆の悲惨さを学び、二度と起こしてはならないものとして発信する義務があると感じた。資料館で見た当時の写真は衝撃的だった。東日本大震災により起きた福島原子力発電所の事故を経て、原爆の悲惨さを考える時平和利用の名の下に推進された原子力発電所の安全性についても考えざるをえない。講演会で被爆者

の方がおっしゃいたように、原子力の軍事利用だけではなく、平和利用についてももう一度考え直すべきなのではないだろうかという意見に共感した。(小林薫子)

第3サイト：岩手

最終プレゼンで伝えたいことが明確化されたため、実際に具体的に内容をつめていく作業をした。まずは現役の大学生である JASCers に向けた環境意識のアンケートを実施・分析し、そのアンケート結果の活用方法を念頭に、プレゼンの構造や提示すべき問題とその解決策のアイデアをいくつも考えては議論した。議論の内容が具体性を帯びてきたことで、各個人の持っている意見が出やすくなり、議論は活発になったが逆にアイデアがまとまらず、また会議も中盤を越えてきたところで日々の疲れもたまっており、ミーティング中は単に意見のぶつけ合いとなり雰囲気が和やかでない時もあった。各々がそのような雰囲気を改善したいという思いを抱いていたため、最終日のリフレクション後に思い切って一人ひとりの RT への思いや今後何をしたいかをぶつけ合い、またアイスブレイキングのようなフランクな話をしたことで、より一層仲を深めることができ、会議終盤にむけて結束力を高められた。(白畑春来)

第4サイト：東京

最終サイトである東京では、それまで

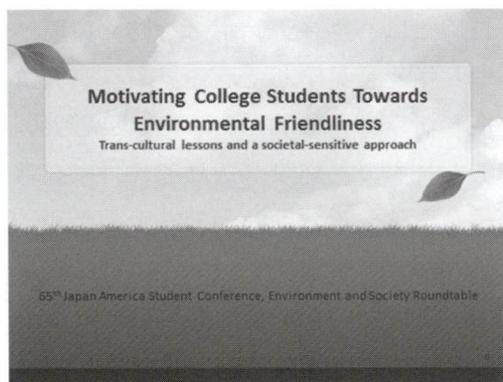
第4章 分科会活動

の議論に加え、ファイナルフォーラムでの発表の構成について話し合った。それまでの各々の意見をまとめ、RTとして一つの意見にするのは簡単な作業ではなかった。全員が納得いくようなものにまとめるのに時間を多く費やした。それぞれの意見を集め、話し合いどういった発表にするかを議論し続けた。発表の準備はファイナルフォーラム直前まで続いた。全員の協力のおかげで、直前で形にすることができた。それまで多くのことを経験した他のメンバーと共に、ファイナルフォーラムという場所でそれまでの集大成としての発表を終えた時には、言葉では言い表せないものがあつた。それと共に、65th JASCの終わりを意識し始めるようになった。それまで多くの時間を共に過ごした他のメンバーと過ごせる時間が残りわずかであることを認識させられた。それでも、このメンバーで会議をやり抜けたことを誇らしく思う。(鈴木健司)

ファイナルフォーラム

15分という短い時間で私達の分科会が今まで話し合ってきたことをまとめるのはとても難しかった。最終サイトである東京に入り、分科会のなかでも議論が白熱した。プレゼンテーションを最大の目標とする人達と、そこに重点をおかず分科会でのディスカッションに重点を置きたい人達とで分かれた。だが、みんなファイナルフォーラムを成功させたいとい

う共通した思いをもっており、議論を重ねた上で最終的にはみんなが納得できるようなプレゼンテーションを作る事が出来た。また、ファイナルフォーラムを成功させる上で仲間の大切さを改めて感じさせられた。米国側の参加者が自分の書いた英語の原稿をすべてチェックし、添削してくれた。また、正しい発音も丁寧に教えてくれた。参加者の中で国境を越えて、みんなで一つとなつてファイナルフォーラムを迎えることが出来た。発表が終わった後は達成感を感じたが、同時に終わってしまった寂しさをひしひしと感じた。(小林薫子)



■分科会感想

春合宿から本会議まであつという間だったが充実した日々を過ごせた。この会議が始まる前までは、環境問題についての知識がほとんどなかった。そのため、春合宿が始まる前までは楽しみと同時に不安な気持ちもあつた。だが、春合宿の分科会の会議で、自分達が環境問題のなかで特に興味のある分野を絞り込み、今

後の目標が明らかになったので、話していく中で不安はなくなっていた。また、FT 先では普段なかなかお会いすることが出来ない方々のお話を伺うことができ、自分の視野も広がった。今回の日米学生会議を通して、環境問題のなかでも特に今、私達学生が何を出来るかを話しあう大切さを学んだ。社会問題を解決するためにはまずその問題についてよく知ることである。毎週行った会議を通して、環境問題に関する本を読み、分科会の他のメンバーと意見を交換することによって、複眼的な視点で問題を捉えることが出来たので有意義だった。本会議に入り、米国側の参加者が加わったことにより、物の見方が多元化した。例えば、米国側の参加者は日本のリサイクルへの取り組みについて驚いていた。日本は資源が少なく、国土も狭いのでリサイクルはかせない。このように環境問題をとっても、国際レベルにおいて各国の事情により問題意識や課題は様々であるということを実感した。意見の相違もあったが、日米学生会議を通して意見の相違や文化の相違があっても、成果を生み出すことが出来るということ学んだ。(小林薫子)

自分の伝えたいことが英語でうまく伝えられず、何度も議論の流れを止めたのに私の意見に耳を傾けてくれ、異論や反論を忌憚なくぶつけてくれたメンバーからは、多くのことを教わり、刺激を得た。

まず、一人ひとりが様々な能力に長けていた。例えば MTG 中に目先の議論に囚われずに、しておくべきリサーチや方向性の整理など、何が必要なかを先に読み取って実行してくれたり、議論が進まず RT 全体の雰囲気落ち込んでしまっている時は気を利かせてそれとなく盛り上げてくれたりした。時々、個人ワークが多くなってしまいうまく意思疎通がいかんかったり、プレゼンにむけただけの議論が多くなってしまい、環境問題に対するディスカッションできなかつたりして、お互いの心の内が見えずに少なからず距離を感じてしまう時もあった。そのような違和感があった中、岩手サイト最終日のリフレクションの後にミーティングをひらき、今後話し合いたいことや、自らの本会議での目標を再確認しあい、また第3サイトにて初めてアイスブレイキングをすることで一段と仲を深められた。第4サイトに入ってから、時間がないという焦りもあってメンバーのやる気が全開になり、各々の得意なことをプレゼンの内容に活かしながら和気あいあいと議論を進められた。そのおかげで、プレゼン中はとても楽しめたし、私たちが伝えたかった思いが聴衆に伝わったように感じ、やりきったというすがすがしい思いを感じることができた。(白畑春来)

これまでの RT 活動を通して、最初に思うのはこのメンバーで活動することがで

第4章 分科会活動

きて非常に嬉しいということである。RT活動を通して本当に多くのことを経験することができた。事前勉強の段階では同じ日本国内でも住む場所の離れたメンバーと毎週ミーティングを行い、本会議が始まれば今まで話したことのなかったアメデリと議論を進めていくのは、決して簡単ではなかった。楽しいことばかりではなく、悩むことも多くあった。多様なバックグラウンドを持つメンバー達とチームとしてやっていくことの難しさを知り、どうすれば良いのか分からなくなることもあった。それでも、互いに協力し合い進んでいくことで、チームとして活動する素晴らしさも知った。そして、様々な葛藤を通して、最終的にRTとして本会議をやり抜けたことを誇りに思う。自分たちが最終的に行ったファイナルフォーラムでの発表が、どれほど社会に還元されたのかはわからない。それでも、このRT活動を通して得た経験はかけがえのないものになったと思う。このRTで得た経験をこれからどのように活かしていくかが大切だろう。他のメンバーとの関わりをこれからも大切に、このRTで得たことを胸に、これからも頑張っていきたい。

(鈴木健司)

■分科会総括

環境問題は誰にとっても身近なトピックである分、具体性を伴うように強い意識を保たなければ表面的で薄い議論に終

始してしまう可能性が常にあった。そこで、分科会のテーマを「環境問題と社会」にし、環境問題に対して、政府・企業・市民の3つのアクターがどのような責任を持ち、その改善にどのような取り組みをするかという点に注目をして分科会活動を始めた。

春合宿では、各メンバーが興味を持っている環境問題、そして何故その問題に興味を持つようになったのかを共有し、それぞれの問題に対して実際に社会でどのような取り組みが行われているのかを調べた。その結果、「環境問題」と「経済」には強い関連性があるという点に着目し、その後の活動の軸とした。本会議前のFTではJASCのOBや賛助企業の協力の下、日本を取り囲むエネルギー情勢や企業を環境問題対策に取り組みさせるための銀行融資などについて学ぶことができた。本会議では、アメリカ側の学生とともに各サイトで研究所や再生可能エネルギーを利用している企業などを訪問し、現場を通して現状を学びつつ、市民や企業を動かすために大学生が取ることのできる行動は何か、そしてその学生を動かすインセンティブは何があるかという点を議論することとした。

当初はコーディネーターに指示を仰ぎながら議論を進めていたデリ達も本会議を半分も過ぎた辺りから、自分達で議論の方向性を決め、自主的に様々な取り組みを行うようになっていった。その一つ

が他の参加者達へのアンケート調査である。日頃学生がどの程度環境問題に興味を持っているか、どの程度の対策を取っているか、何が彼らを動かすインセンティブとなっているか等のデータを集め、実際に学生を動かすためには何が必要なのかを分析した。各メンバーが主体性を持って取り組み始めたことで議論はより活性化し、最後のファイナルフォーラムの発表では出会ったころとは見間違えるような自信に溢れた姿を見せてくれた。

すべてのメンバーがそれぞれの苦勞を

抱えつつ、ときには涙を流しながらも決して挫けることなく前を見据え、グループの中での自分の役割を見つけていったことで1ヶ月という短い期間の間に大きく成長したように思える。そんな彼らと共に活動をできたことは誇らしく、彼らのその強さを称賛したいと思う。

最後にこの分科会を支援してくださった皆様に改めて感謝の意を表します。有難うございました。(森田修弘)



マイノリティと差別

Social Minority and Discrimination

■分科会メンバー

市毛裕史*

兼子莉李那

大野峻典

大日方望

橋本萌

Katherine Jordan*

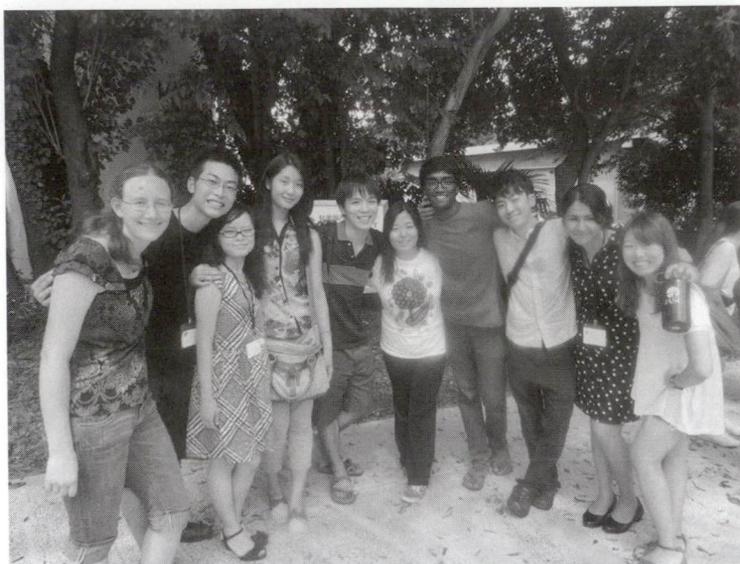
Feruzaz Azimova

Pramodh Ganapathy

Sora Choi

Sharon Lu

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

グローバル化が進み、国境を越えた人の移動が世界各地で活性化している。そうした中、基本的人権や市民権が十分に保障されていない社会的弱者が多く出現し、新たな差別、人権侵害などが生じている。多民族国家アメリカでは、アフリカンアメリカンへの人種差別や移民の貧困問題が社会に根強く残り、近年新たに同性愛者の権利問題も表面化している。日本においても在日コリアン、アイヌ民族や部落出身者などのマイノリティに対する不平等や差別が存在している。また今後日本の人口が減少し、外国人労働

者が増加していく中で、外国人移住者に対する社会的差別や法的地位の問題は重要性が増すであろう。このように様々な形で社会的弱者への差別が取りざたされる中、どのように人権を平等に保障していくべきなのか。当分科会では、人種、民族、ジェンダーなど差別や偏見の対象となっているマイノリティが平等、公正に生存できる社会をどのように構築していくべきか、その方途を模索していく。

■事前活動

春合宿

春合宿では、日本側参加者が初めて顔を合わせるということもあり、最初の分科会活動では己紹介から始まり、分科会テーマにおいて参加者一人ひとりの興味のあるトピックを共有した。春合宿中の分科会活動では、主に「マイノリティー」と「差別」という言葉自体に焦点を当て、其々の言葉の定義を模索し、「何故差別は起こるのか」「何故差別はいけないのか」等、今後の分科会活動の基盤となる議論を行った。また、各自のテーマに合わせ、フィールドトリップの候補地、今後の議論の進め方などについても話し合った。

春合宿では、参加者はお互いに初対面であったにも関わらず、率直に其々の意見をぶつけ合い、普段の大学の授業等で行うグループ討論とは全く違う、真剣な議論が出来たと感じている。マイノリティーと差別という日常的には扱いにくいテーマであることから、言葉の定義を考えるだけでも様々な議論が展開され、今後の活動に期待の持てるスタートとなった。

(兼子莉李那)

RT レポートおよび勉強会テーマ

マイノリティーと差別分科会では、朝勉強会という幅広く知識を身につける

Skype ミーティングの他、一人一つ自分の興味分野を決め、合宿以降の3ヶ月でレポートを書いた。また、レポートの内容に基づく勉強会を各自に企画してもらった。そして、座学に留まらず実際に有識者の方にお話を伺ったり、施設を見学したり、自分自身の目で学ぶことも取り入れる事で、「マイノリティーと差別」について自分の意見の軸を作り、各自が本会議において確固とした知識に基づく自分の主張をできるようになることを目指した。

【兼子莉李那】

私は自身の分科会テーマとして、「差別の構造」を設定した。その理由は、障害者である自身の差別体験等から、差別の基礎知識を深め、その視点から様々な差別問題を研究していきたい、と感じたからである。以上のテーマを踏まえ、RT ペーパーでは、差別とは何か、何故差別は起こるのか、差別と区別の違い等に焦点を当てた。他の日本側分科会メンバー三名は其々部落差別、人種差別、性的差別等、特定のテーマに焦点を当てていたが、私のテーマはマイノリティーと差別そのものを考える上の基礎となるものであり、勉強会においては、私の差別体験の一部

第4章 分科会活動

を実例として共有し、私が指示する差別の定義等を示した。差別のとらえ方は人によって異なるが、最低限言えることは、差別は誰かを傷つける攻撃であるということであり、その視点から様々な差別を見ると、其々の差別の共通点が見え、差別問題の奥深さと難しさを改めて感じ、今後も研究を続けたいと感じている。

【大野峻典】

「マイノリティーと差別」の中で、私は特に性に関する差別を取り上げた。社会に残るジェンダー差別(いわゆる男女差別)、LGBTの性的マイノリティーに関する問題である。勉強会で特に議論したのは、社会におけるジェンダー差別に関してであった。日本では未だに職場に男女差別が残っている。育児休暇を取るのがほぼ全てが女性であったり、一度職場を離れると出世競争に勝てなかったり、つまりは実質的に育児休暇を取りにくい風土が残っている。代表例として考えられるのは、専業主婦という存在である。次世代を育てるコストが女性の側にかかり、専業主婦というかたちが生じた。しかし、少子化が進み労働力不足が叫ばれる中、いかに女性を活用するかをかんがえなければならない。そのためには女性の側にも、次世代を育てるコストを見

積もるような差別的な見方ではいけないのだ。社会が男性女性に均等にそのコストを期待する世の中になって初めて、男女ともに働きやすい社会、労働力を最大限活用できる社会になる。日本がそのような社会を実現するためにはどのような事をしたらいいのか議論した、先進的なロールモデルになる福祉国家を探そうとなった。

【大日方望】

マイノリティーと差別分科会のメンバーとして自分が取り組んだのが、現代の日本社会における部落差別についてだった。予備の知識もなく、見えない差別でもあるこの問題に取り組もうと思ったのは、単一的、といった表現がなされる日本社会をより立体的に見ることができないのではないか、という考えからだった。実際勉強してみて、これが複雑かつ膨大な広がりをもっていることに気がつかされ、おじけづく部分はあったが、同時に普段の自分の身の回りの生活で所与のものとしてきたものが問いなおされる体験をした。食肉市場と皮革産業の現場に実際に足を運び、自分の五感で感じ取り、確かめたことは、自分の普段の生活に密接に関わっていても、不可視な領域が社会には存在するという事だった。それ

らの体験を通して、社会に内在する、自己に内在する価値を直視せざるを得ず、難解の一言に尽きるように思った。矛盾の存在についての認識と自覚。自分にもたらされたものは予想以上に重たく、しかし大切なものだと感じる。

【橋本萌】

マイノリティーと差別の分科会に入ってから自分はアメリカの人種差別というテーマで勉強を進めていこうと決めていた。RT paper では先住インディアン、アフリカンアメリカン、そしてヒスパニック系の3つの人種に対する差別の歴史と現状を取り扱った。しかしやはりテーマがあまりにも大きくカバーしきれないと思い、その後は一番自分の中で興味のあるアフリカンアメリカンに対する差別に焦点を絞り、自分の勉強会もこのテーマで開かせてもらった。具体的にはアフリカンアメリカン差別の歴史を時代ごとに追ひ、今日のアメリカの現状に繋げるという内容にした。やはり歴史的事実を知らなければ現状についての議論をすることは難しいと考えたが故に歴史を中心に勉強したのだが、自分の中でも知識になった上に、本会議での議論においてもその知識を応用して他の事例と関連付けられた点で非常に良かったと思っている。



FT 後早稲田大学にて

防衛大学生とのディスカッション

防衛大研修においては様々なコンテンツがあったのだが、その中の学生とのディスカッションは非常に興味深いものとなった。お互いにプレゼンテーションをした上で討論をするという内容だったが、私たち会議側は研修のあった6月の時点での自分たちの興味関心を発表した。防衛大側は「第442連隊から学ぶ差別とマイノリティー」というテーマのプレゼンをして下さり、この機会がなければ得ることの出来ないような知識を私たちは得ることができた。差別を克服した日本人として第二次世界大戦中の第442連隊を紹介して下さい、制度だけではなく強い意志が差別克服において重要であるというメッセージを訴えて下さった。その後の討論においては固定観念を持つことによる正しい知識の欠乏、そしてそのような知識の無さによる恐怖という感情の発生、それによる差別の発生といっ

第4章 分科会活動

た一種の差別形態について話合うことができ、本会議に繋がる有意義な意見交換の場となった。(橋本萌)



防衛大学校の皆さんと

上智大学 出口真紀子教授訪問

日時：6月29日(土)、7月15日(月)

場所：上智大学 四谷キャンパス

日米学生会議のアラムナイでもあり、上智大学外国語学部英語学科で差別の講義をされている出口真紀子助教授から二度お話を伺った。一度目は参加者たちの興味関心に沿って貴重なアドバイスをくださり、二度目では映像資料をともなって差別問題についてご教示頂いた。私が自身のトピックとして設定した「差別の構造」という、差別問題と向き合う上で最も基礎的な分野において、とても興味深いお話を聞くことが出来た。米国における人種差別や性的マイノリティーに対する差別や偏見が何故生じてしまうのか、そもそも差別とは何か。世間には、差別

は自分には無関係だと感じている人や、世の中に存在する差別の現状について全く知らないまま生きている人が沢山いる。出口先生のお話の中にあつた「差別なんてない、差別を知らない、ということは、差別された経験を持たないからこそ、自身がマジョリティに属しているからこそ言えること」というお言葉が、とても印象的だった。差別を知らないと言う人は、自分がどこかで誰かを差別している可能性に気づかない、または気付いても、それを無視している人だと、私は考えているが、出口先生のお話で、私がそれまで持っていた意見を再確認出来たと思う。

(兼子莉李那)

東京都中央卸売市場食肉市場見学

日時：7月3日

場所：東京都中央卸売市場食肉市場

フィールドトリップで私たちは東京都中央卸売市場食肉市場を訪れ、職員であり部落解放同盟東京連合会品川支部の高城順書記長より直接食肉処理業務に対する差別や偏見に関してお話を伺うことができた。ここでのお話は凄く印象深く、この後の本会議においても大いに役立った。特に印象的だったのは「隠されていることによって偏見が生まれている」「人というのは全員が差別者」という言葉で

ある。肉の流過程はあえて教えることではないという意図的思惑が結果的には差別の伝承に繋がってしまっていること、また差別を差別している側の見方から考える必要性を訴えて下さった。部落差別という、普段は意識することのない差別形態を東京の中央で学ぶというのは正直ショックでもあり、自分の知識や意識の薄さを感じさせられた。そしてこのフィールドトリップは、学校教育による差別の克服というものを考えるきっかけとなったので有意義であった。差別という一種タブー視されているお話を聞くことのできる非常に有難い機会となった。

(橋本萌)



高城順氏と

東海大学 小貫大輔教授訪問

日時：7月16日

場所：東海大学湘南キャンパス

日本におけるブラジル人学校の状況についてのレクチャーを東海大学の小貫先

生に聞きに伺った。ブラジル人の子どもたちが直面する現代の言語習得状況についてのお話が特に印象的であった。特に問題だと感じたのは、バイリンガル教育の難しさについてであった。ブラジル人のほとんどは、「いつか母国にかえるだろう」というメンタリティの人が多く、結果的に20年近く日本にいても日本語をほとんど身に付けていない場合などがあるという。逆に、共働きの親をもつ子どもが家庭で母語を使う機会がなくなり、日本語を覚えても母語であるポルトガル語を習得できず、親と意志疎通ができないという深刻な状況もあるというお話だった。ブラジル人学校への支援は、バイリンガル教育を保証するものとしての重要性をもつ上に、日本における言語・文化の多様性、文化交流の促進などにおける有益性をもつものなのではないかと考えた。(大日方望)

朝鮮大学校訪問

日時：7月18日

場所：朝鮮大学校

朝鮮人大学校では、二人の朝鮮大学校の学生の方に、在日としてのアイデンティティや視点について様々なお話を伺うことができた。まず、在日の人の方として、韓国側政府より、北朝鮮の政府の

第4章 分科会活動

ほうに帰属感を感じ、日本の朝鮮学校はほとんど北朝鮮に帰属しているという話で非常に以外と感じた。在日の方々にとっては、日本にいる朝鮮の人びとを見捨てずにいた北朝鮮政府のほうが信頼できる存在なのだというお話に、これまで自分の見えていなかった在日像というものが見えてきた。それと同時に、日本と北朝鮮間の政治的な緊張関係や、日本における北朝鮮に対するメディア報道などから、日本において北朝鮮のアイデンティティをもつことの特異性を感じた。在日の人びとの存在は日本社会においてマイノリティーでありながらも、朝鮮半島と日本の複合的文化の視点をもつ点で、社会や日本の国際関係に大きく寄与する可能性を秘めているのではないかとここでの対話を通して考えた。 (大日方望)



学生のみなさんと朝鮮大学校前にて

沖縄を考える勉強会 牛島貞満氏

日時：7月21日

場所：早稲田大学 戸山キャンパス

故牛島満司令官のお孫さんである牛島貞満様よる沖縄戦についての講義に参加した。沖縄自主研修に参加出来なかつた分、以前から関心を持っていた沖縄戦について学ぶ事が出来、非常に有意義なフィールドトリップとなった。自分自身が生まれ育った国の歴史であるにも関わらず、戦時中当時沖縄戦が日本にとってどのような意味を持っていたのか、沖縄戦当時の一般の人々が直面した現実の厳しさ、沖縄戦における集団自決の意味など、文字や言葉で表す事が出来ないほど悲痛な、残酷な日本の歴史の事実について初めて知ることが出来、日本人でありながら沖縄戦の事実について殆ど知らなかつた自分を恥じると同時に、戦争を直接体験した人々が高齢化する中、戦争を体験していない世代も、日本人として、敗戦という教訓を後世に伝えていく事の重要さを、身を持って感じた。日米学生会議の参加者として、防衛大学校研修や今回の沖縄を考える勉強会に参加し、日本における「軍隊」や「戦争」という言葉の持つ意味の重大さを、改めて考えさせられた。 (兼子莉李那)

きねがわ皮革工業地帯訪問

日時：7月24日

場所：木下川小学校

部落解放同盟墨田支部の北川京子氏および、産業・教育資料室きねがわの岩田明夫氏のご協力により、墨田の皮革産業地帯である木下川の皮革産業工業地帯に見学へ行った。ここでは日本の豚皮の8割が生産されており、グッチなどのブランド製品のための革の輸出も行っている。この地域一帯は、夏場ということもあり、腐敗臭、においがしていた。お話を聞くと、それは、薬品、脂、骨油などのおいであるとのことだった。魚屋に魚屋のにおいがあるように、なめし屋にもなめしのおいがある、という説明には納得できるものがあつた。現在の木下川の皮革産業地域に対しては未だに差別が存在しているということだった。インターネット上での写真入りの差別的な紹介文や、直接的な差別電話、また結婚差別などが残存している事例から未だに根強いのだというお話だった。差別に関わりたくないかに関係なく、差別とは否応なく向き合わざるを得ない人がいる、というお話が日本におけるマイノリティーの問題について示唆的だった。実際、そこで働いている人たちは、プロとしての「ほこり」をもっている、ということ

は忘れてはならないことだと感じた。

(大日方望)



岩田明夫氏と産業教育資料室きねがわにて

直前合宿

8月1日夜行バスから降りた。直前合宿が始まった。始まった事にいまいち実感がわかなかった。直前合宿の目的はアメデリと合流する前に、これまで行ってきた内容を総確認し、まとめることで今後の本会議のイメージをつくり、8月2日にジャパデリ全体で共有することであった。そのため、まずは、リサーチ、FT、これまでの勉強会について、分科会のメンバーと共有した。その中で共通項を探り、分科会としてこれまで考えてきたことをまとめた方向性について議論した。議論の中で、全てのマイノリティー問題の共通は、正しい情報の不足であり、さらその原因は、「寝る子は起こすな」という考え方が背景にある考え方があるとい

第4章 分科会活動

う見解をだした。以降の本会議の議論において、その視点をフルに活かした。

(大野峻典)

■本会議中の活動

第1サイト：京都

京都。ここで本会議がスタートした。分科会活動も始まり、まず自己紹介から。最初は皆緊張していた様子。みんなお互いの顔を伺いつつ。活動の内容としては、まずはお互いのRTpaperの内容を共有とそれに関する質疑応答。方法は、RTパペルのpaperを紹介するというもの。Paperを紹介する中で、お互いに、その内容に関する打ち合わせをした。それを通し、それぞれのテーマ：(人種差別、在日差別、部落差別、性差別、障害者差別、etc)に関し、知識を共有し議論で理解を深めた。また、京都ではLGBTに関するFTとしてColori caféにお邪魔した。性的マイノリティー問題に関して声をあげられている当事者の方とのつながりが、その問題に関する僕らの当事者意識を変えてくれた。最後に、長崎サイトでのタレントショーに向け、韓流ダンスの練習に励んだ。これが僕らの分科会の絆を強め、以降の分科会活動をより充実したものにしてくれた事は言うまでもない。(大野峻典)

Colori Café 訪問

日時：8月4日

場所：京都市内 Colori Café

Colori Caféとは、レズビアンである方が作られたcaféで、性的マイノリティーの方々のコミュニティを作っているcaféである。今回はRTで性的マイノリティーに関する問題を考えるにあたって、お話を伺いにいった。伺ってみると、店長の吉田香織氏と、常連のお客さんたちが出迎えてくれた。僕たちとの議論のために、場をセッティングしてくれていた。おかげで、そこで、性的マイノリティーに関する当事者としての意見をお聞きしながら議論を深めながら考えることができた。特に印象に残ったのが、店長さんらが、性的マイノリティーとして声をあげ、意見を発信している事であった。寝る子は起こすな。日本人の見て見ぬ振りをする文化を打開するためには、マイノリティーの当事者の声は特に効果的な意味を持つ事を感じた。僕らにとって、性的マイノリティーの方の存在は、もう既に実感を伴っていて空想上のお話ではない。机上のみではなく、実感を伴えたのは、彼らの声をあげる協力ありきである。実感を伴い理解する事は、人の問題への意識を深く変える。そういった機会が、日本でも増えていけば、マイノリティーに関

する態度は変わってくるだろうと感じた。Colori Caféの皆様には本当に感謝しております。(大野峻典)

第2サイト：長崎

長崎の分科会活動では、それまで RT paper に基づく各々の分科会のテーマに関する問題意識の共有をふまえ、今後の RT タイムの時間の使い方を決めた。今後特に議論を深めるべき題に関するブレインストーミングとファイナルフォーラムに向けた時間の取り方を簡単に決めた。以降はそこで決めた議題に関して話し合う事を中心に行った。話し合った内容としては：personal experience, 在日問題、性差別についてである。それぞれの問題に関して、議論を深めた。特に personal experience に関しては、お互いの差別やマイノリティーに関する経験をシェアし、互いの理解を深めるのにキーとなった。もう一つ、分科会活動の本筋とはそれるが、タレントショーにて分科会のメンバーが中心となって、ダンスを踊った。楽しい時間を共有した事も互いの絆を深める良いきっかけになったと思う。

(大野峻典)

第3サイト：岩手

岩手では、まず職場におけるジェンダー平等論についての議論を行った。女性

の家庭における位置づけと会社における位置づけが議論され、社会における固定化された女性の役割があるのではないか、ということに議論的があてられた。この問題を解決していくためには、男性の家庭における重要性も主張される必要があるというアイデアも示された。次に、LGBT の社会的受け入れについての議論がなされた。文化圏ごと捉え方の違い、現代日本におけるメディアの表象の仕方、またアメリカにおけるセクシュアルアイデンティティのオープンさの特徴などを軸に議論が発展した。教育 RT との合同議論も行い、差別の問題と教育の関係について意見を交換した。(大日方望)

第4サイト：東京

東京では、主にファイナルフォーラムに向けての準備のために、これまでの議論を集約する作業に入った。これまで行ってきた議論をいかにひとつのプレゼンテーションとして形作るかということについて、様々に意見を交わすなかで、共通してどのトピックにも現れたテーマ、メディア、人対人の交流、トップダウンーボトムアップ、三つのテーマが説明される形で全体を構成することにした。スキットを交えながら実際の議論の風景を演出することにもした。前日には、深夜

第4章 分科会活動

過ぎてまで作業を行い、なんとかスライドや原稿を用意することができ、翌日のファイナルフォーラムに臨むことができた。
(大日方望)

ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムにおいて私たちが一番こだわったのは「自分たちらしさ」を出すことである。私たちの中では、やはりマイノリティーと差別 RT は他の RT とは少々違うという意識が強く、その違いを発表で出していくことが何よりも重要と考えた。その違いとは体験に基づいて討論が進むことである。勿論ある程度の事前勉強は重要だが、それよりもそれぞれのメンバーの個人的体験が1ヶ月間の討論の軸であり、その点が自分たち分科会の一番の強みだと言えた。そこでたくさん話し合いを重ねて行き着いた発表方法がスキットを使うというものであった。実際のディスカッションをファイナルフォーラムの場で再現することによってどのように話し合いを進めていたのかを伝えるという方法だ。事前に練習も必要であり正直楽ではなかったのだが、十分マイノリティーと差別 RT らしい発表が出来たのではないかと思っている。また、私たちはほぼ毎回の RT time で別のテーマについて話し合っており内容が

莫大であったために、15分という短い時間の中で何を取り扱うかについてかなり悩んだ。結局は毎回のテーマの共通点であった Media, Interaction, Top-down / Bottom-up approach という3つの軸を基本として、そこから派生させて小テーマを発表していくという形式に落ち着いていた。この3つの軸に辿り着くまでかなり話し合った上に意見の衝突もあった。ファイナルフォーラムについて話すまでほぼ衝突のなかった私たち RT だが、ここでかなり揉めたのは全員が最高のファイナルフォーラムをしたいという強い思いを持っていたからだと思う。結局ファイナルフォーラム前の3日ほどは深夜遅くまで皆で起きながらプレゼンを作ったのだが不思議とこれは苦ではなかった。1ヶ月真剣に向き合ってきた仲間とその成果を出すための活動となると皆が意気込んでおり、かなり楽しかった。私たち10人にしかできないようなファイナルフォーラムをすることが出来、良い1ヶ月の締めくくりが出来たと思う。(橋本萌)

分科会感想文

この第65回日米学生会議に応募した際、マイノリティーと差別の分科会は私の第一希望だった。それは、障害者というマイノリティーの立場から、そして障

害者でありながら一般の学校で健常者と共に学んできた経験から、差別する側、される側両方の立場を理解することが出来、そこから発信出来ることがある、との考えからだった。本会議を終えた今、私が思うことは、当分科会の活動において、私は今まで口にする事のなかったような自身の差別体験や、マイノリティーの立場として抱いてきた複雑な感情等も話す事が出来た、という事である。議論を進めるうち、議題により、他の参加者の発言により、時には日本語・英語に限らず、言語で表すことが困難な感情を抱くこともあったが、他の参加者の「理解したい」「知りたい」という気持ちに支えられ、普段は口にする事も諦めてしまうような、私が障害者として日常生活で抱いている複雑な感情等を出来る限り伝えたいと思う事が出来、自分の持てる能力を最大限に発揮して伝えることが出来たのではないかと思う。分科会メンバーが見せてくれた私の言葉を受け入れて理解しようとする態度は、私に「発信することの大切さ」を改めて教えてくれた。当分科会での活動を通して、今後は様々なマイノリティーに関する知識を増やすとともに、自身のマイノリティーとしての立場を生かして、周囲のマイノリティーの声に注目し、それを発信していき

いと、改めて感じた。 (兼子莉李那)

差別とマイノリティー分科会では、様々な社会的なマイノリティーの生きにくさ、差別に関して、その問題となる理由から、いかに解決していくべきかなど、広く自由に議論した。この分科会で特徴的だったのは、全てのメンバーがある意味この分野に関するスペシャリストであったことである。というのも、この分科会では、パーソナルな問題を多く取り扱ったため、自身のバックグラウンドに基づいて意見を言う事が多かったため、それぞれがそれぞれの経験に基づいて正直な思いをぶつける事に意味があり、それが求められていた。それもあってか、分科会内の仲間は、自分のコンプレックスとなるような体験迄打ち明けられるような仲間になった。分科会活動を通して、得られたものは、多様性に対する受容力と、最高の仲間だった。そもそもこのJASCに僕が参加した目的は、多様性の中で他者との相互理解のためであった。まさにそれが達成されたと言える分科会活動だったのではないかと思う。また、一生大事にしたい仲間ができた。一緒に過ごしたのは、ほんの一ヶ月。ほぼ地球の反対側で過ごすのは、今後の数十年も。それでも、一生のつきあいと思える仲間

第4章 分科会活動

ができたことに感動した。多様性の中での深い相互理解は、今後の人生のライフワークにしていきたい。まだその具体的な形はわからないので、これから考えていきます。分科会は人生を変えました。

(大野峻典)

RTでは、約4ヶ月間活動した中で、多くのものを得たように思う。まず仲間が挙げられる。日本側もアメリカ側も、自分のRTでは、多様性をもった人びとが集まっており、お互いの長所を活かし合うことができた。個人個人が集団として、それぞれがより大きな力を発揮することができた分科会だったと感じる。65回の絆を分科会としても今後も継続させていきたい。第二に、自分自身の変化と成長が挙げられる。マイノリティーと差別についてのトピックと向き合うなかで、やはり自分自身の価値を試す機会を多くもったように思う。実際の人との関わりや、自分のトピックの研究や、RT内でのディスカッションのなかで常に自分と向き合い、また分科会のメンバーと向き合った。結果として、自分は希望を持ち、時には妥協したのかもしれない。しかし、それらの全てが今の自分を作り変え、成長させてくれたと信じている。最後に、自分がグループで本気で取り組んだことから

得られた自信がある。自分の色を、自分の興味を突き詰めて、足を運び、RTのメンバーと議論し、充実した時間を過ごせたことは、自分の大きな努力の成果でもあると思う。この経験を、今後の分の糧としていきたい。

(大日方望)

マイノリティーと差別というテーマは普段の生活の中ではある意味タブー化されているものである。私たちRTの目標は、隠された事実を“明るみに出す”こと、let the sleeping dog lie theoryを覆すことであり、社会への発信というものが出来たかは疑問だが少なくとも私たちの中では様々な社会的マイノリティーについて今自分たちの出来る範囲で議論することができ、社会へ発信するための第一歩を踏み出せたのではないかと思っている。このRTでの収穫は、今まで一言で「差別」と聞いたときに自分では連想しなかったような話題についても議論し、自分の視野の狭さを認識できたこと、更に何でも言い合えるような仲間を得ることが出来たことである。私自身、この会議が始まるまでは差別と言えば人種差別という固定概念を持っていたが、本会議では女性やLGBT、障害者、部落、外国人、琉球沖縄など多岐にわたるマイノリティーに対する差別についてディスカッショ

ンすることができた。無意識に自分も行ってしまうている差別が存在することに気付かされ、非常に有意義であった上にこれからの生活において度々役立つであろう気付きとなった。また、RTメンバー全員が何らかの差別に関する体験をしており、話にくい内容ではあるがそれを互いに共有することでメンバーの絆はどのRTよりも固いと自信を持って言える。このような仲間と出会えたこと、1カ月間向き合うことが出来たことで私にとってこの夏は life changing なものとなった。

(橋本萌)

■分科会総括

「この住みにくい日本を変えていこう」第64回会議のメンバーからもらったこの言葉が、マイノリティーと差別分科会を創る原動力となった。

なぜ住みにくいのか？アメリカから日本への留学生であるそのメンバーからの問いを追求していくと、単一的にみえ、何事もないようにみえる日本の隠れた問題性がだんだんと表れてきた。そこで、日米という異なる二つの社会の問題に取り組み、異なる「めがね」を持って自国のことをもう一度みる。そうすることで、「今までみえてこなかった問題をみえるようにする」ことが可能なのではと考え

た。そして、何よりも学生だからこそ、この社会的にはタブー視されがちな問題に対して率直な議論が実現できると考えた。まだ社会に出ていない、企業にも属さず、公務員でもない、色が付いていない学生だからこそ何物にもとらわれず、自分自身が獲得する「レンズ」でマイノリティーと差別の問題を捉え、解決策に取り組む必要があるのではとの想いのもと当分科会はスタートした。

当分科会の参加者は誰一人として同じではなく、誰一人欠けても当分科会は成り立たなかったと言えるほど、各々が強い個性を持ち、熱心に分科会活動に取り組んでくれた。自分自身の問題関心について勉強会を開き、フィールドトリップを積極的に企画した参加者は、当初こちらが抱いていた不安を消し去るほどしっかりと自分の軸を持つ人材に大きく成長した。本会議では、日本以上に多様性のあるアメリカ側と合流しても真摯な議論を貫き通し、深夜にまでわたる議論に誰一人嫌な顔をせずむしろ真剣に取り組む姿勢には頭が下がる思いだった。部落問題、在日朝鮮人問題、性的マイノリティー、アフリカンアメリカン、障害者差別、沖縄問題、差別の構造など、いわゆるタブー視されている様々なテーマに果敢に取り組む、ファイナルフォーラム

第4章 分科会活動

では差別にはどのような問題があり、解決に向けてどうアプローチしていくかを、マイノリティーと差別分科会らしく伝えてくれたかのように思える。

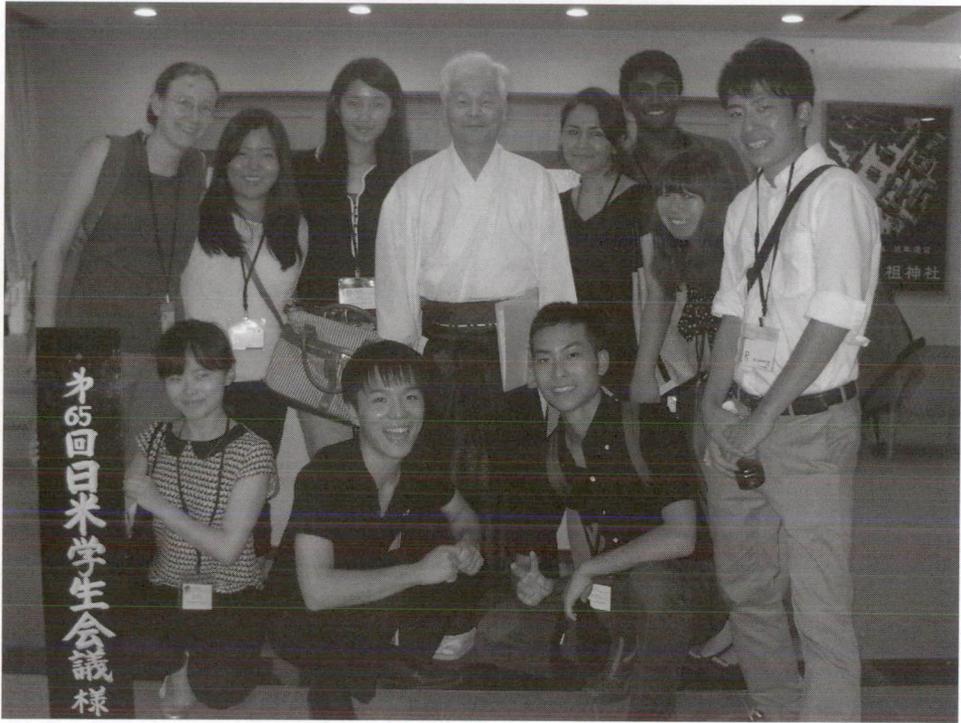
差別問題について「寝る子は起こすな。」という、問題を隠す姿勢ではなく、きちんとした情報共有により、この社会に生きる全員が当事者であり課題について考えていく必要性を唐文化会が主張した。だが、この分科会で3ヶ月間話し合った事が、これまでの既存の議論の枠組みを越えるものであったかどうかは定かではないし、恐らく越えるものではない。分科会メンバー全員が一致して出した結論によって、今すぐに日本の、アメリカの、世界の現状が変わるわけではない。しかしながらそれでも、この分科会の経験を活かし「マイノリティーと差別」の問題について考え続け、周りに影響を与え続け、そしていつの日か、問題の解決に向かうムーブメントが起きたときに、その解決の意志を持つものが今回の分科会の参加者であるとするれば、この一ヶ月の議論は時間では推し量れない価値を生み出したといえるだろう。

議論の成果の他に、上辺ではない真の意味の相互理解が実現されたことが当分科会の最大の成果であった。個人の体験

に基づく議論という衝突するテーマが多く、英語での議論という難しさがあるなか、分科会メンバー10人全員が最後まで仲違いを起こさず、むしろ仲の良さを深め、真摯に議論をしつつもお互いへのリスペクトの気持を根底にもち続けてくれた事に心から感謝するとともに、そんな分科会を担当できたことを本当に誇りに思う。今後も関係を持ち続け、心から信頼できる友人として、お互いを支え合う関係を続けてくれたらと切に願う。

最後になりますが、フィールドトリップを快く引き受けてくださった皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。皆様のご協力ご尽力なしにはマイノリティーと差別分科会は実現しませんでした。本当にありがとうございました。そして、私のつたない英語に辛抱強く耐え、本会議では私以上に分科会を引っ張ってくれたRTパートナーのKatherine、至らない点が多々ありつつも最後までついてきてくれたRTのみんなに謝意を表したい。当分科会にご協力をいただいた全ての皆様に心より御礼申し上げます、本当にありがとうございました。

(市毛裕史)



情報技術と文化

Culture and Technology

■分科会メンバー

ヴーホアンミン*

伊井佐織

鈴木悠司

関口響

三科圭介

Nobuko Masuno*

Drew Korschun

Kelly Cargos

Bao-Quyen Nguyen

Robert Ken Panis

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

情報技術の急激な発展により、人と人の関わり方に大きな変化が起きている。例えばこれまで、人間は直接会って表情や身振り、視線などといった非言語的要素をまじえたコミュニケーションをはかってきたが、ソーシャルネットワーキングサービスやEメールの普及により人々は対面コミュニケーションだけではなく、非言語的要素の欠けた非対面コミュニケーションも頻繁に行うようになった。また、インターネットや様々なソフトウェアの普及により誰でもネット上にある他人の作品をダウンロードし、それ

らを引用、再構築して、簡単に異なった作品として作り直すことが可能となった。このように情報技術は人間の生活や文化の発展に欠かせないものとなったが、非対面コミュニケーションであるが故に安易に横行するネット上のイジメや他人の作品を作り直す表現技法が著作権を侵害することなど数々の問題が生じている。当分科会では、このような情報技術が人間社会にもたらす功罪について検討し、我々人間がどのように情報技術と向き合い、活用していくべきなのか考察する。

■事前活動

春合宿

初めての顔合わせとなった春合宿では、まずひとりひとりがどんな関心をもって「情報技術と文化」という分科会を選んだのかを話し、個々人が活動にどんな期待を抱いているかを共有した。その上で、「情報技術と文化」というテーマの定義付けを行い、これからの分科会活動の方向性を話し合った。「情報技術」「文化」2つの言葉に分け、改めて情報とはなんなのか、文化とは何か、をお互いの興味分野を基に独自の観点で意見を出し合い、議論することを通して、テーマの背景にある問題や現状等の共通認識を持つことができた。そして同時に、春合宿という短い期間の中でも初対面同士の仲を深められた。とりわけ興味深かったのは、分科会員に理系の学生がいたことにより専門的な目線で定義を見つめ直すことができたという点である。また最終的には、ファイナルフォーラムをどう行うかの意見交換も行われたので、かなり早い段階から当分科会が目指す到達地点を視野に入れながら議論ができたと感じた。

(関口響)

定例ミーティング

定例ミーティングは毎週誰も欠けることなくスムーズに行われた。議題と所要時間を分科会コーディネーターが設定した上で、分科会参加者がタイムキーパー

役と議事録を当番制で担当して議論は行われた。まずは情報史に関する洋書を購入し、チャプターごとに英語で要約した。それら共有する中で「情報」というもののルーツや変遷をお互いの共通理解として認識できた。その後、RT ペーパーの作成に主に取り掛かった。各自の「情報技術と文化」に関連する自分の意見を英語の小論文にまとめ、共有することは、お互いがどんな関心や視点を持って本会議に臨もうとしているのが窺えて大変有意義であった。実際に、米国側参加者と Skype を通してジョイントミーティングを行った際には、事前に両国側の個々の意見が固まっていたが故に、本会議での分科会議論の方向性を見出すことが出来たように思える。結果として、本会議開始後も興味関心の内容をお互いに知っていたからこそ、無駄な時間がなく好調な滑り出しで議論をすることができた。

(関口響)



春合宿にて

第4章 分科会活動

世界ICTサミット

日時：6月10日（月）

場所：日経ホール

2013年6月10日、情報技術の最先端を走る国内外のIT企業の方々のお話を伺うため、日経ホールにて行われた世界ICTサミットを訪れた。クラウドコンピューティングやソーシャルメディア等の新しい情報技術の登場により、ネットワーク上の情報は爆発的に増え続けている。この大量の情報が溢れている今日の社会で、今後人々はどのように情報を共有し、活用して行くかを企業側の目線で学ぶ貴重な機会であった。同時に、スマートフォンの普及によって人々のワークライフバランスが変わったことを例にとるよう、情報技術の発展は企業の経営戦略にとどまらず、国家のあり方、そして個人の生き方にも多大な影響をもたらすと感じた。企業の方々によるお話を通し、「クラウド」や「ビッグデータ」と言った今後の情報技術において重要となるキーワードを得ることで、その後の分科会議論における重要な示唆となった。(伊井佐織)

中村仁彦教授訪問

日時：6月8日（土）

場所：東京大学

私たちは「情報技術と文化」というテーマを扱う上で、「技術」の最先端を研究している方がどのような考えを持って研究を進めているのかを伺うため、東京大

学情報理工学系研究科知能機械情報学専攻の中村仁彦教授の研究室を訪問した。中村研究室では主にヒューマノイドロボットについて研究しており、はじめに研究室のロボットや実験の様子をデモンストラーションで見せていただき、その後「情報技術と文化」について中村教授と議論した。その中で、科学技術と社会の繋がりについて触れたときに、「人類はこれまでに科学技術の進化を吸収して社会を変化させてきた。人類の柔軟さが、科学技術で社会をどう変えるかに注目したい。」という中村教授の考えが印象に残っており、研究者の視点から見た「情報技術と文化」についてのお話を聞いたことは非常に有意義だった。お忙しい中、私たちを研究室に招いてくださった中村教授には改めて感謝の意を表したい。

(鈴木悠司)

直前合宿

直前合宿では、それまでの事前活動で学んだことをまとめ、本会議でどのような方向性で議論を進めていくかを定めることに集中した。防衛大、ICTサミット、中村研究室という3つのフィールドトリップのまとめや、日米両側の参加者のRTペーパーの内容を整理し、これまでの進捗状況や今後の方針を他の分科会に共有するためのプレゼンを用意した。これにより自分たちがこれまで取り組んだことを振り返り、本会議に向けて士気を

高めることが出来た。本会議での議論の方針については分科会内でも最後まで意見がまとまらず、意見の食い違いも生じたが、本会議に入る前に各メンバーがどのように分科会を進めていきたいかということを中心に話し合う機会が設けられて、本会議を迎える心の準備がしっかりと整えられたと思う。（鈴木悠司）

■本会議中の活動

第1サイト京都及び第2サイト長崎

5月の春合宿から始動した「情報技術と文化」分科会は、京都サイト一日目の8月2日に、初めて10人全員が顔合わせをした。まずは、日本側とアメリカ側参加者がそれぞれ事前活動で学んだことをお互いにシェアするところから始まった。そして本会議を通してどのような目標を持ち、議論を進めて行くかについて話し合った。最終的に、「日米学生会議だからこそ出来る議論を大事にしたい」というメンバーの共通の想いから、第2サイトが終わるまでは自分達が話したいトピックを持ち寄り、フリーディスカッションを行うという結論に至った。トピックとしては、「情報技術の教育への影響」、「情報技術が人間の健康を支える近未来」、「SNSによるコミュニケーションの変容」など、様々なことについて議論した。第2サイトの長崎では、被爆者の方から体験談を伺ったことで、「情報技術の平和への貢献について話したい」という声が

挙った。例えば、今後年数を重ねて行くにつれ、実際に原爆を体験した方々の生の声を聞くことが難しくなってくる現状において、後世に伝えていく手段として情報技術が果たす役割について、お互いの意見を出し合った。各サイトで日々学び、感じたことを分科会に活かすことが出来たため、非常に有意義な議論であった。（伊井佐織）

第3サイト岩手及び第4サイト東京

第3-4サイトの岩手と東京では、ファイナルフォーラムに向けての準備活動が主だった。振り返ると、第三サイトが一番RTのチーム力が問われたサイトだったと思う。なぜなら、当初の予定では、岩手でファイナルフォーラムのプレゼンテーションのスライドを作り終える予定であったが、メンバー全員の意見も揃わず、テーマも決まらない状態でRTの雰囲気も良くなかったからだ。しかし、京都と長崎で行ってきたフリーディスカッションをまとめていく中で、理解が深まり、福島でテーマを決めることが出来た。東京サイトでは、ファイナルフォーラムに向けての最終準備が主な活動となり、テーマに沿ってスライドと台本を作った。そしてファイナルフォーラムを行い、残りの2日間は限られた時間の中で多くの事を語りあい、沢山の思い出を作ることが出来た。そして最終日には、全てのサイトでのRT活動を思い返し、心の底か

第4章 分科会活動

ら CTRT のメンバーの一員になれたことを誇りに思った。(三科圭介)

ファイナルフォーラム

3 週間に渡る本会議の、いや、5 月からの 4 ヶ月に渡る第 65 回 JASC の集大成とも言えるファイナルフォーラム。「情報技術と文化」分科会は 7 つの分科会の中で最後の発表順であった。私たちの分科会では、本会議が始まった当初からこの日を見据えてどのように分科会活動を進めていくかを意識していた。それによって様々な対立や意見の食い違いも生じ、すべてが順風満帆だったわけではない。しかし、ファイナルフォーラム当日には各々がこの JASC を通して学んだことを振り返り、それを自分たちの言葉で伝えるということに向かって力を合わせていると実感できた。ファイナルフォーラムのプレゼンテーションでは、今振り返ってみても反省点はたくさんあり、100 点満点のものでは決してなかっただろう。だが当日の発表の出来以上に、それに向かって分科会の 10 人で JASC に取り組めたことをとても光栄に思う。(鈴木悠司)

本会議総括

本会議で学んだ事は、大きく分けて二つある。一つ目はアメリカ側と日本側の議論の形式が違うことである。分科会のミーティングに於いて議論を交わすのに上手く進まないことが多々あり、その原

因は議論形式の違いであった。日本側は、最終フォーラムに合わせて計画を決めて議論を構成立てて進めようとしていた。それに対しアメリカ側は、フリーディスカッションで議論を進める事を好んでいた。フリーディスカッションになれていない私は最初戸惑ったが、計画を立てないことによりストレスフリーの環境で議論することが出来た。また構成立てて議論するよりもはるかに進み具合が良かった。その一方で、フリーディスカッションをどのように利用し、コントロールすべきかを考えさせられた。最終的には日本の計画的な議論形式とアメリカのフリーディスカッションを使いお互いの良さを活かしながら議論を進めることが可能になった。このように議論形式が異なることを知り、それをどのように扱っていくべきかを学べたことは、これから私達がグローバルな人材になる上でとても大切なことだと思う。二つ目は、議論の内容である情報技術について述べる。議論を通して一番感じたことは、情報技術の差である。議論する中で情報技術においてアメリカが日本より進んでいる再確認できた。その例として、日本の「SNS によるいじめ」の問題を議論しあった際に、アメリカ側ではこのようなことは数年前に問題として取り上げられていたと言っていた。このことを考えると現在、日本はアメリカと同じ道筋を辿ろうとしている様に思える。つまり、二の舞にならない

い様にアメリカから多くの情報をもらい予防策を考えるべきである。このように議論を通して日本における情報技術に関する問題の解決策を考えることが出来た。このような素晴らしい機会を与えて頂いたことに感謝したい。(三科圭介)

■分科会感想

情報技術と文化。日米学生会議が始まるまでは真剣に考えたことが正直言ってなかったこのテーマに、四ヶ月間真正面から向き合った。マイノリティと差別や環境問題など、問題意識が明確なものが大半を占める当会議分科会の中で、我々が扱った「情報技術とそれが文化にもたらす影響」という議題は、極めて異質な存在であったと感じる。異質であったからこそ感じた難しさがあったが、同時にやりがいもあった。

TwitterやFacebook等のSNSのように、今や私達の生活に根付いている情報技術は数多く存在する。そんな中、スマートフォンを弄る手を一旦休め、自分の掌に乗っているその小さな機械が自分にとってどのような価値を持ち、将来どのような役割を担って行くかを改めて考え直す、それこそが当分科会の意義だったのではないだろうか。

春合宿当初はまだ浅かった知識が、フィールドトリップや毎週行われたSkypeミーティングを通して厚みを増し、各々の興味関心も定まって来た。そして本会

議に突入し、アメデリが加わったことで議論の雰囲気はまたガラリと変わった。日本側とアメリカ側の議論の進め方の違いから、本会議の初めは戸惑う場面もあったが、互いに正直でオープンな関係で入れたからこそ乗り越えられた。本会議中に最も印象的であったのは、各々が議論したいテーマを持ち寄って行ったフリーディスカッションである。iPadを用いた教育から介護ロボットまで、とにかく自由に議論をし続けたあの時間が、素直に心から楽しかった。社会にまだ属していないまっさらな学生だからこそ素直に思ったことを発し、時には意見をぶつからせ、時には共鳴し、多様な価値観に触れる。これこそがJASCの真髄であると感じた。

私は、人前で自分の意見を伝えることを敬遠してしまいがちであるため、スピーディーな議論の中で上手く意思表示が出来ないこともあった。第三サイトの岩手で議論が一時スランプに陥った時も、解決策を見出すことができない自分に苛立つばかりで、分科会に貢献しきることが出来なかった。そんな息詰まった状況でも、目の前の問題から逃げずに、ひたむきに前に進もうとする仲間の姿を見て、感銘を受けた同時に自分の未熟さを痛感した。「自分は果たして分科会に貢献出来ているのか」と、自信を喪失しかけそうにもなった。しかし、そんな中で私が書いた事前レポートにメンバーが興味を示

第4章 分科会活動

してくれて、議論に活用出来たのが自分にとって大きな成果であった。ビッグデータに対する興味から様々な文献を漁り、沖縄自主研修から帰って来た日から三日間図書館に籠った甲斐があった。

唯一の理系ならではの新しい視点で議論を盛り上げていたゆうじ。その穏やかな人柄と愛嬌のある日本語で RT に笑顔をもたらしてくれた Drew。誰よりも他人を見て、思いやっていた K。Final Forum のために最高のプレゼンを徹夜で作りに上げてくれた Quyen。文化への愛が人一番強く、面白いアイデアの宝庫のサム。一见クールに見せて誰よりも熱いハートを持つ Ken。ひまわりのように明るく、書記として議論をリードしてくれた Kelly。そして最高の RT リーダーの二人。時には優しく、時には厳しくアドバイスをくれた CTRT の母、のぶこ。そして最後に、彼が RT リーダーであったからこそ私はこの RT が大好きになれた、我らがミン。一人一人の個性、魅力、そして才能があったからこそ私も身を引き締め、頑張ろうと思うことが出来た。この場を借りて、本当にありがとう！

この分科会活動を通して、知識面のみならず人として少しは成長できたのではないかと思う。回帰分析をして統計の数値ばかりを追う学生生活の中で忘れかけていた「人対人」の素晴らしさ、そして大切さを、改めて感じる事が出来た。

(伊井佐織)

5月の春合宿で第65回のJASCが始動してから8月の本会議まで、JASCを通して様々なことを学んだが、その中でも一番多くの時間を過ごし、一番多くのことを学んだのは分科会の活動である。

「情報技術と文化」という、広大な範囲に及び、捉えどころのないテーマには最初から最後まで苦戦し続けたが、それでも日本側・アメリカ側参加者とこのテーマについて議論することは非常に楽しかった。

分科会活動でのディスカッションを通して得たものはたくさんあるが、自分の考えを言葉にして、相手にわかりやすく伝えるという姿勢が身についたということは非常に大きい。「情報」や「文化」の定義付けから始まり、情報技術は文化にどのような影響を与えていくかといった内容を議論する際にも、自分の意見をうまく表現できずにもがいている中で、他の参加者から発せられる考えに大きな刺激を受けることもあった。また、ディスカッションの進め方を巡っても意見が対立し、思い通りに進まずに苛立つこともあった。しかしそれらすべての活動において、「自分はどう思うか」という考えを述べる機会が十分に与えられ、そのたびに自分の考えをたどたどしいながらも言葉にしようとする過程を経て、会議の終盤には自分の本心をきちんと言葉にして伝えられるようになっている自分がいることに気がついた。

今後も関係を絶やさずになりたいと思える友達を分科会内で得られたことを非常に光栄に思う。(鈴木悠司)

「情報技術と文化」という分科会での四ヶ月に及ぶ活動は私自身に多くの学びを与え、考え方や価値観に影響をもたらした。主に挙げられるのは議論の仕方である。英語スピーチの経験があった私は、個人活動として意見を論理的に構成し主張することにあまり障害はなかったのだが、他者と双方向に意見交換が行われるディスカッションでは、自分の意見を妥協しつつも主張することが時に求められたり、斬新な他者の考えを興味深く受け入れたりすることが多々あったのは初めての経験で非常に新鮮だった。そして、本会議前の日本語での議論を通して、ディスカッションの基礎をある程度養った上で臨んだ、本会議でのアメリカ人学生との議論ではまた新たな刺激や葛藤が生じた。まず言語の壁が立ち塞がり、日本語で思うように言えたことが言えなくなる場合や、初めて味わう聞き取れない程度のネイティブスピードの英語に始めの頃は戸惑いを隠せなかった。しかし、アメリカ側の学生と議論以外の時間で親睦を深めるうちに、言語的な障害は彼らが日本側に合わせ始めるようになり、議論の流れに付いていけない様子を察して手助けしてくれるようになった。こうして次第に問題は解消されていき、いつしかデ

ィスカッションの雰囲気は和やかなものになり、その時間は両者にとって待ち遠しいものとなった。加えて、私はアメリカ人流の議論の仕方や、彼ら独自の価値観を意見交換の中で学ぶことができた。こうして、分科会での「議論」を通して培った能力や経験は、いずれの言語にせよ、これから私が他者と意見交換をなす際に大きく役立つことだろう。(関口響)

分科会を通して学んだ事は、「異文化対応能力」である。本会議が始まる前まで、日本側のみでの議論は比較的上手く進んでいた。しかし、本会議が始まり議論が上手く進まない日が多くあった。その大きな原因は米国の国民性や文化を知らないことであった。日本人と接するようにアメリカ人と接していてもアメリカ人の良さを引き出すことが出来なかった。ここでは、アメリカ人を深く理解することが求められていた。例えば、議論の中で何かを決める際にアメリカ側はリスクを恐れずに決断するため判断がとても早い。それに比べて日本側はリスクを考えるために判断がとても遅い。実際にこのようなケースを体験した。議論中にある提案をした際に、リスクを考えずに判断したため判断は早かったが、その提案は後に取り消しとなった。従って、日本の「リスクを考える」とアメリカの「判断の早さ」とのお互いの良い点を効率的に扱うことが必要である。またこのような考え

第4章 分科会活動

方の両方を持つことが出来れば、どの国でも通用する「グローバルな人材」になれるのだと思う。このように分科会を通して「異文化対応能力」の重要性を学ぶことが出来た。このような素晴らしい機会に感謝したい。(三科圭介)

■分科会総括

「情報技術」と「文化」、その後ろには幅広い意味を持つこの二つの言葉は、その言葉の意味以上に私達に多くの事を教えてくれた。インターネット、SNSやビッグデータなどといった情報技術の急激な発展に伴う、人間文化に新しく生まれて来る様々な問題について話し合い、技術と文化のあるべき関係を見いだすことを目標にし、「情報技術と文化」RTは分科会活動に臨んだ。「情報技術と共に育ってきた」とも言える私達の世代が、情報技術が人間に与える価値を見直すことは不安に感じさせると同時に、とても興味深いものでもあった。

分科会をコーディネートしていくなかで、「今ここで話しているこの話がどういった意味を持っているのか？」という質問を常に意識し、RTメンバーのディスカッションを聴いていた。情報技術によって生じる多くの問題については話したが、もちろんここで話したって社会はそう簡単には変わらないと感じていた。しかし、「何かを変える」ことではなく、「何かを変えなくてはならない」という「気

づき」、そしてそれを「見直す」ことこそがこの議論の本当の意味なのではないかと、ファイナルフォーラムを直前にこの分科会活動の価値に気づいた。第一開催地の最初のRTタイムから気づいた：ベストのRTメンバーを持った。RTパートナーのNobukoも同感だった。

議論をいつもリードしてくれる積極的なKellyと独特なセンスを持つQuyen。議論の根本的なポイントから必ず話し合いの方向性をずらせさせないけい。議論の反論役をしてくれるKen。新しいアイデアを次々と出してくれるDrew。議論を整理、中和してくれるサム。皆が常に同じラインにいることを確かめてくれるゆうじ。日本側参加者とアメリカ側参加者の意見を繋いでくれるさおり。そして分科会の議論の進捗状況を鋭く見極めるRTパートナーのNobuko。

ベストのRTメンバーを持ったという確信は最後までかわらなかった。皆からも沢山学ぶことがあった。

このメンバーで活動できたことを心から感謝している。

最後になりましたが、分科会フィールドトリップを快く受け入れて下さった皆様、ご協力して下さったアラムナイの皆様、第64回の実行委員のみなさん、1年間に渡り多大なるご支援とご協力を下さった全ての皆様に心から感謝を申し上げます。

第65回の参加者の皆、共に第65回を

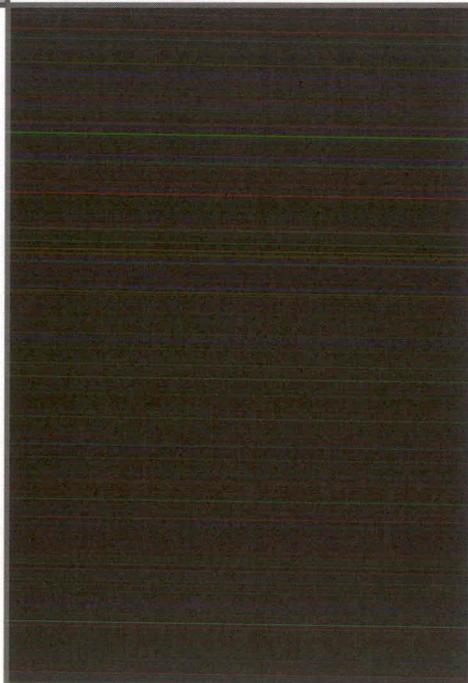
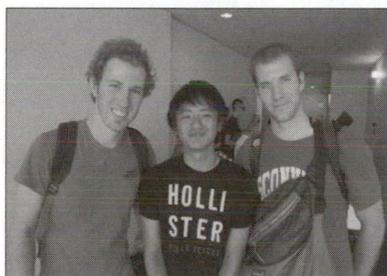
企画してくれた実行委員、有難う。そしてこれからも宜しく。

(ヴァーホアンミン)



第5章

参加者の声



荒木 尊士

私が日米学生会議で得たのは、日本の将来に対する漠然とした「不安」と、国際人としての日本人のベンチマークである。私は留学や日本国外に住んだ経験がなく、日米学生会議が初めての、同世代の外国の学生と生活し、議論する機会だった。日米学生会議を終えて、漠然とした「不安」を覚えた。この不安は私個人に対する不安というより、日本の将来に対する不安である。隣の芝は青いと感じただけかもしれないが、米国人学生は陽気で、表現が上手で、歴史にも通じていたように思う。日本は今後、国内の課題が深刻化し、外国との競争が激化するだろう。その際に、現状の日本で戦えるか不安を感じた。日本の学生は、競争している相手を知り、日本の歴史・文化や、表現方法を貪欲に学ぶべきだ。また、日米学生会議では、将来、国外で活躍するであろう同世代の日本人学生、国外で活躍しているアラムナイと出会い、国際人としての日本人のベンチマークを得た。普段、外国で働く日本人と接する機会が少ない私には、彼らの視野が広く、前向きに努力する姿は大きな刺激となった。

生まれも育ちも全く異なる参加者と共同生活を送り、英語で議論を行ったことを通じ、言葉や国籍は個人の「相互理解」をする上で大きな問題ではないことがわかり、私の人生の大きな糧となった。また、一生付き合っていきたいと思える多

くの仲間を得た。大学では学ぶことの出来ない多くのことを学ぶ機会を設けて頂き、日米学生会議に関わった全ての方々に御礼申し上げます。

伊井 佐織

本会議を終えてから早くも一週間が経過し、やっと日常の生活を取り戻した今、改めて私にとって JASC は何だったのかを考える。一般化して活字にすることは難しいが、強いて言うなれば、自分自身と向き合い、かけがえのない仲間と出会えた場所であった。

近年「グローバル化」、「国際理解」と口を揃えて唱えられているが、使い古されているあまりその本質が見えにくくなっている現実がある。しかし、その全ての礎に自己理解があると私は考える。自国の理解なくして他国を理解することは不可能である。本会議を通して京都、長崎、岩手、東京を米国の学生と回ることで、自国を新たな視点で見つめ直すことができた。そして同時に、自分の国に対する理解の浅さを痛感した。長崎で被爆者の体験談を直接聞き、岩手のホームステイで現地の人々の温かさに触れることで感じられる思いは、教科書の活字だけでは決して得ることが出来ない。「人」対「人」のコミュニケーションが相互理解において如何に重要な役割を果たすかを実感した。

また、この一ヶ月は自分自身と真摯に

向き合う機会にもなった。知的好奇心と才能に満ちあふれ、尚かつ向上心を忘れない JASCer の中で自信を失い、自分の役割を見出せずに苦しんだ時期もあった。人前に出て話すことを最も苦手とするが故に、JASC で与えられたチャンスを最大限活かせなかったことが悔いは残る。しかし、成長するための課題をこの会議で見つけることが出来ただけでも自分にとって大きな前進であると思う。そして、そんな私に声をかけてくれた仲間は何度も救われ、その度に JASC の魅力を痛感した。

この経験が自分にとって Life-Changing Experience であったかは、はっきり言ってまだ分からない。しかし、一つ断言できることは、この四ヶ月間を通して悩み尽くして考えたこと、普段は出来ないような素晴らしい経験の数々、そして大切な仲間と過ごしたかけがえない時間、全てが今の自分を作り、そしてこれから先も自分の糧となっていくであろう。この会議を通して得た経験を、活かすも殺すも今日からの私達の行動に委ねられている。将来この経験が Life-Changing Experience であったと胸を張って言えるよう、日々精進する次第である。

飯島 千咲

多くの方々に支えられ、自分の未熟さを感じながら EC として過ごしたこの1

年間、失敗や反省は数え切れないが、結局、完璧ではないことにはそれ固有の美しさがあるのだと、過去を単に美化しているわけではなく、心からそう思える。

長崎サイト担当として、それまで行ったことのなかった土地で初めて出会う人々と、まささらだったページから何かを創り上げるという過程において、自分ができたことはほんの僅かであったように感じる。それでも点と点が繋がっていくように、JASC に関心をもって協力して下さる方が増えていき、できなそうだったことができるようになり、ひとつひとつ創り上げていく実感を持ちながら企画に取り組めたことは、快感の一言だった。

日米安全保障に関する RT のリーダーとしては、デリ自身が悩み、考え、自らで解決して RT を創り上げて行って欲しいという想いを芯に活動した。しかしながら本会議中は、自分で据えた哲学の恣意性によってデリを苦しめてしまったり、難しい立場に置いてしまい自分も辛い思いをしたりと、去年デリとして参加した JASC では経験しなかった困難や壁にぶつかることが多かった。それでも一緒に4ヵ月もの間、懸命に活動してくれた RT のメンバーには、感謝と愛の気持ちで一杯である。

また、この1年間誰よりも長い時間を共に過ごし、様々な苦労や喜びを分かち合った JEC の皆には感謝してもしきれない。7人それぞれから学んだことは数え

切れず、自分に欠けているところや足りないところがたくさん見えた。心から、ありがとう。7人それぞれの将来が本当に楽しみで、どんな道を歩んでも、どんな形であれ、そこに JASC での経験が、EC としての経験が活かしているといいなあと心から思う。そしてこれは、自分自身を含めた全ての JASCer、そして JASC に携わって下さった多くの方々に望むことでもある。

今後もずっと大切にしたいと強く思える多くの人たちと出会えたこと、JASCer であることによって、これからもこう思える人たちがきっと増え続けるであろうこの可能性に、わくわくできる幸せを噛みしめている。JASC を通して、特に実行委員として得た経験や学んだことは、少しずつ形を変えながら、ゆっくりと自分の中へと溶け込んで、この先また新たなことを始める際の糧となっていくだろう。

最後になりますが、第 65 回日米学生会議の実現と成功にご尽力頂いた全ての方に、この場を借りて心からの感謝を申し上げ、参加者の声と致します。



市毛 裕史

この2年間、常に問い続けた事は「日米学生会議とは何なのか。」であった。Life changing experience といわれるが、はっきりいって一ヶ月の議論で世界は変えられないし、自分自身さえ変えることも稀だろう。世界はそんなに簡単に良くなるし、自分は相変わらず自分にしかなることができない。しかし、JASC の不思議な一ヶ月は、世界を、自分を変えるきっかけ、つまり種を捲いてくれたように思える。そう、友情という名の種である。そしてこの種はどんなに小さくとも、将来いつの日か、世界の平和という陳腐かもしれないが目指すべき崇高な精神の実現に向けて実を結び、綺麗な花を開かせると、今確信している。「日米学生会議とは何なのか。」という問いはこの日米学生会議が今後永遠に会を重ねていくに従って、次世代の JASCer たちに受け継がれ続ける問いなのかもしれないし、常に悩み問うて行って欲しいと切に願う。

この一年 JASC が人生の中心だったが、本当に出来の悪い実行委員だったと深く反省するばかりである。こんなにも多くの方にご迷惑をおかけし、こんなにも多くの方と語り合い、こんなにも多くの方と笑い合った一年はなく、会議が終わった今この一年はととても貴重で幸せな期間であったとしみじみと感じている。深夜に及ぶ会議、度重なる交渉、そして米国のトップ学生と共に会議を形作る刺激的

な毎日。多くの犠牲を払い、たくさんのもを失ったが、この伝統ある会議の開催に携われた事は自分にとって生涯誇りになるであろう。

最後になりますが、一年半 JASC に没頭する自分を支えてくれた家族、心から信頼できる存在になってくれた JASCer のみんな、お忙しいのにも関わらず惜しみないお力添えをいただいた Alumni の皆様、共に会議を成し遂げた実行委員のみんな、会議の開催を可能にしてくださった全ての皆様、そしてこの報告書を手にとり読んでくださっている全ての皆様に心からの感謝を申し上げ、報告書の結びとします。本当にありがとうございます。

伊藤孝真

涙と感情は比例している。感情がある一定の量を超え、自分の中で留めきれなくなると、それは涙となって自分の外へと流れ出る。日米学生会議がどんな会議であったかを伝える最も簡潔で明瞭な方法は、自分自身の涙の記録を辿っていくことではないか、と私は考える。

一度目は、本会議前日の直前合宿の時。誰よりもグループ全体のことを考え、それを行動に移している仲間の、悩み、頭を抱え込む姿に涙した。これだけ真剣に参加者全体のことを考えてくれている彼の存在に、自分自身もこのままではいけないと、本会議直前にあらためて気を引

き締められた。

二度目は、春合宿からずっと一緒に JASC のことを考え、将来の目標や夢を共有してきた仲間との別れ。彼は会議初日から体調が優れず、それでも良くなることを願い行動を共にしていたが、会議半ばで入院することに。どんな場面でも境遇を共にしてきた仲間との別れは本当に辛い。

三度目は、アメリカ側参加者との理解の不一致により、お互いが掴み合い夜中に本気で喧嘩をしたとき。最後にお互いが言い合った「I trust you」の言葉に二人とも涙してしまった。

四度目は、3週間に渡る分科会活動の成果をみなさんに発表するファイナルフォーラムにて。全てを含めた自分自身の不甲斐なさ、そして悔しさに涙してしまった。

最後の五度目は、アメリカ参加者との別れ。物語のエンドはハッピーエンドと決めている私は、絶対泣かないつもりで歯を食いしばっていたが、結局アメリカ参加者を乗せたバスが視界から消えるころには、涙は止まらなくなっていた。

こんなにも自分の中から感情が溢れだし、自分自身がわからず、混乱してしまう経験は JASC が初めてだった。

これからこの経験を少しずつでも消化し、次に活かしていけたら、というのが今の私の率直な感想だ。



上江洲 仁美

感動。私の JASC での体験を一言で表すならこの言葉に尽きると思う。春合宿で初めて 65 回の日本メンバー全員と顔合わせをしたとき、本会議でアメリカ側の参加者全員と出会えたとき、私は感動した。あり得ないくらい論理的で、真面目で、努力家な人々。半端ない人々との出会いに感動した。どういう風に考えたらそんな論理を立てられるのだろうか、一体どういう思考回路になっているのだろうか、といつも感心半分不思議半分だった。今までなんとなく感覚で生きてきた私にとっては、全く初めての世界を見た気がした。

そして私が真っ先に伝えたいのは、感謝である。くさいかもしれないが、最近私の心に溢れて止まりそうもないので、是非伝えたいと思う。まず多くの支援者の方々、人生で二度とない貴重な夏をありがとうございました。そして両親、いつもの温かい応援と愛、また決して安いとは言えない参加費用をありがとう。近い内に必ずお金にかえられない価値を出して返します。また JASC 参加者全員、

私と出会ってくれて本当にありがとう。私と喋ってくれてありがとう。まだまだな私だけど、近い内にきっと皆に追いついて、皆と肩を並べて歩けるように精進します。最後に私の体、歩ける動ける、こんなに素晴らしいことはないです。手さん足さん、ありがとう。

日米学生会議は私に足りないところが全てそろっていたところであった。私に一番似合わない会議で、途中で逃げ出してしまうのではないかと思った。自分を表現すること、声があること、自分の意見を言うことの大切さを学び、何より、自分が何も知らないのだということを知ることが出来た。

これまで築いてきた自信や自負が見事に砕かれ粉々になって、私の心の中は今殺風景だけど、なんだか清々しくてフレッシュな気分だ。逆に視野が拓けて、自由にどこにでも行けそうな感じ。私は新たなスタートラインに立ち、世界を踏ん張って生きていく。濃厚で贅沢で、人生で一度きりの眩しい夏をありがとうございました。

ザー ホアン ミン

日米学生会議に参加するのは今回で 2 回目だった。デリとして参加した第 64 回日米学生会議と、今回 EC として参加した第 65 回日米学生会議の経験は全く異なったものだった。「楽しかった日米学生会議をここで終わらせたくない」という単

純な気持ちで挑戦することを決めた実行委員の仕事がここまで貴重な経験になるとは、当時想像もつかないものだった。この報告書の感想文を作成するあたり、去年の報告書の自分の感想文を読み直した。そこで気づいたのは、去年のデリの自分と比べて、今の EC の自分がどれだけ成長して来たことだった。そして日米学生会議に対する理解に関しても同じことが言える。デリの頃、JASC の 1 割を見られたとすると、実行委員になってからもう 4 割ほど見られた気がする。

とは言うものの、第 64 回も第 65 回も本会議、そしてその準備期間の時間を充実に過ごせたが、両方満足して終える事はなかった。不満が残ったからこそ日米学生会議に参加する意味があるのではないかと、この 1 年半を通して学んだ。満足して望み通りに完結してしまうよりも、課題を残し、人生の次のステップに繋いでいけた方が、やり甲斐があるからだ。

「JASC が終わってからその甘みと苦みが効いて来る」というのはこの事なのかも知れない。本会議が終わってから間もない今は、表面に見えるインパクトしか実感できない。しかし、その裏側にある JASC の本当の意味、残りの 5 割は、これから人生を過ごしていくにつれ、時間と共にどんどん見えて来るものなのかも知れない。

「奇麗に終わらないから、奇麗である」
一年間最も共に時間を過ごした実行員

のまあやから聞いたこの言葉を忘れる事はない。

これからこの 71 人がお互いの人生にどう関わっていくのか観るのが楽しみだ。

大西 由起

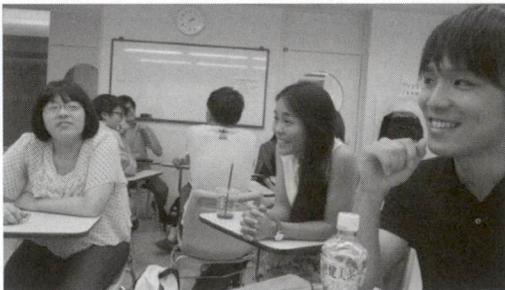
「日本を知りたいければ、外から日本を見てみる。」これは小泉進次郎さんが東京サイトでの講演でお話された言葉である。つまり、日本をより深く知るためには、海外経験を通して日本の素晴らしい所や逆に日本に足りない所を発見することができるのだという、彼のこの言葉が印象に残っている。もちろん、日本国内にいただけでは日本の良さや問題に気付かないこともある。しかし、この日米学生会議は日本にいなながらも、海外で経験したようなものを与えてくれた。私は伝統ある学生会議の日本開催に参加でき、大変幸せに思う。本会議を通して、私は大きく 2 つのものを得られたと感じている。一つは、「日本人としての誇り」、もう一つは、「一生の仲間」である。

本会議に参加する動機として、日本の素晴らしさをアメリカ人学生にも伝えたい、また自分自身もまだ知らない日本を発見したいという思いがあった。4 つのサイトの中で、大学のある京都は私のホームであった。一方で長崎と岩手には訪れたこともなく、東京も遠い存在であった。それぞれのサイトで多くの貴重な経験をし、いろんな人に出会い、JASC が終

わってみると、どのサイトも私のホームのように思える。また、長崎で原爆や平和について、岩手では震災について、普段の生活では中々向き合わない問題について知り、考えることができた。

そして、JASCで最も大きかったものは71名の大切な仲間に出会えたことである。ただ共に過ごすだけではなく、大学では中々語る事はない日米が抱える社会問題について真剣に議論し合ったり、将来について夜遅くまで語り合ったりした経験はどれも私にとって大切な思い出である。この関係をただ夏の思い出だけでなく、これから先も長く付き合っていける仲でありたい。

最後にこの会議を支えてくださった実行委員を始め、多くの方々のサポートに感謝したい。ここで得たものを、自分の将来に活かし、社会に還元していきたい。



大沼 雄貴

Life Changing Experience、日米学生会議での経験を一言で表すとこれ以上の言葉はないだろう。日米の大学生が1カ月かけて議論と活動、共同生活を通じて協力し、時には衝突しながら相互理解を

深めていく日々は、普段の学生生活では手に入れることのできない特別な時間だった。本会議が終わってまださほど時間がたつてはいないが、すでに参加者と一緒の時間を過ごせないことに寂しさを感じ始めている。私が本会議中、最も記憶に残っているのはアメリカ側学生に京都、長崎や東京の都市よりも、広大な自然や心の優しい東北、岩手の人との交流を楽しんでいる人が多かった事である。盛岡フォーラムで行った‘岩手をより魅力的にするには何が必要か?’といったテーマの議論ではアメリカ側学生が、どうしても岩手を発展させ、地域を盛り上げることができるかを真剣に考えている姿を見て、国家の枠を超えて社会問題に対して考えることが必ず日米両国の発展につながると強く思った。また多くの人が岩手を去るときに言っていた、「必ずまた岩手に戻ってくる。」という言葉聞いて、日本人として非常に嬉しかったことも強く記憶に残っている。アメリカ人と様々な場所に訪れ、真摯な議論を現地で行えたこと、岩手のような地方の持つ特有の問題に対して学生として提案を通じて、日米学生会議の参加者の一員として支援してくださった方に一つでもお返しできていたらうれしく思う。日米学生会議での日々が終わっても、1カ月間の活動と議論を通じて得た友人との絆はこれからも続いていくだろう。この1カ月間で得た経験、友情、相互理解を自分の未来の

ため、日米関係のために使えるようこれからも努力していきたいと思う。

大野 峻典

「8月9日」、僕は長崎原爆資料館に行った。

原爆は恐ろしい、悪である。こんなに残酷な事は二度と起きてはいけない。みんなでも平和を願おう。

そんなメッセージングを文字通りには受け取れなかった。もちろん、原爆の恐ろしさは凄く良く伝わってくる。しかし、一方で、原爆の恐ろしさを伝える事のみが、今後同様な歴史を繰り返さず平和な世界を実現するのに十分だとは思えなかった。

歴史を「全て」正確に伝えているわけではないかもしれない、と思った。日本だけではない。もしそれぞれの国が自国の都合のいいように、“被害”を誇張し、“加害”を正統化もしくはそこに焦点を当てていないかもしれない。

原爆に関して、日本は強く、その“被害”を主張している。歴史を繰り返してはならない！この事件を忘れてはいけない！と。だが、一方、その“加害者”アメリカへ、それはどれほど伝わっているのだろうか。

僕ら日本人が、このようなケースを“加害者”の立場にたって考えるのにいい例がある。中国、南京にある、南京大虐殺資料館。そこでは、当時、南京の一般市民に対し“非道徳的”な虐殺を日本が“加

害者”として行っていたか、様々な証拠と証言とともに語られているという。このような恐ろしい残虐はもう二度と起きてはいけない。平和を願おう。といったメッセージングを感じるという。

それが、原爆資料館と酷似していると感じ、僕は少しぞっとした。

果たして、ここで“加害者”である日本で、それはどれだけ伝わってきているだろうか。

毎年僕ら日本人は、原爆投下の日に黙祷を捧げ、それを、自分らの“被害”を忘れまいとする様々な取り組みを行う。

しかし、自分たちが、“加害者”になるケースについてはそうではない。忘れてしまっているかもしれない。

きっと、そんな国の教育は正しく歴史を認識し、過ちを繰り返さないために十分ではない。一つの国から見た、一つの視点では、足りない。

原爆は恐ろしい、悪である。強烈なメッセージング。以前、高校の修学旅行でここを訪れた時には、そのメッセージを素直に受け取った。

だが、今回の見学では、そのときと同じように素直にそのメッセージを飲み込むことはできなかった。今回は、当時とは違い、アメリカからの参加者の友人と一緒に回っていた。

JASCでは、自分の目が2つから4つ

になるような感じがする。全く違う視点を持つ、アメリカ側参加者の存在。率直にお互いをぶつけ合える環境。互いの信頼関係。

本当に平和の実現を考えるにあたって、視点を増やし歴史を捉えることが、今世界中で必要とされているのでは無いだろうか。

日米学生会議は、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年に発した。

今もなお、その理念を達成し続けている。

大日方 望

JASC は自分にとって、大きな一夏となった。言葉で言い表すことが難しいが、JASC で経験したこと、出会った人びと、交わした議論、考え感じたこと、それらの全てが、三週間という短すぎるほどの時間に凝縮されていた。一番印象に残っている出来事として、自分が、福島県の下宿先でのリフレクションの時に、原爆に対する自分の感情を吐露し、原爆についての議論が JASC 内であまりなされていないことへのいらだちを表明した時のことだった。自分の言葉に、人が傷つき、ショックを受け、また議論の種となったことに、自分は負担を感じた。しかし、その後できるだけ多くの人と会話することによって、自分を理解してもらい、また相手を理解する、という凝縮された

時間を過ごすことができた。個人は個人に敬意を表するとき、それは相手に惜しみなく自分の意見をぶつけることであるということに尽きると感じた。相手が、自分に意見を、批判を、惜しみなくぶつけてきてくれた時、初めて自分はこの会議に参加した意味を見出した。自分にとってアメリカは、国家か、オバマか、議員か、メディアか、ホワイトハウスだったが、この会議を経て、それに生の個人と、個人と、個人とが加わった。それは、日系人であり、アフリカ系、ヨーロッパからの移民であり、台湾、ベトナム、中国にルーツをもつ、アメリカのなかに生きる多様な人びとであった。この体験を通して、アメリカというものの広がりや視点、また自分の身の回りや社会を再考させる材料をいただいたと思う。日米学生会議。そこで何を体験するかは、自分の行動、自分の関わり方によるのだと、会議の終盤で気づくことができたのは大きな収穫であった。これまで JASC に自分が期待したこと、それはこれから JASC が自分に何を期待するのかという問いへと変わっていくように思う。今年の JASC との、そしてこの JASC での出会いに感謝したい。



兼子 莉李那

第65回日米学生会議は私にとって文字通り Life Changing Experience だった。三週間の本会議中に限らず、春合宿で日本側参加者と出会ってからの四ヶ月間の出来事全てが、私にとって人生を変える経験だった。学生同士が特定のテーマについて長い時間をかけて本気で議論を行うことは、普段の大学生活では経験出来ない事であり、本気の人間関係を通して、お互いを尊重し尊敬し、友情も深まるのだということ、春合宿からの三ヶ月間と本会議の三週間で身を持って体験した。

本会議中は、障害者としての自分の経験が分科会テーマのマイノリティと差別に密接していたことから、時に感情が入

り過ぎたこともあったが、分科会のメンバーの暖かい人柄に支えられ、普段は明かさな自分の心情を語ることも出来、私が本会議での目標としていた「マイノリティの立場だから言えること」を伝えることも出来たと、達成感を感じている。

分科会に限らず、日米学生会議の日程全てのコンテンツが貴重な経験だった。様々な企業・機関への訪問、日米両国の政治家の方の講演、レセプションでの様々な人々との出会い、そして長崎での原爆学習、岩手での震災学習・ホームステイ等、日米学生会議でなければ得ることの出来ない経験を沢山することが出来、自分の視野を広げることが出来た。

この日米学生会議の中で私にとって最も Life Changing Experience となったのは、日米の大学生と接するうちに、自らの持つ可能性を自覚し、将来について自信を持って前向きに考えられるようになったことではないかと思う。

そしてその自信から、第66回会議の実行委員に立候補し、当選することが出来た。今後は私を選んでくれた他の参加者からの期待に応えられるよう、未来の参加者たちに私が得たような素晴らしい経験を提供できるよう、第66回会議の成功に向けて、実行委員としての自覚を持ち、精進したいと思う。

川口 真

“Life changing experience” ---- JASCはこうよばれる。が、今のところ自

第5章 参加者の声

分の何が変わって何が変わってないのかまだよくわからない。

僕の JASC での経験は一言では言い表せない。楽しいことからつらいことまで様々あった。選考合格通知を受けた時、信じられないほどうれしかったこと。春合宿で素晴らしい仲間と顔を合わせ、これから始まるプログラムに胸を踊らせたこと。防衛大研修で安全保障について考え、沖縄では基地問題に関する様々な視点を学んだこと。本会議が始まり、分科会では英語の議論についていくのに苦労したこと、そしてその中でもなんとか発言しようとしたこと。議論の中で何も言えず悔しかったこと。毎夜2時くらいまで誰かとくだらないことも真面目なことも話していたこと…… 思い返せば走馬灯のように記憶が駆け巡る。日本の参加者とわずか知り合って4ヶ月、アメリカ側とはわずか1ヶ月にもかかわらず、濃い経験をしたためにとても長いように感じられる。

JASC のおかげで得たものがある。Energy と Friends だ。JASCer はみないい意味で若かった。何事にも一生懸命であった。分科会でもそうだし、分科会以外の活動でもそうだ。難しいテーマでも果敢にトライし、レクチャーでは多くの質問がとびかった。現状に満足することなくチャレンジしている姿が美しく、自分も次のステップをふむ passion をもらったと思う。さらにかげがえの無い友達

を得た。違う価値観を持つ友との交流は貴重だった。その彼らと3週間に及ぶ共同生活を経て様々な経験を共有した。共に笑い、共に泣いた。コミュニケーションによって相手のアイデンティティにも踏み込むことができた。ここでできたつながりをたやすく将来にもつなげていきたい。

“Life changing experience” ----

「change」とは比較によって遡及的に明らかにされる。この経験を点としてきっかけとしてどの道に進んでいくかが重要だ。将来において自分は自信をもって JASCer であると言えるように、一步一步進んでいきたい。支えてくださった全ての方に感謝する。



川野 さりあ

1年前、一参加者として活動した第64回会議は毎日があたたか感動の連続だった。それまで自分が留まっていた世界がぐんと広がり、きらきらと輝く仲間と共に刺激に溢れる多くの貴重な体験を重ね、自分がかつて避けてきた諸問題にも逃げずに立ち向かっていかねばと一気に心に

火がついたのだった。

そしてそれから1年。実行委員として見る日米学生会議は参加者として見るそれとは全く違った。65回会議が最高に充実した会議になるよう、その成功のために必死だった。しかし運営側に立つことは衝突の連続を意味し、私たちは実行委員会が発足したその日から本会議最終日まで、文字通り毎日が試行錯誤の繰り返しだった。日本側参加者内での問題はもちろんのこと、アメリカ側参加者と合流してからも文化的差異から生じる壁は数知れず。しかし思い返すと不思議なことにそれらを苦だと思ったことは一度もない。それはいつの日も私たちを励まし、支えて下さるアラムナイの方々、企業、財団の皆様、そして同期の仲間がいたからである。そして何よりどんな困難にぶち当たったとしても、その先には必ずかけがえのない貴重な出会いや発見が待っていた。日米学生会議での得難い経験や、ここで築かれた人脈は間違いなく私の一生の財産である。

私にとって日米学生会議は「人」を学ぶ場であった。

人との出会いがこんなにも自分のものの考え方を変えるということ、海の向こう側に生きる同世代の人たちがこんなにも違う視点で同じ問題を見つめられるということ。人と人とをつなぐ言葉の難しさ、そして力強さ。

日米学生会議の一番の魅力はそこに集

まる人そのものである。約2年間、この会議に参加して心からそう思う。

本会議を終え、参加者は再びそれぞれの道を歩み進めている。私もまた、本業の医学の勉強に集中しようとしているわけだが、この2年間で学んできたことを必ず活かし、どんな状況であっても「人」と向き合い、「人」を診られる医師になりたいと強く思う。

最後になりますが、主催団体の一般財団法人国際教育振興会の皆様、アラムナイの皆様、企業、財団の皆様を始め、当会議を実現させるためにご支援賜りました全ての方々に心より御礼申し上げます。

木村 優吾

日米学生会議に応募したきっかけは偶然同じ寮に参加者がいるということだけだった。そこまでしっかりと事前に調べたりもせず、以前の参加者のひたすら輝いて聞こえる話しに聞き入り、その直観で応募した。

実際の会議は予想以上の波乱万丈な劇であり、毎日新しい刺激を受けた。時には肩を組んで慰めあったり、檄を交わしたり、また大声で笑いあったりした。もちろんいつも美しく、すばらしい時間ではなかった。人間の卑劣な部分を垣間見、うまいかないことはたくさんあったが、それを全部含めてきれいごとではないすばらしさがあった。

分科会としては農業について農家の生

の声を聞きながら学ぶことができた。以前に増して農業の大切さがわかり、私の消費生活にも影響を与えてくれた。実際に農業を体験しないでなぜ農業を語れる、というある農家のコメントが今でも強く印象に残っている。

農業についてたくさん学びはしたが、私にとって分科会は JASC における手段であると感じた。農業問題を議論することによって日米、あるいは人と人の相互理解を図る方法を学んだと思う。言語や文化の壁を乗り越え、最終的には人間は人間であるということを実感できたことが私の成果のひとつだと思う。つい相手はアメリカ人だから、文化が違うからなどと自分と違う理由を挙げて相手を遠のけようとするが、人をただ一個人の人間として扱うことができれば、文化などの違いも乗り越えられるものなのではないだろうか。私はそうであると信じていることができ、大いに人間の将来に希望を持つことができた。

活動中は自分のことでいっぱいだったが、今振り返ると本当にたくさんの方の支援の元、今の自分があることに気付いた。賛助団体の方々、アラムナイ、フィールドトリップでお世話になった方々、IEC, ISC, EC, RT メンバー全員に心から感謝しております。

小林 薫子

私は人生の半分近くを海外で暮らし、

インターナショナルスクールに通った。その結果、実力主義で外国人にもチャンスを与えるアメリカという国に関心を持った。そのようなアメリカの大学に留学したいと思っていたので、日米学生会議は大学生になったらぜひ参加したいと思っていた。その日米学生会議に今回は参加することができ、とても嬉しかった。国際問題に興味をもっている日米両国の学生と共に日米共通の課題に取り組んだことが私にとってとても良い経験であった。このプログラムを通して、相互理解の重要性と難しさを知った。私は帰国子女なので、英語にはある程度の自信があった。自分が考えていることを整理し、相手に正確に伝えること、また相手が発信していることを的確にとらえることが大切さだと痛感した。自分の専門の学問を深める努力と同時に今後も相互理解について努力をし続けたい。

また、日米学生会議を通して人的ネットワークのすばらしさを感じた。日米学生会議の参加者は問題意識が高く、よく勉強していて発言力もあり、尊敬出来る人たちである。そのような人たちと今回の貴重な経験を共有できたことは貴重な体験であった。国籍にかかわらず、同じ世代の人間として、これからも共に励ましあい、それぞれの夢を実現していきたい。そんな彼らは、一生付き合える仲間であり、私にとってかけがえのない存在だ。また、レセプションを通してたくさんの

先輩方にお会いすることができた。学生時代の問題意識を生かしつつ、社会で仕事に邁進するその姿は、近い将来の自分の姿とも重なり、大きな励ましとなった。将来、自分も先輩方のように国際的に活躍できる人になりたい強く感じた。



小松崎 遥平

JASC で、人生が変わった。本当にそう思う。英語が伸びたこと、アメリカ人の友達ができただこと、今まで知らなかった分野に触れて教養が深まったこと、文化・背景・考え方といった点での日米の差を痛感したこと、断片的にあげていけば足りが無いが、それでも、自分の深層の変化をギリギリ突き詰めていけば、それは次のただ一点に集約される。才能に頼って努力を怠るのは、これで最後にする。この決意が私の life-changing experience である。私は怠惰な人間であるが故、受験にせよ、スポーツにせよ、大きな目標を達成したことが無い。それでも、生まれ持った才能か何かのおかげで周囲から評価・信頼を受けることが多かった。だ

から挫折もすぐに薄れ、また同じ失敗を繰り返す。ごまかし、ポテンシャル、要領のよさ、幸運だけで生きてきた。今回の JASC もそうだった。直前合宿のリフレクションで語った、分科会活動に死ぬ気で打ち込んで教育問題という自分の「宿題」を説くという誓いも、すべてのイベントから学びつくすという決心も、アメリカ人と深く深く語り合いたいという期待も、最後にはボロボロだった。またか、もう、いい加減にうんざりだ、という失望があった。それでも JASC を愛しているから、私は EC 選挙に出た。選出され、周囲の顔を見渡した時、涙をこらえることができなかった。何度も成長の機会に恵まれては、それをどぶに捨てる私を、またしてもこうして拾い上げてくれる。自分は、何人の人に支えられ、何人の人を犠牲にして、何度同じ失敗をするのであろう。彼らは、なんでそんな私を認めてくれるのであろう。慚愧と感謝の念に堪えなかった。そして、私は日本側の実行委員長になった。もう怠惰は許されない。否が応でも自分を変えざるを得ない。私を認めてくれた彼らの為に、私は 66 回に打ち込もうと思う。「落選したやつらの顔を覚えておけよ」という 65th JEC の言葉を、“No laziness” という 65th AEC の言葉を、“66th JASC is for you.” という自分自身の言葉を、私は忘れない。

古村 大和

『個から集へ、集から個へ』

大和らしさ。本会議という多種多様な個性が入り乱れる共生空間で、それを如何に発揮できるか。私は幼少期を米国で過ごし、中学校の入学と同時に日本へ帰国した。人生の半分ずつを日米両国で生きた私にとって、日米学生会議が特別な経験となることは確信していた。私は「大和らしさ」を念頭に置いて、人生が変わると噂される夏に臨んだ。

そもそも「大和らしさ」とは何か。日本に生きれば目立つ米国らしさ。その逆もまた然り。画一的集団の中で浮かび上がる異端児としての自分がある。しかし、それはあくまでも異国文化の体現者として生まれる差異である。私が求めた「大和らしさ」とは、外国を紹介する橋渡しではない。日米両国での体験が融合し、日米のどちらからしい自分ではなく、それを凌駕した絶大なる調和。その大きな和の中に「大和らしさ」があると考える。

いざ本会議を終えて「大和らしさ」を描き出すことができたのか。目指した姿は、集団の中の一人。しかし、その集団に欠かせない個人になること。総勢70名を超過する集まりの中で、必要な役割を「大和らしく」担うことを心がけた。具体的な事例は割愛するが、この目標は達成できたように感じる。日米の狭間で藻掻いた過去が確固たる土台として、理想の実現を生涯追求する未来につながる。

日米学生会議がさらなる「大和らしさ」の表現に寄与していることは間違いない。

日本と米国。私にとって、この二つの国は変わる事のない原点である。自らの軸を構成する両国の学生と過ごせた今夏。それを可能にしてくれた日米学生会議に、略儀ながら書中をもって深く御礼申し上げます。最後に、人生をかけて「大和らしく」生きることをここに誓います。

白畑 春来

JASCを通して何度も、自分の価値観や考え方といった深い内面の部分について相談に乗ってもらい、また他人のそのような内面にも触れることで、自分とは違う価値観や考え方を知り刺激を受け、自分というものをいままでにないほどじっくりと見つめ直せた。JASCerにはお互いに足りない要素や直すべき性格を、疲れている時や夜が遅い時でも親身に遠慮なく指摘してもらうことができ、ただただ感謝の思いで溢れている。また、ちょっとした人間関係のこじれや、分科会内での議論の方向性の考えの違いなど、なにか問題が起きるたびにほかのJASCerが見せていた、しっかりと真正面から向き合い、解決しようという姿勢にはとても刺激を受けることができた。また、各々が今までの人生で構築してきた社会観や、アメリカと日本の文化・教育の違いについて熱心に語り合うことができたのはまたとない機会であり、そのような話題を

気兼ねなく熱心に話し合うことで、得られた新たな観点や知識はどれも貴重なものであり、今後の人生において大いに役立っていくのだろうと感じた。最後に、去年からずっと本会議を成功させるためにたくさんの努力をして、準備をしてくれた実行委員のみなさんには言葉では表しきれないほどの感謝の意を示したい。分単位で決まっていた毎日のコンテンツをひとつもミスすることなく運営してくれ、またどのコンテンツにおいても十分に楽しませてくれ、いろいろなことを吸収させてくれた。事前活動はもちろん、本会議の3週間はあっという間であったが、思い返してみると毎日が充実しており、毎日何かしら新しいことを学べていたのだと感じた。



鈴木 健司

第65回日米学生会議が終わって1週間になる。これまでの参加者の方々がそうであったように、今この日米学生会議が私自身にとって、どのような存在であったかを言い表すことは難しい。「熱い思いを持った一生付き合えるような友達を作

りたい」そう思い、応募した日米学生会議。軽い気持ちで応募した訳ではなかったが、私にとっては自分自身を見つめる葛藤の毎日だった。春合宿で初めて参加者36名が集まり、そこで参加者それぞれの個性に触れた。一人一人が個性を持ち、それぞれが輝いていた。その中で、私が自問自答し続けたのが、「この36人中で自分のできることとは何なのか」ということだった。この問いに対する答えは簡単には得ることができず、自問自答し続けたまま本会議に突入していった。本会議に入り、アメデリ36人と合流することで、その問いへの答えはより分からなくなっていく。しかし、本会議を通して、他の様々なデリとの会話において、自分というものが次第に見えるようになってきていた。深く、熱い話ができるというJASCならではの雰囲気の中で、自分というものを他のデリに見てもらうことで、一人では分からなかった部分などを知ることができたように思う。しかし、この会議中に問いへの答えが明確に得られた訳ではない。それでも、70人を越える日米の学生との共同生活を送る中で、笑い、悩み、泣き、毎日考え抜くことで、また新しい一歩を踏み出せたように感じる。さらに気づいたのは、分科会活動をはじめ、一人では決してできないことがJASCを通して数多く経験できたということだ。改めて、チームの素晴らしさやチームでしかできないことを実感した3

週間でもあった。

JASC での経験がどのように活かされるか、今は分からない。それでもこのかけがえのない経験と「Once a JASCer, always a JASCer」この言葉を胸に、これからも日々精進していきたい。65th JASC に関わって下さった皆様本当にありがとうございました。

鈴木 悠司

「JASC を通して学んだものの中で、一番大きなことは何か」ということを、ファイナルフォーラムが終わったあたりから自問自答するようになった。本会議中は毎日の生活についていくのが精一杯で、JASC の成果について十分整理することはできなかったが、今思い返してみると、そのように必死になってもがき続けたという経験が非常に大きな財産になったのではないかと考える。

私にとって本会議の 23 日間は決して「楽しい」「充実している」といったポジティブな感情だけで形容できるものではなかった。むしろ、全く異なるバックグラウンドを持つアメリカ側参加者とともに生活し、今までほとんど興味すら示すことのなかったトピックについて考え、到底使いこなせるとは言えない英語を使わなければいけないという、大きなストレスや苦しみを終始抱えていたと思う。本会議に入る前に、積極的にできるだけ多くの人と様々な議論を交わそうと決意

したはずなのに、英語力や知識の乏しさゆえに議論に全く参加できず、悔しい思いをしたり、ひどく劣等感を感じたりしたことも一度や二度ではなかった。

しかし、そのような状況に直面したときに、自分の悩みを聞いてくれる人が必ずおり、彼らの助言も借りながらなんとか困難を克服しようとし続けたことで、23 日間の本会議で全力をつくすことが出来たと考える。また、そのように悩みを相談し、助言を求めるということは次第に私の JASC の中でのコミュニケーションスタイルの一つになっていた。決して格好いいスタイルではないかもしれないが、そうやって多くの参加者と会話をするなかで、多種多様な物の考え方や価値観に触れることができ、それら一つ一つが私にとってとても心躍る経験であった。もがき続ける中で大勢の人に支えられ、多くの学びを得た。実行委員や参加者を始め、この JASC に協力していただいたすべての方々に改めて感謝したい。

関口 響

本会議の予定表を見返すと、ひとつひとつの思い出が映像となって脳裏に蘇る。仲間が流した涙。たわいのない会話で笑い合った日々。そこには年齢も、国籍も存在していなかった。七十一人の人間がただただお互いに真剣に向き合い、相互理解を追求した夏であった。また同時に、他者を知るなかで僕らは自分自身を深く

見つめ直し、自己理解を深めた夏でもあったのではないかと思う。「自分とはなんなのか」「何を目指して生きているのか」自分すら明瞭な答えの出せていない問いに対して、JASCの仲間は本気で耳を傾け、意見を与えてくれた。それはまるで自分の中に眠る原石を仲間と共に磨き上げていくように感じられた。そしてそのおかげで、僕は原石の一寸の光を見出すことができ、「自分らしさ」と「将来像」をより具体化できたと思う。

JASCが人生を大きく変えた経験であったかどうかは、未だ定かではない。英語力が格段に伸びたかという、そういう訳でもない。しかし僕は、Life Changing Experience というものはJASCを終えた後の人生のなかで静かに実感していくのだろうと確信している。二十歳の夏に得た知識や学んだ経験がいつかなんらかの舞台上で活躍する際に不意に感じられ、活かされているのだろう、と。

第六十五回を終え第六十六回の実行委員になり、底知れぬ期待が胸に溢れている。もちろん不安もあるが、むしろ、この夏のような「相互理解」と「自己理解」を、まだ見ぬ素晴らしい仲間とともに再び経験したときに見えるその先の世界と自分の深淵を知ることが楽しみでならないのだ。そしてそのための努力は惜しまないつもりでいる。

僕はいま、新大阪へ向かう新幹線に乗

っている。関西に住むJASCer たちに出会いに行くためだ。きっと将来、僕は飛行機に乗っていることだろう。世界で活躍する第六十五回日米学生会議の仲間たちを訪ねるために。

竹内 正人

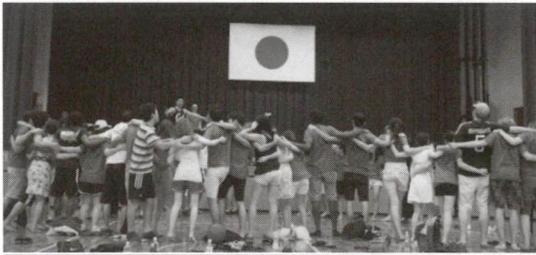
長い歴史と伝統への責任。そして、新たな開拓。この一年、実行委員長に就任し、今まで以上に自分について考える機会が多かった。いい意味でも、悪い意味でも自分にとって何を一番に大事にしているのか。自分は何が好きで、何が嫌いでなんの為に今生き続けているのか。そんなことを考えながらこの一年間過ごしてきた。

他の人と自分は違う。この会議を終わるまで自分の頭の中はこの言葉が何度もまわっていた。人によってそれぞれ生きてき道はもちろん異なるが、専攻分野も物の捉え方も違う自分がこの会議で果たせる役割は一体どんなことなのかを考えて進んできた。第64回日米学生会議に参加者として参加した時、現実とは掛け離れた異空間において自分の将来の方向性について必死に考えた。しかし、見つけた答えは自分が予想していた場所ではなく、身近なところにあった。というよりは、自分の中に答えはあったもののなかなか前に進めなかつただけだったのだと今は思う。そして、実行委員長として迎えた第65回日米学生会議。就任当初

は期待はなく、不安でしかなかった。同時に自分の決めた進路への不安もあった。しかし、今だけしかできないことを今やるというスタンスは自分の中で変わっていなかった。

LIFE CHANGING SUMMER。人生が変わる夏という大げさに聞こえるかもしれないが、自分が感じたその経験を一人でも多くの人にしてもらいたいという思いでプログラムを作った。会議の中盤、意見の対立、衝突はもちろんあった。時間は掛かったものの、人に頼らず自分で前を向いて懸命に会議に関わっている参加者の姿勢を見て感慨深いものがあった。

最後に、いつも身の回りで支えてもらった全ての人々に心から感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。



中澤 彩

5月の春合宿から始まり夏の本会議が終了するまでの約4ヵ月間を思い返しながら、今この感想文を書いている。つい数日前に本会議は終わったばかりであるが、本会議中の寝不足、疲労を抱えながらの熱い議論や友との楽しいやり取りは、遠い昔にあった、別世界での出来事のよ

うに感じる。本会議前から予期していたことではあるが、完全なる“JASCsick”である。

私は JASC65th が始まる前、“Life-changing Experience”という言葉に対し、期待、疑い、不安が入り混じった複雑な感情を抱いていた。多くの Alumni の方々が JASC での経験をそのように言い表すのを聞いて、いったい JASC とはどれほど素晴らしい経験を与えてくれるのか、JASC を経験することで将来の幅が広がり、自分が人生を通してやりたいことを少しでも明確にできるかもしれないと期待した。しかし同時に、たった数ヵ月で“Life-changing”というのは大げさではないかと疑った。また、例え JASC にはそれほどの価値があるとしても、その価値を最大限掴むことができるかどうかは個々人の努力・能力次第であり、私にそこまでできるかどうかという不安があった。

本会議を終えた今、特に大きな後悔はない。では、JASC での経験は Life-changing experience であったかどうか。正直のところ今の段階では私の人生を変えたとはまでは断言できない。ただ、異なるバックグラウンドの人達と出会い、日本の各地に足を運び、それぞれ悩みを抱える中であっても努力することを惜しまない友と議論することを通じ、自分を客観的に見直す機会を得た。そしてとても前向きに、時間は有限であるがゆえに、

何に関しても目標達成のためには努力を惜しまないと決意を新たにすることができた。

ただ今後を漫然と過ごすだけでは、今回の経験が **Life-changing experience** となることはないと思う。JASC を数多くあるサマープログラムの一つとするか、**Life-changing experience** とするかは自分次第であると思う。今回学んだこと・得た刺激を維持し、努力を継続していかなければならない。そうして数年後、JASC の真の価値に気付くのだと思う。



中村 優太

はじめに、第 65 回日米学生会議の開催に際し多大なご支援とご協力を賜りましたことをここに深く感謝申し上げます。すべての出来事に意味がある。JASC に参加するまで、社会に蔓延する問題を認識していたものの、それらを学生間で議論を真剣に交わしたことを経験したことがなかった。そのこともあり価値観、背景、経歴の違うみんなと過ごした 4 ヶ月はいままでに経験したことの無いほどの感動、葛藤、衝動、衝突をもたらし、私を一回

り二回り大きく成長させてくれた。

今日日本を取り巻く情勢は決して芳しくはなく、とりわけ日中関係が冷え込んでいるなか、日米学生会議伝統の安全保障分野の分科会を担当したことは学生会議としての意義は大変大きく、しかしながら、その様な状況のなかで我々学生が果たす役割は何なのか、期待されていることは何なのかを常に意識し、自身に問いかける必要があった。振り返ると、今しかできない、学生だからこそ既成概念に囚われない自由で活発な議論が生まれた。言葉の壁や人間関係に何度も挫折し、何度も逃げたときもあった。そのとき互いに悩みを打ち明け、解決策を模索していく中で互いを尊敬しあい、互いに感化しあい、個人を超えた世界観を共有することができたと感じた。JASC を終え、学んだことは数えられない。そのなかでも特に肝に銘じておきたいのは「現地主義」である。数多くの講演会、施設訪問、地元の方々との交流を通して情報媒体によって操作された情報だけを頼るのではなく、実際に問題とされている地域へ赴き現地の方々の「生の声」を聴くことで、真に問題とされている本質を見極めることができたと感じたからである。これから次世代を担う我々若者が閉塞した社会問題を柔軟に対処するにはまさに「現地の声」から聴くことから始まると思う。改めて、第 65 回日米学生会議の開催にご理解とご協力を賜りましたことを感謝申

上げます。

野口 ゆかり

実行委員としての業務に励んだこの1年間は長いようであつという間に過ぎた。振り返ってみると、今までで最も密度の濃い期間で、非常に充実していたが、決して楽な1年間ではなかった。実行委員全員が「65回会議の成功のために」という同じ目標を共有しているのにも関わらず、どうしても目標達成のアプローチ方法で衝突を繰り返してしまうことが歯がゆくもあり、フラストレーションでもあった。私達なりに準備してきた「最高な会議」の1か月間という限られた時間の中で、参加者が何かを得て変わることができたのかどうか、それは会議が終了した今もはっきりとは分からぬ。答えのない答えを追い求めることは、先が見えない暗闇の中をマラソンしているようで、時には自分を見失い、仲間を見失い、どこにゴールの方向があるのか見失いかけることもあった。しかし、問題の山にぶつかる度に自分の弱点を痛感したのと同時に、周り仲間の支えの力の大きさを実感した。

一人一人の果たすべき役割はあるものの、結局一人だけでは何もできないことを真っ向から気づかされ、全員で何かを作り上げることの難しさと素晴らしさを実感できたのは間違いなく仲間の実行委員を初めとする、多くの方々のお蔭であ

る。盛り上げ上手なが一に一、いつも一番の相談相手になってくれたさりあ、皆を支えてくれた縁の下の力持ちののぶ、ちょっとした気遣いがすぐできるちやき、ずっと皆のこと大好き人間でいてくれて皆をまとめようと努めたまあや、スパイスのような存在でありながら常に安心感をもたらしてくれたミン、そして最も役職が重複し上手いかないことが多々あつて迷惑ばかりかけても、最後まで情熱を絶やさず献身的に一緒に仕事をしてくれたいっち。個性的なメンバー揃いの第65回参加者たち。困っているといつも励ましてくれた第64回の同期たち。皆に感謝の気持ちを十分に伝えきれないまま、すぐに留学先のカナダに渡ってしまったけれど、本当にありがとう。

最後に、主催団体の一般財団法人国際教育振興会を初め、OB・OGの方々、そしてその他多くの関係者の皆様のご支援ご協力なくしては私がこのような経験をさせて頂けることも、第65回会議を実現させることもできませんでした。心より御礼申し上げます。

次世界のどこかで皆様にお会いする時は一回り大きくなった自分をお見せすることができるよう、日米学生会議での経験を軸に今後も精進して参ります。

野口 真央

JASCの3週間は気付けば折り返し地点を過ぎ、そしてあつという間に幕を閉

じた。本会議が終わって1週間が経った今、未だに充実した日々の余韻に浸っていて、写真を見返しては寂しい気持ちになることも頻繁にある。

このあつという間に終わってしまった3週間にわたる JASC の何よりも素晴らしいさは、人との出会いだと思う。日本の大学生という限られたコミュニティーで生活してきた自分にとって、日本、そしてアメリカの各地から集まった全く異なる価値観を持つ参加者との出会いこそ *life changing* だった。個性豊かな JASCer と共にした本会議での生活は相互理解にすぎるものではなく、相手を知ることはもちろんだったが、相手から受ける刺激で自分自身を発見する大きな機会だった気がする。将来の夢もまだ不確かで自分自身を模索していた私にとって、自分を刺激し、勇気付けてくれる仲間との出会いはこれからの自分を真剣に見つめて考える大きな転換点となった。

一日の平均睡眠時間が3時間という過酷な環境のもとで、時には挫折をしてしまいそうなくらい集団行動での人間関係に悩んだり、疲労の蓄積で気持ちが引き締まらなかつたりという沢山の厳しい条件が立ちはだかっていたが、そんな自分を常に支えてくれたのは JASC の仲間だった。みんなそれぞれ悩み事を抱えていたが、同じ環境で共に生活する仲間からの支えは特別だった。出会って間もないのに初日の夜からお互いが抱えてきた悩み

事を打ち明け、何年も前からの知り合いのように接することができた素晴らしい仲間に出会える場合は JASC 以外に他ならない。

本会議が終わり、元通りの環境に慣れ始めている自分に少し寂しい気持ちを覚えるが、一皮剥けた今年の夏を忘れることなく JASC で学んだこと、感じたことを最大限に活かして今後の自分を見据えていきたい。



橋本 萌

日米学生会議本会議が始まる前に、この夏は *life changing summer* になると言われていたが、正直それは誇張された表現だろうと思っていた。しかし第65回日米学生会議が終わった今、この夏は私にとってかけがえのない *life changing* なものになったと自信を持って言うことができる。

私の属していた「差別とマイノリティー」の分科会はジャパデリもアメデリもどちらも個性の強い人が多く、非常に色の濃い分科会となった。JASC の何よりも

大きな収穫はこの分科会で普段は深く話せないようなセンシティブな内容の議論を1か月近くの間できたことである。このような議論を重ねる前までは、日本社会は自分にとっては暮らしやすい快適な場所でありそれに対する疑問を抱くことなく生きてきた。しかしこの1か月で自分の考え方は大きく変わり、初めて社会を疑問視することが出来るようになった。自分の中での大きな一歩だと思っている。もちろんセンシティブな議題だけに何もかもがスムーズにいったわけではなく、途中では認識や考え方の違いが露呈してしまうこともあった。しかし社会の表舞台には出にくいような話題を時にはぶつかり合いながらも話し合ったことで、真の仲間を作ることができた気がする。このような機会を下さった JASC に心から感謝している。

また、JASC に参加したことにより、まだまだ自分の将来には無限の可能性があるということを実感することができた。様々な場所を訪れ、様々な人から話を聞き、そして国を超えた同世代の人々と将来について語ることで自分の知っている世界の狭さを認識した。考える度に不安になっていた自分の未来像だが、初めて楽しみだと思えることが出来ている。JASC がどのようにして未来の自分に繋がっていくのかが今から楽しみだ。

たったの1か月弱だが、JASC は自分という人間を一回り成長させてくれた。

このような会議に出会えたこと、そして参加できたことを心の底から嬉しく思う。

浜田 りん

「JASC ほど濃い1か月は、もう二度と訪れない気がする。」先輩 JASCer 達が口をそろえて言っていた言葉が、今まさに私の中にある。それほどまでに、JASC は非日常的で、刺激的で、かけがえのない空間だった。

私が JASC で得られたものは、3つある。1つ目は、質の高いディスカッションだ。普段の大学生活では、友達と議論する機会はめったにない。授業でディスカッションが行われても、学生によってモチベーションの高さにバラつきがあったり、浅い議論で終わったりしてしまうことが多かった。JASC には、本気でディスカッションをしようと意気込む学生ばかりが集まる、まさに私が望んでいた環境だった。さらに、普段交わることのない他学部生と議論ができ、異なる視点からの意見も聞いた。今後の勉強に活かしたい。2つ目は、日本を学べたことだ。私は、今まで関東から出たことがほとんど無かった。そのため、長崎サイトや岩手サイトがとても印象に残っている。それぞれの町、歴史、文化に感動し、もっと早く地方を訪れたかった、もったいないことをしたなと思った。まだまだ私の知らない日本がたくさんあることを痛感した。3つ目は、今後も大切にしたいと思える仲

間だ。夢や目標も堂々と語れる、真剣に耳を傾ける雰囲気、とても心地よかった。将来について生き生きと話す友人の姿を見て、私も、もう一步頑張ってみようと思われた。JASC で感じた、楽しさ、悔しさ、一つひとつの経験を忘れず、更なるステップアップに繋げたい。

三科 圭介

私が JASC を通して得たことは大きく分けて二つある。

①「文化の違い」②「出会い」。まず文化の違いに関して述べる。本会議前、「文化の違い」は旅行で学べることだと思っていた。ただ本会議が終わった今、それが間違いであることに気付いた。例えば分科会のミーティング時、議論を交わすのに日米間で議論形式が異なった。日本は目的に合わせて構成を作り、議論することを好むのに対し、米国はフリーディスカッションを好む。そのため議論が進まないことが多々あった。ただこの両方に良い点、悪い点があることに気づき、どのようにこの二つの異なる議論形式を用いればお互いの良さを引き出していけるのかを考えることが出来た。この体験は、これから私達がグローバルな世界で生きていく上で、とても大切な経験になったことを確信している。

2つ目は「出会い」について述べる。72人の全く異なる経験を持つ学生が JASC を通して出会う。そして 72 人全員の意見

や考え方が私にとっては新しく刺激的であり、自分が狭い世界で生きてきた人間であることを認識させられた。この出会いにより私の視野が広がり、沢山の可能性を見つけることが可能になった。「出会い」の大切さを最も感じた 3 ヶ月であった。

JASC が終わった今、この 2 つの学びを含め私が成長するための「種」を得ることが出来た。したがって、これからの人生でその「種」に花を咲かせるか、そうでないかはこれからの私次第である。そしてそれが出来たときに本当の JASC の価値を知ることが出来るだろう。このような素晴らしい機会を与えてくれたことに感謝する。



森 泰子

春合宿で初めて日本側参加者と顔を合わせたのが 5 月。それから 3 ヶ月間の事前準備を経て迎えた本会議は、本当に密度の濃い 1 か月だった。

アメリカ側参加者は、日本側に負けず劣らず個性的なメンバー揃い。それと同

時に、日本という国や文化にとっても興味があり、オープンマインドな人が多かったように感じる。

今回、アメリカ側参加者は多くの文化の違いに触れたと思うが、それを拒否せず新しい知識や経験を求める積極的な姿勢にとっても刺激を受けた。

また、日本開催の本会議は、私自身勉強になることも多かった。今回日本各地を回って自分の目と耳で体験して、これを機にもっと日本のことを学んで海外にその魅力を発信していきたい、と改めて思った。

分科会では、やはり議論の結果を出すことに目が行ってしまい、意見がぶつかりがちだった。衝突して絆が強まることもあるだろうが、私個人的には、闇雲にぶつかるよりも、各々の個性や主張をつなぎ合わせたいと思いがあった。各メンバーの話を聞き、議論では仲介しようとしたが、なかなか皆が一つになれない現状に焦って悩んだが、思い切って自分の想いを素直にそのまま伝えてみたら、それに応じて皆の本音も出てきて、隠れていた誤解や確執も解くことができた。衝突は避けても本音を伝えることの大切さを学べたと思う。

1ヶ月しかない中で、恥ずかしさや遠慮を捨てて本音を出せる関係になれるというのは、とても恵まれた環境であった。

フィールドトリップや分科会活動以外に、みんなと話す時間が本当に楽しく有

意義で、睡眠不足なのにも関わらず、バスや飛行機などの移動時間や夜は寝る間も惜しんで話していた。楽しくて面白い話から真面目な議論まで、話の引き出しが豊富な人ばかりだった。

一人一人、本当に個性があって魅力的な人たちで、まだまだ話し足りない、というのが正直な感想だ。今後も一生続けていきたい大切な仲間が出来たことに本当に感謝している。

森田 修弘

一年間自分の持つものすべてを注いできた日米学生会議が終わった。今感じているのは「悲しみ」でも「達成感」でも「喜び」でもなく、「空白」である。65回会議の実行委員に就任してから毎日、毎分、毎秒65回会議のことを考えてきた。その会議が終わった今自分は何を目標にこれから一年生きていけばいいのだろう。終わってみて初めていかに自分がこの会議に入れ込んできたのがわかった。大袈裟に聞こえるかもしれないがこれが今の正直な気持ちである。そんなことを思いながら、締め切り直前になってこの文章を書いている。

この一年を振り返ってみて JASC を通して一番学んだものは何であったか、それはやはり「感謝の気持ち」の大切さである。日米学生会議は多くの人に支えられて成り立っている。直接関わる機会のある方もいれば、一度もお目にかかるこ

となく終わってしまう方もいる。しかし、そのような機会のあるなしに関わらず、この会議の活動に理解をいただき支援・応援をしてくださる方がいるからこそ私たちはこの経験を得ることができるのである。また、実行委員が日々の活動ができるのは事務局の方たちがいるからであり、各開催地で様々なコンテンツができるのは協力してくださる現地の方がいるからであり、今の日米学生会議があるのはアラムナイの方たちがいるからである。言い古された言葉であるかもしれないが、「あたりまえ」など一つもないのだと改めて感じた一年であった。この場を借りて改めてすべての関係者の方々に御礼申し上げます。

最後に、共に一年間 JASC を作ってきた実行委員の皆に感謝をしたい。その中でも特に一緒にサイト運営をしてくれたさりあ、ありがとう。お互い頑固で素直じゃない故にぶつかることもあったけれど、サイトのみならず一年間一緒に仕事できて本当に良かった。去年の夏、悩んだ末に EC になるという決断をしてくれてありがとう。

JASC is Just About Seizing Chance. JASC の終了は終わりであると同時に始まりでもある。JASC を通して得た **Chance** をしっかりと掴み、前に進んで行きたいと思う。



横田 真彩

人の想いがどれほどに温かく生きたもので、それぞれにとり心強く、そしていかに力強い「実行力」となる可能性を秘めているか。これが、実行委員としての一年間を経て、肌寒いカナダの地で今、自分が少し自信に似たものを伴って手にしている実感である。今となってはすべての瞬間が恋しく愛しいが、きれいな思い出物語として終わらせたくない。一つ一つ噛み砕くには時間がかかるから、まず今は心からの感謝を伝えようと思う。

今思えば、実行委員会でも分科会でも、各々のあまりにも真っ直ぐな想いが交錯していたがゆえに起きていた衝突。それでも妥協することなく、同じ日本側だからこそ発生した大きな差異、そしてアメリカ側との間にあった大きな壁も、すべて越えたところで互いに「信頼」を強く求め続けた日々だったように思う。辛く、苦しくもあったが、皆で乗り越えた時に大きな喜びを共有できる瞬間が、それら

をすべて愛しい思い出に変えてしまうほどに、あまりにも美しかった。

長かった1年間を共に駆け抜けた、誰ひとりとして代わりの利かない実行委員会、5月に顔を合わせてから加速するように気持ちを一つにしていった第65回会議のみんな、会議の実現に至るまでどれほど失敗や迷惑をかけ続けても惜しみない全力での応援を下さった、諸先輩方を始めとする本当に沢山の方々。それぞれの想いを全身で感じる中で、責任を感じ自信を無くしながらも幾度となく励まされ、本当に多くの学びの機会を頂いた。このような溢れかえるほどの想いが集結する場にいられたこと自体に、深く、心から感謝したい。

一見、何と理想的な感想かと思われるかもしれない。だが、これこそがこの一年間を経て今、漸く辿り着いた、私にとっての真実である。青い20歳の私が強く思ったのは、例えどれほど辛くて苦しい時期が続いたとしても、最後まで諦めずに真っ直ぐそこにある想いと希望を信じ続けることが大切であるということだ。人の想いの中で生きることの魅力、有難さ、喜びを分かち合うことの幸せを少しでも知った以上、そうした自信を抱いて前に進むことが使命だとも感じる。

世の中はきっとそんなに甘くない。必ずしも目標を共にする仲間や、力強く応援し続けて下さる方々に出会える訳ではないだろうし、今の私が予想もしないよ

うな困難にぶつかる日だってあるだろう。けれど、現実を目を向けながらも今手にしている実感を信じ続け、時にかけがえのない家族の様な仲間と励まし合いながら、私らしい方法で恩返しをしていくために日々を一生懸命積み重ねていきたいと強く思う。

吉井 拓真

何と表現できようか。

本気で取り組んだ準備期間、この上なく充実した本会議の数日、そして不本意な形で迎えた終わりを。

病室では一人考え事に耽る時間が多く、ぶつけようのない後悔や無念が走馬灯の様に脳裏をよぎった。自己管理が至らなかった点、周りに負担をかけてしまった点、自分が思い描いていた程自分を出し切れなかった点。これほど悔しさを感じたことは生まれて初めてだった。しかし、自分の身に起こったことは現実であり、時は非情にも進んでいく。現実を前向きに捉え、明日に活かさねばと強く自分に言い聞かせ続ける毎日であった。

ただ全ての日程をこなせなくてもやはり、この会議に参加できたことは私にとってかけがえのない財産であると断言できる。合格し、参加してからの道程は決して平坦なものではなかった。自分の学業や課外活動と並行する事が困難な時、個性の強い分科会で足並み揃えて進んでいくことに不安を抱いた日もある。しか

吉田 知史

し道程が険しかった分、人並み以上に情熱的になれた。全力で取り組むことで初めて見えてくるものを楽しみに、自分の持っている全てをぶつけようと思い、それを実行できたと自負している。手を抜いたことは一度もないし、自分が参加している間は100%の自分を出しきることができた。これでもよしとしたい。

そして何よりも財産になるのが出逢いだ。この会議に参加したくて叶わなかった方はデリの人数以上にいる。そうした方々の無念の中で私は皆と出逢うことができた。夜遅くまで語り合った友人。別れ際に泣いて共に悔しがってくれた友人。入院してからも気にかけてくれた友人。国境や年齢を越えた一人一人との出逢いが私を強くしてくれた。有能で心優しい多くの仲間と出逢えたことを心から誇りに思う。

最後に、この会議を支えて下さった多くの方々、アラムナイの方々、病院に連日付き添って下さった後藤様、仲間達に深く感謝したい。

最高の経験をありがとうございました。



1934年、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下に発足したのが、我々の日米学生会議です。日米戦争を回避するという社会的な役割がこの会議にはあったのです。だからこそ、私は参加が決まってからというもの、「この会議が社会に対して果たすべき・社会から期待されている役割とは何か」という問題に長く苦しめられてきました。「最後のファイナルフォーラムや報告会などで、日米、そして世界が抱える問題を学生の立場から議論した成果を社会に向けて発信する」。準備期間において、私はこれが日米学生会議が果たすべき役割であると考えていました。

しかしながら、本会議が始まると、それは結局「相互理解」を図ることだと気づきました。それまで、日米間の相互理解は留学などで十分に出来る為に、日米学生会議の役割ではないと考えていました。けれども、本会議が始まって以降認識させられたのは、日米学生会議以上に世代を跨いで日米交流の中核を担えるものはないということでした。あれ程までに互いのアイデンティティ・バックグラウンドを考えぬくことを避けずに、1つ1つ文化の壁を乗り越えていくという経験はありません。分科会の議論はそれを行うきっかけを与えられているに過ぎず、社会的な役割は互いのことを理解しあっ

第5章 参加者の声

た仲間が太平洋を超えて存在し、互いに様々な分野で活躍することで果たしていくのだと知りました。

それからは、今まで話すことのなかったメンバーとも積極的に交流を図り、居心地悪く感じる文化的差異などについても正面から話すことを心がけました。すると会議が終わる時には、全員でないにしろ心の底から親友だと言える仲間が出来た、と胸を張って言えるようになりました。ただ、我々はまだスタートラインにたったに過ぎません。これから、互いの分野で成功を果たすことが求められています。

第 6 章
第 66 回
日米学生会議概要

第66回日米学生会議概要

「文化の交差から創る道～学生が受け継ぐ80年の平和への歩み～」

-Communicate and Connect: Pursuing Peace at the Crossroads of Culture-

日米学生会議は、新たな発見に満ちた一夏である。

そこでは官僚のように、精緻なデータ分析や実現可能な政策提言をすることは難しい。メーカーのように、目に見える形で製品を提供するわけでもない。社会に出て仕事をしたことがない学生が、国際問題を議論する様子を見て、人々は冷めた声で言うかもしれない。学生ができることなどたかが知れている、と。

80年前の学生も同じことを言われた。満州事変以降急速に悪化していく日米関係の渦中であって、何の後ろ盾もお墨付きもなく、ただ平和を希求する4名の日本人学生が太平洋を渡り、アメリカ人学生や教授を説得する――。誰の目にも無謀な挑戦に映ったに違いない。しかし彼らの熱意と勇気ある訴えは、国籍も政情も関係なく、やがてアメリカ人の心に届いた。そして遂に、第1回日米学生会議は開かれた。今日まで続く伝統ある学生交流プログラムの船出である。彼らは学生だからこそバイタリティに溢れ、自らも世界平和の一翼を担うべきであるという強烈な当事者意識を抱いていた。

今日、世界地図を広げれば、そこには幾多の問題が浮かび上がってくる。北朝鮮がミサイル打ち上げを繰り返し、中国

が経済を急成長させ、軍備を拡大させる一方、アメリカは世界の警察としての存在感を薄めつつあり、日本を取り巻く安全保障環境は刻々と変化している。異常気象が続く中、

先進国と途上国との間では、温室効果ガス排出量削減をめぐる思惑が交錯する。歴史は過去の出来事であるが、それをどのように評価するかは、しばしば国家間の政治的争点となり、原爆投下、靖国参拝、従軍慰安婦をめぐる議論は、そうした歴史認識問題の最たる例である。2011年の大震災による福島原子力発電所の事故では、科学の絶対神話が崩れ、その限界と危険性が浮き彫りになった。移民や外国人労働者の受け入れは、労働力需給ギャップを徐々に解消していく一方で、治安の悪化や地域社会との軋轢を招くと懸念されている。世界の人々を魅了した宮崎駿作品に日本人の自然観や宗教観が通底しているように、絵画や音楽、建築などの芸術には、表現者の思想や感性など、その背後にある文化的アイデンティティが投影されている。2001年の同時多発テロの映像に映し出されたあの飛行機とビルは、衝突しあう正義の象徴であった。私たちは現代社会のこうした課題に

自らその当事者として向き合い、自分
が取るべき行動を考え、実行していく必要
がある。それこそが80年前の学生が志し
たことであり、今日にも通ずる日米学生
会議に課せられた使命ではないか。

「文化の交差から創る道」。参加する学
生たちの人格、思考、習慣といった文化
が、日米学生会議という場で交差する。
そこでは絶え間なく議論をする中で、絶
え間なく衝突と理解を繰り返す。「学生が
受け継ぐ80年の平和への歩み」。積み重
なる衝突と理解の先に創られていく道は、
平和への道である。たしかに今回の会議
に参加するだけでは日米を、太平洋を、
世界を変えることはできないかもしれな
い。しかし、人ひとりの人生をも変えて
しまうような経験に恵まれる参加者がそ
れぞれの道を歩み続け、やがて日本と世
界の発展に寄与してくことで、究極的
には世界平和の構築に貢献する。私たち
は、それこそが日米学生会議の本質であ
ると考えている。参加者は日米学生会議
の主役であり、世界中で起こる様々な問
題の当事者でもある。そのめまぐるしい一
夏は、自分の中に、世界の中に、きっと
新たな発見をもたらすであろう。

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第66回日米学生会議実行委員会

【会議開催期間】

2014年8月2日～2014年8月24日

【事業実施期間】

2014年4月1日～2014年3月31日

【開催地】

デモイン、サンフランシスコ、ニューヨ
ーク、ワシントンDC（順序未定）

本会議におけるプログラム

《分科会（略称RT）》

本会議において活動の中心となる分科
会は7つ設けられており、日米双方5名
ずつの学生（実行委員1名を含む）が、
本会議期間中を通じて議論を重ねること
となる。事前活動に加え、本会議中もフ
ィールドトリップで関連機関や専門家
を訪問するなど、議論の質の向上を目指
す努力が続けられる。第66回会議にお
ける分科会は以下の通りである。

(1) Art and Identity

芸術とアイデンティティ

(2) Environmental Initiatives for a
Sustainable Future

環境問題における国家、企業、市民
の役割

(3) Immigration in the Modern Era

移民の功罪と展望

(4) Modern Consequences of Historical
Education

現代における歴史教育とその社会的影響

(5) Morality and Justice

正義と道徳

(6) Smart Power in US-Japan Relations

日米関係におけるスマートパワー

(7) Technological Advancement and Society

技術進歩と社会

《Field Trip》

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO 及び研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な具体的視点を獲得するための重要な活動となる。

《Special Topics》

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

《Conference Wide Reflection》

参加者が一同に集い、1ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し

合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

《Final Forum》

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、1ヵ月の総まとめを行う。主として分科会における議論の概容を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を第65回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。



第7章
日米学生会議に
ご協力くださった
方々

第65回日米学生会議 ご協力いただいた方々（順不同・敬称略）

●主催および後援団体協力者

I. 会議全般

一般財団法人国際教育振興会

理事長 大井 孝

参与 稲田 脩

事務局 後藤 明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃殿下

会長 南原 晃

事務局長 伊部 正信

事務局 川島 裕子

International Student Conferences, Inc

理事長 Kristy Holch

事務理事 Yuuki Shinomiya

事務局 Dan Jodarski

外務省

国際文化交流審議官 柴田 政之

国際文化交流審議官 斎木 尚子

人物交流室長 中田 昌宏

人物交流室 課長補佐 三浦 恵子

文部科学省

国際統括官 加藤 重治

大臣官房 国際課 課長 永山 賀久

大臣官房 国際課 総務係長 植村正樹

米国大使館

首席公使 カート・トン

広報・文化交流部 教育・人物交流室

シニアプログラムスペシャリスト

落合 安代

一般社団法人 日米協会

会長 藤崎 一郎

専務理事 渡辺 隆

日米文化センター

日本代表 伊部 正信

II. 京都サイト

■後援

京都府 京都市 京都市教育委員会

立命館大学

■協力

下鴨神社、一般社団法人茶道裏千家淡交会、内閣府迎賓館京都事務所、総合地球環境学研究所、公益財団法人稲盛財団、エムケイ株式会社

III. 長崎サイト

■共催

第65回日米学生会議長崎サポート委員会

■協力

長崎県、長崎県教育庁、長崎市、長崎市教育委員会佐世保市、米海軍佐世保基地、長崎経済同友会、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、公益財団法人長崎平和推進協会、株式会社十八銀行、株式会社親和銀行、長

崎放送株式会社、長崎文化放送株式会社長崎・セントポール姉妹都市委員会、長崎県立大学、長崎外国語大学、株式会社鈴木商店、中村倉庫株式会社、反田海運株式会社、三菱重工株式会社、ハウステンボス株式会社、長崎自動車株式会社、ホテルマネジメントインターナショナル株式会社、長崎にしょうかん、株式会社NTTドコモ長崎支店、マツハヤ・コーポレーション株式会社、日米学生会議長崎在住アラムナイ

■賛助

一般社団法人 長崎国際観光コンベンション協会
長崎サポート委員会
在福岡米国領事館、長崎日米協会、佐世保日米協会長崎商工会議所、長崎経済同友会、株式会社十八銀行、株式会社長崎銀行、長崎放送株式会社、長崎文化放送株式会社、株式会社テレビ長崎、株式会社長崎新聞社、長崎純心大学、長崎活水大学、長崎学院 長崎外国語大学、医療法人恵会光風台病院
長崎自動車株式会社、株式会社平安閣、半田海運株式会社、長崎船舶装備株式会社、株式会社カステラ本舗福砂屋、日本紙工印刷株式会社、株式会社鈴木商店、松藤商事株式会社、長崎魚市株式会社、中村倉庫株式会社、東洋装設株式会社、株式会社コミュニティメディア、株式会社長崎経済研究所

福島 健一、津田 尚幸、中富 昌夫

IV. 岩手サイト

■共催

盛岡市、公益財団法人 岩手県国際交流協会

■後援

岩手県、財団法人 盛岡市国際交流協会、盛岡市教育委員会、北東北・日本アメリカ協会、公益財団法人 盛岡コンベンション協会、国立大学法人岩手大学、公立大学法人 岩手県立大学、一般財団法人岩手県青少年会館

■協力

盛岡広域振興局、岩手県立大学災害復興支援センター、ホテルメトロポリタン盛岡、宮古市役所、グリーンピア三陸みやこ、浄土ヶ浜レストハウス、三陸鉄道株式会社、株式会社川徳、岩手埋蔵文化財センター、小岩井農牧株式会社

■協賛

第65回日米学生会議 in 岩手開催サポート委員会

■賛助

岩泉町、株式会社アイ・シー・エス、株式会社岩手銀行、株式会社岩鑄、一般社団法人 岩手県建設業協会、公益財団法人 岩手県土木技術振興協会、国立大学法人 岩手大学、岩手トヨペット 株式会社、株式会社 岩手日報社、株式会社 大沢会計&人事コンサルティング、川口印刷工業株式会社、株式会社 久慈設計、学校法人 瀧澤学館、株式会

社 東北銀行、株式会社中村商会、東野建設工業株式会社、株式会社日立製作所、株式会社平金商店、富士通株式会社、みちのくコココーラボトリング株式会社、盛岡ガス株式会社、盛岡商工会議所、菱和建设株式会社、イオンスーパーセンター株式会社、株式会社今弘商店、株式会社今弘スチール、岩館電気株式会社、株式会社岩手情報システム、岩手日日新聞社、昭栄建設株式会社、株式会社ネクスト、一般財団法人みちのく愛隣協会 東八幡平病院、株式会社ヒューマンライフ、盛岡ターミナルビル株式会社、株式会社IBC 岩手放送、株式会社いわぎんクレジットサービス、株式会社いわぎんディーシーカード、いわぎんリースデータ株式会社、岩手地所株式会社、共益商事株式会社、櫻山神社、三田農林株式会社、株式会社小林精機

岩間 隆、内村 博、大関 潤一、邨野 善義、阿部 まな、今泉 敏朗、大久保 慶昭、高橋 浩進、日山 忠、赤津 征男、阿部 健、阿部 忠一、伊藤 昇太郎、大矢 喜久男、小原 勝、笠原 光雄、後藤 百合子、佐々木 淳、佐野 武史、佐藤 勝、下向 武史、杉原 永康、鈴木 浩之、瀬川 純、竹内 重徳、田村 均次、田村 幸義、中田 光雄、新沼 司、箱崎 静郎、藤原 由喜江、松岡 博、阿部 隆、亀ヶ森 力、亀ヶ森 裕子、中村 利昭、横沢 善夫

●広報活動

- 鶴尾 寧 慶應義塾大学 学生部国際交流支援グループ課長
- 上田 千尋 慶應義塾大学 学生部国際交流支援グループ 国際連携推進室 (OGI) 主任 塾長室 (企画担当)
- 笠貫 華子 ブルー・バンブー株式会社 営業企画局
- 山中 あすか ブルー・バンブー株式会社 制作局 チーフディレクター
- 福田 好一 東京工業大学 国際部 国際事業課国際事業グループ
- 小島 准 法政大学国際交流センター
- 勇元 信彦 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科事務室 アメリカ研究所事務室
- 日下 夕紀子 筑波大学国際部国際企画課 国際企画担当
- 鷹巣 明美 筑波大学国際部国際企画課 係長 (国際企画担当)
- 夏本 華芳 東京大学 本部国際企画課
- 山本 則子 東京大学 医学部 健康総合学科教授
- 寺迫 正廣 大阪府立大学 副学長 (国際交流担当) 国際交流推進機構長
- 栗林 知美 大阪府立大学国際交流総括
- 市村 真希 立命館大学 情報理工学部
- 敦賀 和外 大阪大学 特任准教授
- 植木 泰江 立命館大学 国際部 海外留学課

- 中川 典子 立命館大学 国際部海外留学課 (BKC 国際教育センター) 課長補佐
- 逢坂 豪 早稲田大学 総長室 経営企画課
- 杉浦 絵里 明治大学 国際教育事務室
- 中邑 啓子 国際基督教大学大学院教育研究所 研究員 (非常勤)
- 山本 東生 第16・17回日米学生会議 参加者
- 西田 尚弘 第34・35回日米学生会議 参加者
- 木ノ上 高章 第36回日米学生会議 参加者
- 武田 興欣 第39回日米学生会議 参加者

●選考活動

- 勇元 信彦 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科事務室 アメリカ研究所事務室
- 亀田 尚己 同志社大学 商学部商学科 教授
- 竹本 秀人 国際ウェールズ環境総研 代表
- 金谷 憲 東京学芸大学 特任教授
- 今井 義典 立命館大学 客員教授
- 高橋 泰 国際医療福祉大学 教授
- 田辺 和子 日本女子大学 教授
- 金井 隆 株式会社三菱東京UFJ銀行 企画部 主計室 調査役
- 西田 尚弘 パークレイズ・キャピタル証券株式会社

マネージングディレクター 投資銀行部門
ストラクチャード・ファイナンス部長

●春合宿

- 綾部 功 東海大学 文学部英語文化コミュニケーション学科 准教授
- Kimberly Julien 第63・64回日米学生会議 アメリカ側参加者

●沖縄研修

■沖縄サポート委員会

- 比嘉 幹郎 ガリオア・フルブライト 沖縄同窓会 会長
- 大城 美樹雄 名桜大学 国際学群 講師
- 奥 キヌ子 株式会社レキオファーマ 代表取締役
- 野口 安計 株式会社時事通信社 那覇支局 支局長
- 城所 望 石垣市 保健福祉部 健康福祉センター 医師
- 佐藤 学 沖縄国際大学 法学部教授
- 洲鎌 孝 万国医療津梁創出事業 プロジェクトマネージャー
- 平良 誠 浦添市 福祉事務所 保護課 主任

■協力者

- 長野 悠人 ナイジェリア大使館 二等書記官

第7章 日米学生会議にご協力頂いた方々

河野 裕子	外務省 北米局 日米地位協定室		(命を守る会) 代表
小野 行人	外務省 北米局 日米地位協定室	安次 富浩	へり基地反対協議会 代表
浦崎 綾	在日米海兵隊基地 在沖縄米海兵隊 バトラー基地司令部 外交政策部 渉外官	沖縄市	市史編集 ご担当者様
Koichiro Nakamoto	在日米海兵隊基地 在沖縄米海兵隊 バトラー基地司令部 外交政策部 渉外官	沖縄タイムス	ご担当者様
Robert D. Eldridge	在沖米海兵隊外交政策部 副参謀長 補佐官	琉球 新報	ご担当者様
Col. William J. Truax Jr.	在沖米海兵隊外交政策部 参謀長 補佐官	山内 徳信	参議院議員
名城 政次郎	学校法人尚学学園 理事長	大田 昌秀	沖縄国際平和研究所 主宰
名城 政一郎	学校法人尚学学園副理事長	阿部 小涼	琉球大学 准教授
名城 おりえ	学校法人尚学学園 異文化交流プログラム室 主任	田仲 康博	国際基督教大学 准教授
興座 宏章	学校法人沖縄尚学高等学校 教頭	城間 雪子	ドミトリー沖縄 オーナー
ブースクリ のり子	学校法人沖縄尚学高等学校 国際コース 教員	島袋 由乃	ゆいバス
新里 歩	学校法人沖縄尚学高等学校 国際コース 教員	井上 聡美	第 62・63 回日米学生会議 参加者
山内 榮	琉球大学 非常勤講師	下地 邦弘	第 62・63 回日米学生会議 参加者
屋良 朝博	フリージャーナリスト	山田 晃永	第 62・63 回日米学生会議 参加者
西川 征夫	へり基地建設阻止協議会	石川 恵	第 63 回日米学生会議 参加者
		大宮 透	第 63 回日米学生会議 参加者
		Tome Emma	第 63 回日米学生会議参加者
		■ 沖縄自主研修勉強会参加者	
		朴 雄雪	沖縄尚学高等学校 国際コース
		知名 圭太	沖縄尚学高等学校 国際コース
		清永 晃年	沖縄尚学高等学校 国際コース
		石川 佳奈実	沖縄尚学高等学校 国際コース
		嘉手川 瑞姫	沖縄尚学高等学校 国際コース
		金城 奈津海	沖縄尚学高等学校 国際コース
		金城 真希乃	沖縄尚学高等学校 国際コース
		柴田 かさ音	沖縄尚学高等学校 国際コース
		松本 萌香	沖縄尚学高等学校 国際コース

陳 映	沖縄尚学高等学校 国際コース
ピーターソン・マリナ	沖縄尚学高等学校 国際コース
大木 佳奈	沖縄尚学高等学校 国際コース
平田 果那	沖縄尚学高等学校 国際コース
平安山 絢香	沖縄尚学高等学校 国際コース
池村 雅代	沖縄国際大学 経済学部経済学科
平安名 常之	沖縄国際大学法学部地域行政学科
仲村 隆寛	沖縄国際大学法学部地域行政学科
玉城 奈未子	沖縄国際大学法学部地域行政学科
中村 友香	沖縄国際大学法学部地域行政学科
島袋 茉那美	沖縄国際大学法学部地域行政学科
仲嶺 迅香	沖縄国際大学法学部地域行政学科
仲地 恵美	沖縄国際大学法学部地域行政学科
加賀 若菜	琉球大学観光産業科学部 観光化学科
能美 康彦	琉球大学 医学部医学科
新本 健太郎	琉球大学 観光産業科学部 産業経営学科
小坂 拓也	琉球大学 医学部医学科
外間 完信	琉球大学 法文学部 総合社会システム学科 政治・国際関係論専攻
橋本 安樹	琉球大学 農学部亜熱帯農 林環境科学科
朝永 絵里香	琉球大学 観光産業科学部 観光化学科
志良堂 かなさ	早稲田大学 文学部文学科 教育学専修
春山 桂亮	法政大学 法学部法律学科
高垣 祐郷	京都大学 法学部

●防衛大学校研修

國分 良成	防衛大学校 学校長
坂口 大作	防衛大学校 教授
加藤 健	防衛大学校 准教授
田中 祐紀	防衛大学校 132 小隊 広報専門官はじめその他防衛大学校の皆様

●日米学生会議同窓会協力者

秋間 修	天野 順一	飯田 智紀
伊丹 吉彦	今井 義典	岩崎 洋一郎
梅崎 渉	大高 巽	大塚 雄三
岡本 実	岸田 守	木ノ上 高章
小林 規威	杉本 友里	竹内 幸美
竹本 秀人	辻 喜久子	富川 秀二
富永 宏	中瀬 正一	中山 智夫
西田 尚弘	乗竹 亮治	橋本 徹
橋本 遥	花田 愛	福谷 尚久
グレン・S・フクシマ	橘・フクシマ	・咲江
降旗 健人	細野 恭平	松本 秀也
宮崎 久	森田 正英	八木 健
山田 英二	山田 勝	山田 良子
山室 勇臣	山本 東生	和田 昭穂

●各開催地

I. 京都サイト

■協力者	
天江 喜七郎	元特命全権大使
忽那 武範	公益財団法人稲盛財団 理事・事務局長
檜物 省一	公益財団法人稲盛財団 事務局次長 管理部長兼 経理財務部副部長

第7章 日米学生会議にご協力頂いた方々

森 純一	京都大学 国際交流推進機構長 国際企画連携部門長	熊沢 輝一	管理部総務課 総務係長 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構総合 地球環境学研究所 研究推進戦略センター助教
馬場 貴司	京都大学 研究国際部 留学生課 課長補佐	スティーブン マックグリービー	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構総合地球 環境学研究所 研究推進戦略センター 特任助教
藤木 清文	京都大学 医学部 医学科 研究科 芝蘭会館事務室	ナイス ダニエル	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 研究推進戦略センター 成果公開・広報部門 助教
小島 誠二	外務省 関西特命全権大使	山本 浩司	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 管理部研究協力課 研究支援室研究支援係
岡田 有紀	外務省 大阪分室	山本 正彦	内閣府迎賓館 京都事務所 庶務課長
山田 啓二	京都府 知事	上田 晃浩	内閣府迎賓館 京都事務所 庶務係長
藤田 裕之	京都市 副市長	大森 直美	AIU 高校生国際交流プログラム 副事務局長
道輪 優理子	京都市 国際化推進室	甲斐 絢	AIU 高校生国際交流プログラム 企画主任
糟谷 範子	京都市国際課推進室室長	井上 博斗	AIU 高校生国際交流プログラム 事務局
キース・ロメル	駐大阪・神戸米国総領事館 広報担当領事兼関西 アメリカンセンター館長	北村 豊	裏千家 東京出張所 部長
中西 えり	関西アメリカンセンター		
鈴木 晶子	京都大学大学院 教育研究科 副研究科長		
山川 彰宏	都道府県会館 京都府東京事務所副主査		
衣笠 崇	賀茂御祖神社（下鴨神社） 奉養課長 事業課長		
嵯峨井 建	賀茂御祖神社（下鴨神社） 禰宜		
阿部 健一	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 研究推進戦略センター 成果公開・広報部門 部門長 教授		
植村 博樹	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所		

高嶋 学 裏千家 一般社団法人茶道
裏千家淡交会
総本部渉外・広報部長

有田 外喜彦 裏千家 一般社団法人茶道
裏千家淡交会総本部
国際部 主査

ブルース・濱名 裏千家 一般社団法人茶道
裏千家淡交会
総本部国際部 課長

植木 泰江 立命館大学 国際部
海外留学課 課長

中川 典子 立命館大学 国際部
海外留学課
(BKC 国際教育センター)
課長補佐

田中 秀具 株式会社クレオテックキャンパス
管理部 滋賀管理課
BKC 国際寮担当

佐藤 剛志 朝日新聞 京都総局

中野 拓 名鉄観光サービス株式会社

細川 万理子 京都商工会議所

竹本 秀人 第16回日米学生会議
参加者

今井 義典 第17回日米学生会議
参加者

II. 長崎サイト

■長崎サポート委員会

委員長

上田 良樹 長崎日米協会 会長/
長崎放送株式会社
代表取締役

事務局長

安田 正次 長崎日米協会 事務局長/
株式会社長崎経済研究所
文化事業部 部長兼事務局長

委員

荒田 忠幸 長崎県文化観光物産局
国際課課長

平山 百合子 長崎県文化観光物産局
国際課主任主事

柴原 慎一 長崎市 文化観光部
国際課 課長

羽佐古 潤二郎
長崎市 文化観光部
国際課 係長

上田 恵三 長崎商工会議所 会頭

吉野 明文 長崎商工会議所 事務局長

後藤 佳彦 社団法人長崎国際観光
コンベンション協会 事務局長

粟屋 曠 学校法人長崎学院 理事長

南津 佳広 長崎外国語大学 講師

米田 利己 株式会社コミュニティメディア
代表取締役

陣野 慧 株式会社東海貿易
代表取締役

和泉 謙吾 株式会社東海貿易
担当主任

古田 美子 長崎日米協会事務局
事務局次長

中村 渚 長崎日米協会事務局
事務局

北川 笙子 長崎日米協会事務局
事務局

第7章 日米学生会議にご協力頂いた方々

山川 信彦 佐世保日米協会 事務局長
浦 慎吾 佐世保日米協会
事務局 主任調査役

■協力者

中村 法道 長崎県 知事
石塚 孝 長崎県 副知事
中川 幸久 長崎県 教育庁 教育次長
荒田 忠幸 長崎県 国際課 課長
田上 富久 長崎市 市長
馬場 豊子 長崎市 教育委員会教育長
柴原 慎一 長崎市 国際課 課長
朝長 則男 佐世保市 市長
西本 眞也 佐世保市 企画部 部長
末長 隆 佐世保市 企画部
国際課 課長
大山 健一郎 佐世保市 企画部
国際課 主任主事

Charles W. Rock

米海軍 佐世保基地
米海軍大佐・司令官

智多 正信 国立長崎原爆死没者
平和祈念館 館長

山脇 佳朗 公益財団法人長崎平和
推進協会 被爆者語り部

前田 稔 長崎・セントポール姉妹
都市委員会

坂井 俊之 長崎経済同友会代表幹事

太田 博道 長崎県立大学学長

溝田 勉 長崎外国語大学講師

長崎外国語大学通訳・翻訳専門プログラムの
学生の皆様

鈴木 一郎 株式会社鈴木商店

代表取締役会長
中村 重敏 中村倉庫株式会社
代表取締役社長

反田 邦彦 半田海運株式会社
代表取締役社長

住吉 康英 ハウステンボス株式会社
東京支社

桑宮 和久 ホテルマネージメント
インターナショナル株式会社
販売課 販売支配人

木下 晃一 ホテルマネージメント
インターナショナル株式会社
予約課 マネージャー

西村 正孝 三菱重工株式会社船舶・
海洋事業本部長崎船海管理部
企画課 課長

青柳 勇 三菱重工株式会社船舶・
海洋事業本部長崎船海管理部
企画課 主席部員

山口 寛明 第62回日米学生会議参加者

岡野 慧 第62・63回日米学生会議
参加者

Ⅲ. 岩手サイト

■岩手サポート委員会

会長

高橋 真裕 株式会社岩手銀行 頭取

副会長

谷口 誠 北東北・日本アメリカ協会 会長
平山健一 公益財団法人岩手県国際交流協会
理事長

委員

三浦 宏 財団法人盛岡国際交流協会
理事長

藤井 克己 国立大学法人岩手大学 学長

中村 慶久 公立大学法人岩手県立大学
学長/副理事長

元持 勝利 岩手県商工会議所連合会
会長/盛岡商工会議所会頭

千葉 庄悦 岩手県商工会連合会 会長

谷村 久興 岩手県中小企業団体中央会
会長

佐藤 安紀 社団法人岩手県経営者協会
会長

監事

大澤 英夫 株式会社大沢会計&人事
コンサルタント代表取締役

事務局担当委員

邨野 善義 株式会社アイ・シー・エス
取締役会長

藤井 茂 財団法人新渡戸基金
事務局長

今泉 敏朗 株式会社岩手銀行 顧問

■協力者

達増 拓也 岩手県 知事

畠山 智禎 岩手県 企業局 次長

杉原 永康 岩手県 盛岡広域振興局
局長

阿部 忠一 岩手県 農林水産部
森林整備課 総括課長

中村 一郎 岩手県 政策地域部 部長

菊池 哲 岩手県 政策地域部
政策推進室 政策監

松川 章 岩手県 政策地域部
NPO・文化国際課
参事兼総括課長

石木田 浩美 岩手県 政策地域部
NPO・文化国際課
文化振興担当 課長

伊藤 義学 岩手県 政策地域部
NPO・文化国際課 主査

アマンダ・クリスプ
岩手県 政策地域部
NPO・文化国際課
国際交流員

イアン・サトル 岩手県 政策地域部
NPO・文化国際課
国際交流員

下向 武史 岩手県 政策地域部
地域振興室地域情報化担当

瀬川 浩昭 岩手県 県南広域振興局
経営企画部 産業振興課
特命課長
(ものづくり・人材育成)

小田島 ルミ子 岩手県 秘書室広報室
広聴広報課 主任

谷藤 裕明 盛岡市 市長

佐藤 光彦 盛岡市 副市長

細川 恒 盛岡市 市民部 部長

沼田 由子 盛岡市 市民部 次長

佐々木 幸司 盛岡市 市民部
文化国際課 課長

赤坂 照雄 盛岡市 市民部
文化国際課 副主幹

関田 あい 盛岡市 市民部
文化国際課 主事

第7章 日米学生会議にご協力頂いた方々

伊藤 たみ子	盛岡市 市民部文化国際課		研究交流部 国際課 課長
菅原 実香子	盛岡市 市民部文化国際課	高前田 寿幸	公立大学法人岩手県立大学 理事長
岡市 和敏	盛岡市 市民部 市民協働推進課 課長補佐兼文化国際室長	瀬川 純	公立大学法人岩手県立大学 専務理事/副学長/事務局長
沼田 秀彦	盛岡市 商工観光部 参事兼商工課長	鈴木 清也	公立大学法人岩手県立大学 教育研究支援室
菅原 文江	盛岡市 教育委員会事務局 学校 教育課 指導主事		地域連携室 教育研究 支援室長 地域連携室長
山本 正徳	宮古市 市長	山本 克彦	公立大学法人岩手県立大学 准教授
伊達 勝身	岩泉町 町長	野澤 日出夫	小岩井農場株式会社 特別常任顧問
澤口 光治	岩泉町 総務課秘書人事室		
永嶺 庸子	公益財団法人盛岡コンベンション 協会 観光コンベンション部 コンベンション課 主任	荒川 晴雄	小岩井農場株式会社 取締役 本社総括部長 管理部長
平山 健一	岩手県国際交流協会 理事長	高橋 敏明	小岩井農場株式会社 まきば園 課長代理
稲田 収	岩手県国際交流協会 常務理事	長沼 淳	小岩井農場株式会社 まきば園
太田 和男	岩手県国際交流協会 常務理事	畠山茂 Gerry	小岩井農場株式会社 まきば園営業マネージャー
宮 順子	岩手県国際交流協会 事務局次長	望月 正彦	三陸鉄道株式会社 代表取締役社長
加藤 俊明	岩手県国際交流協会 スタッフ	坂下 政幸	三陸鉄道株式会社 取締役事業本部長
関 美梨	岩手県国際交流協会 スタッフ	三浦 芳範	三陸鉄道株式会社 旅客サービス部営業課課長
渡辺 充行	地球市民の会 おでって 代表	玉澤 徳一郎	元衆議院議員 防衛庁長官、 元農林水産大臣
廣田 淳	岩手県商工会議所連合会 盛岡商工会議所 専務理事	小林 昭榮	田老町漁業協同組合 代表理事組合長
内川 永一郎	財団法人新渡戸基金 理事長	箱石 英夫	たろちゃん協働組合 理事長
上杉 明	国立大学法人岩手大学		

八重樫 綾子 いわて GINGA-NET 代表
 鈴木 雅雄 財団法人岩手県青少年会館
 事務局長
 中村 晋郎 株式会社川徳 常務取締役
 中村 英俊 岩手埋蔵文化センター
 大見山 俊雄 盛岡ターミナルビル株式会社
 取締役社長
 船越 博之 グリーンピア三陸みやこ
 支配人
 島崎 準 社団法人 宮古観光協会
 浄土ヶ浜レストハウス
 営業 主任
 元田 久美子 社団法人 宮古観光協会
 学ぶ防災ガイド
 鎌田 英樹 株式会社 IBC 岩手放送
 代表取締役社長
 中山 秀輝 NHK 盛岡放送局ニュースデスク
 船村 武史 NHK 秋田放送局 記者
 細川 克也 岩手日報者 編集局
 報道部 次長
 黒田 大介 岩手日報者 編集局
 報道部 記者
 森岡 誠 田んぼアート実行委員会
 会長
 松本 順 みちのりホールディングス
 代表取締役社長
 八重樫 真 岩手県北自動車株式会社
 高野 剛 福島交通株式会社
 平竹 雅人 第44・45回日米学生会議
 参加者
 乗竹 亮治 第54・55回日米学生会議
 参加者

<ホームステイにご協力頂いた方々>

工藤 善規 内田 佳子 菊池 礼子
 畠山 正 川村 武男 高橋 薫
 鈴木 智恵子 北田 泰之 高橋 昭喜
 竹田 理佐 小苺米 淳一 黄川田 純子
 高橋 秀彰 松森 一三 吉田 雅子
 福田 敏江 片野 孝之 佐藤 圭
 阿部 博 重 浩一郎 佐藤 由希
 金田一 恵美子 中村 道典 藤野 薫
 杉浦 学 橋本 紀子 工藤 弘幸
 大坊 一男 佐藤 善子 佐藤 律子
 大森 不二夫 佐藤 昭人 伊藤 伶
 藤澤 徹 森 敬司

IV. 東京サイト

カート・トン 米国大使館 首席公使
 丸本 美加 米国大使館 首席公使夫人
 Sara Harriger 米国大使館 職員
 落合 安代 米国大使館 職員
 小泉 進次郎 衆議院議員
 中島 清徳 衆議院議員 小泉進次郎事務所
 秘書
 佐藤 茜 衆議院議員 小泉進次郎事務所
 秘書
 梅原 聖之 デロイト トーマツ
 コンサルティング株式会社
 人事部 マネージャー
 岩鶴 香緒里 デロイト トーマツ
 コンサルティング株式会社
 管理部 人事グループ
 岩渕 匡敦 デロイト トーマツ
 コンサルティング株式会社
 コンサルタント

第7章 日米学生会議にご協力頂いた方々

川上 量生	株式会社ドワンゴ 代表取締役 会長CTO	三上 大輔	花の民 小菊・熱帯果樹園 苗の生産 花卉園芸 代表
石津 大輔	株式会社ドワンゴ ニュースプラットフォーム部 ニュースプラットフォーム セクション	秋田 昌子	墨田区 福祉保健部 保健衛生担当 保健計画課 保健計画担当 主査/管理栄養士
細貝 孝司	NHK青山荘 支配人	青島 節子	すみだ食育 good ネット 食育普及啓発事業部 部長
内田 敦美	NHK青山荘 副支配人	古井 和美	すみだ食育 good ネット 事務局 事務局長
旦 裕介	東海大学 教授	白川 幸子	すみだ食育 good ネット good ネット推進事業副部長
今井 義典	第17回日米学生会議 参加者	三浦 孝則	特定非営利活動法人すみだ 学習ガーデン 事務局 (メディアコーナー)
山本 東生	第16・17回日米学生会議 参加者	東 博暢	日本総研 総合研究部門 戦略コンサルティング部 融合戦略クラスター クラスター長
武田 興欣	第39回日米学生会議 参加者	古賀 啓一	日本総研 総合研究部門 公共コンサルティング部 コンサルタント

●各分科会活動事前活動

■アジア太平洋地域における日米安全保障

岡林 一郎 元サハリン日本センター所長

■グローバル化と食の安全保障

有本 幸泰 イオントップバリュ株式会社
マーケティング担当

小倉 東一 植物工場研究センター
統括コーディネーター

栗国 智光 那覇市第一牧志公設市場
組合長

上江洲 恵子 第65回日米学生会議
参加者保護者

西田 公一 沖縄県 農林水産部
営業支援課
営農担い手班 主任技師

小林 貴文

森岡 誠

今泉 敏朗

農林水産省 大臣官房
食料安全保障課
総務班統括係

田んぼアート実行委員会
会長

株式会社岩手銀行 顧問

■市民と政府の役割と責任

湯浅 誠 社会運動家
 青木 大和 高校生有志団体
 「僕らの一歩が日本を変える。」
 代表

■現代における日米両国の教育問題

田村 哲夫 学校法人渋谷教育学園 理事長
 日本ユネスコ国内委員会会長
 田河 真奈美 学校法人渋谷教育学園
 理事長秘書
 高際 伊都子 学校法人渋谷教育学園
 渋谷中学高等学校 副校長
 田村 聡明 学校法人渋谷教育学園
 幕張中学高等学校 副校長
 長谷川 智 文部科学省大臣官房総務課
 法令審議室 審議第二係
 専門職
 古田 雄一 筑波大学大学院 博士課程
 人間総合科学研究科
 教育基礎学専攻

■環境問題と社会

山口 雄司 一般財団法人日本エネルギー
 経済研究所戦略研究ユニット
 原子力グループ 研究員
 下郡 けい 一般財団法人日本エネルギー
 経済研究所戦略研究ユニット
 原子力グループ 研究員
 西村 純一 東燃ゼネラル石油株式会社
 中央研究所長
 古関 恵一 東燃ゼネラル石油株式会社
 中央研究所 戦略企画・

調査部長

野澤 昌史 日本政策投資銀行
 環境・CSR部 調査役
 堀抜 功二 第54・55回日米学生会議
 参加者

■マイノリティと差別

吉田 香織 Colori Cafe 店長
 高城 順 部落解放同盟東京連合会
 品川支部書記長
 北川 京子 部落解放同盟東京連合会
 墨田支部
 岩田 明夫 産業・教育資料室
 小貫 大輔 東海大学 教養学部 教授
 Oh Hyangson 朝鮮大学校 学生
 Song Il 朝鮮大学校 学生
 Lee Changhyon 朝鮮大学校 学生
 Bae Jang Il 朝鮮大学校 学生
 出口 真紀子 第39・40回日米学生会議
 参加者

■情報技術と文化

中村 仁彦 東京大学 大学院情報理工学
 系研究科知能機械情報学専攻
 教授
 嶋田 浩子 Twitter Japan 株式会社

●賛助団体・企業、賛助者

一般社団法人 日米協会
大阪日米協会
京都日米協会
公益財団法人三菱 UFJ 国際財団
公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人平和中島財団
独立行政法人国際交流基金
一般社団法人長崎国際観光コンベンション協会
長崎サポート委員会
岩手サポート委員会
日米学生会議同窓会
東日本旅客鉄道株式会社
EMG マーケティング合同会社
協和発酵キリン株式会社
住友商事株式会社
オタフクソース株式会社
UBS 証券株式会社
市川 比呂也
井上 雅章
今井義典
小林 美和子
山本 修己

アサヒグループホールディングス株式会社
伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
オリックス株式会社
キッコーマン株式会社
キヤノン株式会社
株式会社三和
新日鐵住金株式会社

株式会社セブン&アイ・ホールディングス
禅林寺

デルタ航空会社
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
株式会社ニコン
日産自動車株式会社
株式会社日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
日本電信電話株式会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
ベイビュー・アセット・マネジメント株式
会社
丸紅株式会社
三井不動産株式会社
三井物産株式会社
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京 UFJ 銀行
三菱 UFJ リース株式会社
メリックス株式会社

第7章 日米学生会議にご協力頂いた方々

今井 義典

岡本 実

北城 恪太郎

橘・フクシマ・咲江

堤 清二

富川 秀二

南原 晃

西田 尚弘

橋本 徹

平竹 雅人

八木 健

山田 勝

和田 昭徳

第 65 回日米学生会議 日本側報告書

発行日 2014 年 2 月

編集者 飯島 千咲 市毛 裕史
川野 さりあ 竹内 正人
野口 ゆかり 森田 修弘
ヴー ホアン ミン 横田 真彩

発行 日米学生会議報告書編集委員会
〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷 1-21
一般財団法人国際教育振興会内
日米学生会議事務局

印刷 北新印刷(株)

**Japan-America Student
Conference
Since 1934**

主 催：一般財団法人国際教育振興会

企画・運営：第 65 回日米学生会議実行委員会